

黒上正一郎著

聖徳太子の信仰思想と日本文化創業

語義の解説

語義の解説を作成するにあたりて

本年の霧島合宿に於いては、本書の輪読が四時間三〇分もの長時間に亘つて真剣に取組まれました。これは画期的な営みであり、道統をうけ継ぐんとする決意の現はれとしてこの上ない喜びでした。しかし難解な語句の解説に時間を費して肝心の輪読が思ふやうにはかどらなかつたやにも聞き及んでをります。

私は、前々から本書が難解の故に通読されまいであることを残念に思ひ、語義の解説を少しづつ手がけてゐたのですが、一昨年秋より約一年間に亘り、夜久正雄・小柳陽太郎両先輩に並々ならぬお手数を煩し、多大の御教示を得て一応全巻の検討は終了しました。そして昨年試みに95頁までの解説を作成したので、未だ不明の箇所、検討を要する箇所が多々あり、完璧を期したいとの考へからその後の解説を躊躇してゐた次第です。

しかし本書の研鑽に真剣に取組む気運が生じてきた

現在、不備かつ用語も適切でなく、誤謬もあるかと思ひますが、研鑽の一助になればと思ひ、私よりの解説を敢へて高覧に供する次第です。同信諸兄のご研鑽によつて不備誤謬を指摘いただき、同信協力のもとにより良き解説に改訂してゆきたいと考へてをります。

かつて取務上の困難な事態に逢着した際、本書を味読することによつて幾度か光明を見出し、導かれたことが——本書が人生の導きの書であることに感謝しつつ、同信諸兄が通読され、研鑽に励まれることを念願してをります。

昭和五十四年十一月

松吉基順

〒145 東京都大田区東雲谷三一九一二

電話 〇三―七二七―三〇四六


凡例

一、黒上先生は、聖徳太子を憶念されるに當つて、大御言葉、大御心など、天皇に對する敬語の「大」を付してせられる。ところが戦後復刊に際し「大」を削除した箇所と、残された箇所とがあり、統一を欠けてゐる。私は、黒上先生が太子を憶念されたお心のままを踏襲したいと思つてゐるが、その為には紙型を全面的に変更する必要があるので、この改訂は將來にまつことと致したい。

二、天皇のお名前を記す際は、上の一字を空欄にするのが戦前の慣例であつた。本書は概ねこれに従つてゐるが、一部統一を欠いてゐる。

三、戦前版は經典原文は漢文で記してあつたので、太子義疏と區別できた。戦後版は書き下し文なので、經典原文を「」にするが、ゴシック活字にするべきであらう。二、及びこの件も將來の改訂にまつことと致したい。

四、加除訂正について

現行版（昭和53年5月補正版・綠表紙）は数ヶ所を除き補正者であるが、初版（昭和41年3月復刊・黒表紙）、旧版（昭和46年10月第三刷・綠表紙）は、相当数の補正箇所があるので、と指摘した。五、ルビに関する原則

（一）和語は歴史的仮名遣、漢字音は現代仮名遣とする。本書は統一されてゐないが、改訂は將來にまつ。

（二）佛敎語の場合は佛語訓み（吳音が多い。例へば、教化、微妙、至聖）とし、それ以外は通常の訓みを原則とするが、區別し難い箇所は併記した。

（三）解説を要しな思はれる語はとした。

六、上欄の数字は、その頁における行数を示す。

七、文章全部を解説した場合はとした。

1 大乘佛教 乘とは倍りに導く教法を來物に喩へた語。

大乘とは自己のみの救ひを求めず、他の人々を救ふのを先にして、共に佛の倍りの境地に導かうとするもので、小乘（自己のみの倍りを求める）に對する語。日本に伝へられたのは殆どが大乗佛教である。p14に大乘小乘に關する太子の「解説」がある。

3 朝宗 春に謁するのを朝、夏に謁するのを宗といひ、

昔支那で諸侯が天子に拜謁するの意。転じて河水が海にあつまり流れこむ意ともなる。ここでは佛教や儒教があが日本の皇室を慕つて伝へられてきたとの意が背後にあり、しかも国民生活に融けこんださまを言ふ。

3 融化 融けあつて一つになるさま。

2 蒼生 国民（佛教語では「せうしやう」と訓む）。

2 3 実生活の複雑閑静と不断転化の裡に実現

【現代語訳】

人間の現実生活は、全ての人々や集團相互の複雑な關係のもとに成りたつてをり、しかもそれには絶えず移り変つてゆくものであるが、その現実生活から遊離することなく国民が共に求め向ふべき大道を、現実人生の中に於て体得され、実現された。

7 大御後威 天皇の御威徳。（現ルビ「みいづも諒」）

りではないが、諸橋、大槻、広辞苑など「みいづ」とあり、濁らず訓みたい）

7 皇化 天皇の徳化。

10 哀愍教化 あはれみ、いつくしみ、教へ導いて感化し、善に進ましめる。（佛語では「あいみんきよ

け」と訓む）

10 憶念 対象と同じ心になつて憶ひ、心に深く銘記（する）

11 博綜 大きく広く、すべてをさめる。

13 儒家 孔子を祖とする道德政治の教へを儒教といひ、

その学派を杯す。

13 法象 天下を治めるには道德よりも法律が重要である

と説く古代支那の学派。管仲、韓非子など。

15、3頁 1 上宮御製疏 聖徳太子の著した三経

義疏、即ち法華経、維摩経、勝鬘経の解説書。

疏は漢音「せ」吳音「しよ」で、どこほりなく

通するの意。義疏とは經典の意義を解釈した書。

3頁

1 正しく

6 7 東の天皇敬んで西の皇帝に白す

P 25、大系本、朝日など右のやうに訓んでゐるが、

東、西は意訳的な訓み方であり、漢字音で訓む方

がよいのではないか。要検討。

7 志気決量 志気は事を成さうとする意気込み。その

大きく広いさま。

7 8 本朝の中華たる所以 わが国こそ世界の中心をな

す国であるといふはれ。支那を中華とすること

に對する厳しい批判。

10 国民的信念 日本人として生きてゐる国民全体

4頁

1 三経義疏 吳音は「しよ」

1 衆生 一切の生きもの。通常全ての人間をいふ。

2 群生 多くの人々。

11 眞諦俗諦の相依 宗教生活の理想と現実生活の理想

とが表裏一体となつて互に実現のより処となる。

P 5に著者の解説あり。

14 聖徳皇

14 歸命 南無、帰依に同じ。絶對の信を捧げてより処

とする。

15 王法 王たる者が守り行ふべき正しい政治のあり方。

5頁

1 伝存覚作 存賞(本願寺第三世覚如の長子。AD 1332

84才)が作つたと伝へられてゐる太子の徳を讃賞する儀式。

1 護仰 ごうやう その徳を護めたたへ、仰ぎ慕ふ。「さんぎきょう」とも訓む。

9 外護者 げごしや 権力や財力によつて外部より佛教を保護し、

障害を除いてその伝道に便宜を与へてくれる人。

10 趣向 すうきやう おもひき進むべき方向。

13 ルビ 御身親ごんみみづか

6頁

2 衰頹 すいたい おとろへくつれる。

4 統授 とうせつ 統べをさめる。

4 遺教 ゆいまふ 釈尊の説きのこさした教へ。

7頁

1 宿弊 しゆくへい 古くから積み重つてきた弊害。

8 流通分 りゅうつぶん 佛教の教典は通常、序説、正説、流通説の

三つに分けられる。流通分は所説の教法を後代に

流伝することを弟子に委嘱する経典最後の箇所

8 聖教 しやうきやう 佛や聖者の説いた教へ。

10 大聖 だいしやう 偉大な聖者。釈迦を称す。(ミ)とを説いた言下。

13 信解品 しんげほん 法華経の中で、教へを信じて解脱に進む

13 大乘の解を失へる衆生 だいじやうがしよな 大乘の教への真理を会得で

きない人々。大乘の教へについてあきらかりした

考へを見失つてゐる人々。

14 聖人 しやうじん 佛。さとりを得た人。

15 共に遷して ともうつして ここに例示した二つの經典に対するこ

見解は、二つともそのまゝ太子のご精神(無窮の

国家生活を念じ、一、国家国民を護らん P 7

の5、6行)を顕はす。

8頁

10 光闡 こうぜん あきらかに開く。

13 南闡 なんぜん ひろきあきらかにする。

9頁

3 ルビ 自ら みづか

5 踞踞 きよん 天にせぐまきり地にぬきあしする、甚だ恐れ

て身のおき処のない喩。ここでは研究を狭い範囲

にとどめることなく、の意。

4 脈絡みやくらく應おう 脈絡は筋道、条理、面容の底に流れてある精神を互に関連せしめて研鑽する。

1 降誕こうたん 君主、神佛、高僧などがこの世に生れ出る。
2 搖籃ようらん 幼児をゆり動かして慰めまた眠らせりゆりか

こゝ、転じて幼少の時代。

6 上宮王じやうきゆうおう 7 上大殿かみつおほどの

9 10 大喪たいさう 天皇の喪。

10 大漸たいぜん 病勢が段々進んで危篤になる。主(病に)に帝王いふの

11 我が大御病おほみぢまひたひらぎなむとおもほします

天皇の場合なので自称敬語を用ひてゐる。私の病気を癒したいと思ふ、の意。

2 又また 又(おほ)あまりむさか 要訂正

6 厩公しやうこう 厩の政治家、文王の子、兄の武王をたすけて

討を滅し、魯に封じられ、成王をたすけて礼樂を

作り、康王が即位するや召公と共にこれを輔佐、

文武の業を修めた。

7 菩提ぼだい 煩惱を断じて得らぬさとの習患。

11 流か 流はしむー流はしむ 要訂正

13 深妙しんみょう 甚深微妙、おく深くてみごとくな。

14 天竺てんじく 印度の古称。

15 生死しじゆ解脱げだつ 生死といふこの世の迷ひから脱してさとの世界に入る。

りの世界に入る。

5 内裏ないり 天皇の住居としての御殿。

7 曙光しやうこう 夜明けのあかり。『よ』は誤り

12 軋轆あつれき 車輪のきしむことから、紛争、不和。

4 障破しょうかい

15 菩提ぼだい 神佛に願をかける。

7 御同聴おんどうちやう

15 押山おしやま 18 頁 7 8 京師けいし

19頁

4 朝貢 外国人が本朝して貢物を奉る。

6 碩徳 碩は大の意。徳のすぐれた人。

9 内教 佛敎のこと。儒敎、道教などに對し佛敎を内敎と稱す。

9 惠慈 AD 575 年来日、法興寺に住し、615 年高麗へ歸国す。太子の法華義疏を朝鮮に伝へたといはれる。

9 外典 佛敎經典以外の典籍。

9 覚笈 參考文献見当らす。

12 王命 能く訓み方は左の諸説あるも「上宮王の命は能く」と解す。巴村円澄(王命)

大系本(王命) 雄山園(王命)

12 涅槃常住五種佛性之理を悟り

涅槃は涅槃經といふ經典。常住は永遠不滅をいふ。

五種佛性の理は、全ての人間は生れながらにして

真理を会得する性を有してゐることを佛性がある

真理を会得する性を有してゐることを佛性がある

真理を会得する性を有してゐることを佛性がある

といひ、これに五種類あることをいふ。

開代譯涅槃經に説かれてゐるところの、この世は種

種の変転あらうとも涅槃のみは永遠不滅であつて、

全ての衆生は五種類の佛性を有してゐるとの真理

を太子は悟られた。

12 法華三車 權実二智之趣を明開

○法華は法華經といふ經典。三車は法華經において

三乘(声聞乘、緣覺乘、菩薩乘)を羊車、鹿車、

牛車に喩へた敎へ。權実二智とは、權は佛が教化

のために手段をめぐらす仮りの敎へ、実は永久不

変の真理に達する絶対の敎へであり、佛はその二

つの智を兼ね備へてゐる。

開代譯法華經で説かれてゐるところの、三乘を三つ

の車に喩へた敎へ、即ち導くための手段としての

仮りの敎へと、真理に到らしめる絶対の敎へとの

二つの智慧の趣意を、太子は明かにされた。

13 維摩系思議解脫の宗に通達

○維摩は維摩經といふ經典

國代國維摩經で説がれてゐるところの、一切の煩悩

の束縛から離脱する不可思議な教への根本要旨に

太子は通達された。

13 經部 佛の滅後四〇〇年頃に生れた學派。小乘十八

部または二十部の一つで、經説を中心にする。經

量部ともいふ。

13 薩婆多 小乘二十部のうち有力だった學派。佛の滅

後三〇〇年頃に根本上座部から分派。全てが実在

すると説くところから説一切有部ともいふ。

13 三玄 老子、莊子、周易をいふ。

14 五經 儒教で尊重する五部の經書。即ち易經、詩經、

書經、春秋、禮記をいふ。 14 經疏

20頁

1 小乘 他を救ふを煩しとし、自己のみの悟りを求め

るもの。他を救ふを先とする大乘の立場から稱し

た語で、自らを大きな乘物として大乘と稱し、自

己のみの悟りを求めるのは劣れる乘物。即ち小乘

と稱した。

4 御身自ら 5 義疏 義疏レギシヨ 國代世

7 迷執 迷ひの心でもの事に執着する。

12 割切 割は大きな鏝。切る、近づくり意。割切は地

に近づいて草を切る。急所にあたる。 14 宣し

21頁

1 氏族朋黨 3 正しく

6 國司 朝廷から諸國に赴任せしめた地方官。

6 回造 上代、地方の國々の豪族の中で、中央政權に

服従して地方官となつた者。

6 率土 陸地の続くがざり。國のはまで。

6 兆民 すべての民。

7 賦斂 租税を割当て取立てる。

14 時に急緩なく、賢に遇へば自ら寛なり。

國代世の中の急(乱れる)と緩(平らに治まる)

とは、その時代そのものに原因がある力ではなく

て、政治を司る人によって乱れ治せが招来される。

従つて賢人が政治を司れば自ら平らに治まる。

15 社稷 君主が居城を建てる時に祭つた土地の神(社)と五穀の神(稷)。転じて国家をいふ。

22 頁

6 大札

15 白札

23 頁

1 大士は苦を忍びて物を度す

維摩経義疏の本文は「大士は身を生死に留めて苦を忍びて物を度す」とあり、傍線部分を補ふべきであらう。大士は菩薩の訳語。菩薩はその身を迷

ひの多い現実の世に留め、苦を忍んで衆生を救済すま、の意。

2 百濟僧勸勒 AD 602年未朝、元興寺に住んだ。天文

曆数、地理に精通してゐた。

5 蘇我馬子のこと。

6 臣

古代の姓の一つで皇別と称する諸氏かもち、姓

の中で最も尊重された。時代が下つて天武天皇が

八色姓を制定された時、有力な氏族は朝臣に昇格

し、臣は第六位の姓となる。

5 連 主として神別と称する諸氏かもち、臣とならぶ

有力氏族である。八色姓の時、一部は第三位の宿

弥に昇格、連は第七位の姓となる。

5 伴造 大和朝廷に奉仕した岳部の統率者。岳部は世

襲的な職業、技芸をもつて朝廷に仕へた人々の集団。

6 百八十部 百八十は数多くの意。部は一定の職業

をもつて朝廷に仕へる人。

6 公民 国民。天皇が主として国民を愛護されるの意

から称す。

8 烟 門戸の内外の区画を設けるために敷く横木。

9 親筆 みづから初めてお作りになられたこと。

24 頁

2 沙門 出家の総称。僧。

5 善無きや。(中略) (云々)と訂正すべきであらう。

その後の文章も、鴻臚御に謂ひて曰く「蠻夷の書

一、勿れ也」とし、傍線部分が欠落。補ふべきであつ

う。可自村江の戦ひP116を参照。

9 下客 お供の人。 12 長吏 役人のかしら。

12 蘇因高 小野妹子。「小妹子」を隋の発音で言つた。

12 室命 天の命令。

13 駿御 すゝ ↓ 臨仰す 要訂正

13 含靈並 生命あるもの。国民。

25 頁

1 比常の如けむ 近頃はあまりなくお過しのこと(で) せう。

1 鴻臚寺 外末の使者をもてなす館。鴻は大。臚は陳。

大いに接待するの意。

1 往の意 前述した私の氣持。

2 別の如し 別の目錄の通りである。

4 学生 一般学芸を学ぶ者。

5 学向僧 主として佛教を学ぶ者(学生のルビに準じた)。

9 季秋 陰曆九月。 10 ルビ 大札乎那利

26 頁

1 成敗 成功と失敗。

3 依憑 たよること。

7 文物 文化の所産。

7 薨去 皇族または三位以上の死去についていふ。

10 積弊 長年の間に積り重つた弊害。

15 名利 名譽と物質的利益。

15 存着 生きながらへ、執着する。

27 頁

2 渙發 渙は水が四方に散る。詔勅を広く天下に發布

する。 渙 ↓ 渙 要訂正

6 三空 佛・法・僧をいふ。衆生が帰依すべき対象を

ので空といふ。永久不変の真理を体得した佛陀を

佛室、佛陀の説いた教法を法室、教法を世に實現

すべく修行する僧の集団を僧室とする。僧には知

合の意がある。

9 四生 胎生、卵生、湿生、化生の四つ。

9 個我迷執 迷った心で各々個人の自我に執着する。
13 靈性 人間が生れながらにして有してある善き心。

佛語には、「此いしよ、またほ「りようしよ」と訓む。
14 建立 宮中

4 功德 善き積んで得られるめぐみ、徳。

6 敬田院 四天王寺に設けられた四院の一つ、佛の教

へに帰依して安心立命を得させる道場。

敬田 三福田(敬、恩、悲)の一つ。福田とは農夫が田

畑に播種して秋に收穫があるに喩へ、供養すべき

ものに供養すれば福報をうけるので、その供養の

対象を田に喩へて福田と言ふのである。

敬田とは、佛法僧の三宝を敬つて供養すれば無量

の福報が得られる。即ち敬田とは佛法僧の三宝を

言ふのである。

6 悲心院 四天王寺の四院の一つで、孤児、病者など

を救済する処。

悲田 病者、貧困者などを見て悲愍の心を起し財物

を恵み施せば福報が得られる。即ち病者、貧困者な

どを悲田と言ふのである。

(尚、恩田とは父母、師長を言ふ)

7 講読 典籍を読み、かつ講義する。

13 佛影彫刻 → 佛像彫刻

2 光背 佛像の背後にあつて佛、菩薩の光明を象徴す

るもの。様々な意匠がこらされてゐる。

5 心田 人の心はよく善悪の苗を生ずるので田に喩へ

て、人の心を心田といふ。

7 少治田天皇 推古天皇。

8 詔王 親王の宣下のない皇族の男子。

8 公主 皇女。

8 臣連 嘉せざる 詰る

14 身を生死に留めて平等に物を化するは乃ち佛意に

現代語訳 現実の人生は生老病死の苦や迷ひがあるが、

その現実生活に密着して衆生を平等に導き教化する、これを即ち佛の「精神」である。

この箇所は、佛が菩薩のあり方について述べたところであり、この箇所の前に「二衆の人は唯空を以て證と爲して、有の中に於て物を化するを絶つ。故に「一」といふ言葉がある。有とは現実の人生のことであり、太子は二衆(自らの悟りの力を求むる声聞、縁覺)が現実生活から逃避するのを善しとせらるゝのである。

30頁

4 熊渡村の遺場

推古25年、太子44才の時創建さる。

この箇所のみ言葉は田村皇子(後の舒明天皇)に遺言されたもの。御遺言の通り舒明日年百濟川の近くに移建し百濟大寺と称した。天武2年高市郡に移建し高市大寺(後に大宮大寺)と称した。さらに奈良遷都後は奈良に移建し大女寺と改称した。

4

田村皇子

5 大女寺縁起流記(注)資財帳

12

并は流記の前に入れる。要訂正

流記 舟の什宝、所領などの資財を記録したもの。

11 衆生の根機

根はものの本となる力、機は舟の力の発動をいふ。佛の教へを聞き修行して悟り得る能力、即ち教を受容する衆生の性能をいふ。

31頁

2 光景

32頁

ひかり輝くさま。転じて徳澤威勢などにいふ。

3 脈絡

ものごとの筋道、つづき、条理。

5 一乘因果之大理

乗は悟りに導く教法を衆物に喩へた語。一乗とは、佛の教の眞実の教へは唯一つで、それによつていかなる衆生もすべて一様に佛に交

わると説く教へ。因果とは原因と結果、今宇宙は

それが多もかでも因果の法則に支配されてゐる。一乗の教へを修するといふ因により、「その善は悉

く至徳の佛心に通入し、(P33の6行)「佛陀の證得しょうとくせられたる永久生命、即ち唯一佛果に歸入する」

(P35の1、2行)といふ果を得る。此れを一乘因果之大理といふ。

5 萬善歸歸 人間の行ふあらゆる善事は、すべて同じく絶対の境地に歸着するといふこと、P33の6行に著者の解説がある。

5 佛無無量 佛の証得せられた境地は、照常無辺無始終で時空を超越したものとといふこと、P35の4、7行に著者の解説がある。

7 爾前 以前の意、法華經が説かれた以前の寂尊の教へをいふ。

7 方便 衆生を眞実の世界に導くために種々の手段方法を用ひること。またその手段方法をいふ。

7 確教 衆生に眞実の教を悟らせるため、先づその手段として説かれた仮りの教へ。

7 究竟 事物の究竟に達したところ。

7 法華一乘 法華で説かれる一乘の教へ。人はその眞實の能力により舌聞乘(佛の音聲または遺された教へを聞いて悟り求める)縁覺乘(單押でまた

他の縁によつて悟り求める)菩薩乘(他を救ふま先とし、自他ともに悟り求める)の三乗があるが、これらは一乘に導くための手段であり、究極は一乘の教へに歸すると法華經で説く。

7 8 佛陀出世の本懐 佛陀が衆生を救ふために、この現実世界に姿を現はされた目的、本意。

9 佛性 すべての人間が有してゐる覺者(佛)になり得る本性をいふ。

9 大聖釈尊 大覺の心徳 釈尊の到達された至徳の悟り。釈尊は自己の迷ひを滅したのみでなく、他者を覺らせる行が圓滿してゐるから大覺といふ。

10 成佛 佛になり、即ち一切の煩惱を断じて悟りの境地に達すること。

1 世間セカイとは一般的社会生活の営みなり

世間とは一般的社会生活の営みなり

離れて佛道修行に入ること。

2 融會ユウエ 融けあつて一つにあつまる。

3 涅槃ニハネンの覺路 涅槃とは煩惱の束縛を脱し、生死の迷

を超越して不生不滅の法を体得した状態。その

状態を悟らぬの教へ導く路。

7 一乘イチジョウの体 一乘の本質、本体。

9 乃至乃至 一度とも、乃至は「たゞ乃至百たが」の

やうに上と下を述べて中間を略す語。

9 南無ナム 佛に心から帰依し絶対の信を捧げる。帰命

帰敬とも訳す。

8 徹證テツシ 徹底して見とほす。

9 声聞シヨウモン 佛の説教の音声を聞き受けた教へを聞

て、自己の心の悟道を理想とする佛道修行者。

緣覺と併せて二乘といひ、小乘教徒の一形態。

9 緣覺エンガク 独覺ともいふ。佛の声教シヨウコウによらず独りで悟り

をひらく、または他の緣によつて佛道を修行する

者。声聞と同じく自己の心の悟りを求める。

9 菩薩ボサツ 大士、覺有情ともいふ。他者を救ふを先とし、

自己共に佛果に到るべく佛道を修行する者。

12 因緣インエン 因とは結果を生ぜしめる直接原因、緣とは外

からこれを助けける間接原因。一切のものは因緣に

よつて生起する。で、これを因緣所生、緣起など

といふ。米麥はその種子を因とし、労力、雨露、

肥料などの縁とよする。

13 含靈ガクレイ 靈魂をもつもの、一切の衆生をいふ。

13 他父タチ 衆生を教化し導く父。

2 佛果ブツツカ 修行といふ因によつて、佛の悟りの境地に達

するといふ結果を得ること、その結果。

4 八十雙林ハチジュウニに入滅 經算が八十才にして沙羅双樹の林

に於て死去されたことをいふ。

5 常住法身 常住とは生滅變化なく永久に存在するこ

とをいふ。法身とは衆生のより廻と作る空極絶對

の真理を体得してある本体そのものをいふ。

7 妙音 美しき声で広く十方世界に教へを広めるとい

ふ菩薩。

7 藥王 過去世に星宿光長者と稱し、大乘の教へを宣

いて妙藥によつて民衆の心身を治療しようといふ

大願を起し、未末世に成佛して淨眼如來になつた。

7 觀世音 觀世音は衆生が救ひを求めるとを圖くと直

ちに救済に赴くの意、觀世音菩薩は慈悲心の權化と

して勢至菩薩と共に阿彌陀佛の脇に付きそひ、苦

惱する衆生を濟度する菩薩。

9 妙釈 すぐれた解説。 13 草本 草稿。

1 攝受正法 正しい眞実の教へに基く無差別、平等、

無私の大慈大悲心で、しかも念々に現はれるもの。

例へば天堂が目指してせられるやうな境地である。

それ人は人間には到達し得ない境地であるが、攝受

正法を仰ぐことによつて人間は正しい道を歩むこ

とができる。P 36 39 166 太子及び著者の解説がある。

1 一体三宝 三宝を本體論的に把握したものを。完全円

滿なる眞如法身を佛身とし、それより流出する教

法は法身を顯示するもの故法身とし、僧とは和合

であり、その宗教的団体生活は佛に帰依し法を体

現するもの故僧宝とする。こゝから佛法僧は本質的

に一体であるとの捉へ方が一体三宝であり、帰依

の極致となす。P 41 42 に太子及び著者の解説あり。

1 如來藏 如來とは眞如より來たる人の意で、究極絶

對の眞理に到達した佛をいふ。

如來藏とは、人間は煩惱に蔽はれてその本性が隠

されてゐるが、本來は如來に在り得る佛性を蔽し

てゐるの意。また如來は一切の凡夫を胎子として

藏してゐるの意との二つがある。P 43 44 解説あり。

3 夫人 王妃。

4 勸励 すすめ励ます。

4 受持 佛依の心でうけ入持、身に行ふ。

4 偈 6 偈頌 経論の中で詩句をもつて佛徳を讚美し、または法理を述べたもの、三字及至八字をもつて一句とし、四句をもつて一偈とする。美詩をつら

なて歌ふ故に頌といふ。
(はねる)

4 示現 衆生を救ふために佛が種々の姿を借りて現

5 淨光明 佛のきよらかなる智慧の光。

5 受功徳 佛が現世に現はされた功徳、功徳はP 28

11 善を行むるの義は本徳依に在り

善とは口で最終行に「善、即ち真実の善行に其く実行」と著者の解説がある通り、隠微なる善生を導くための実践論理である。永遠不滅の真理の

體現たる佛の心から、心から、廣大の徳が実践

の根柢にあるべきで、それにより始めて現世人生

における諸活動は真の善行となることを明示して

太子の言葉である。

心の念から信する、といふことは觀念としては容易に理解できるが、いざ実践となれば容易になし

得ることではない。それは自己の愚かさを徹底して

覚知することにより可能なのであらう。

勝曼經義疏の正説第一に「數佛真実功徳章」即ち佛

依(信)が説かれてゐることの意義は重要である。

37頁

2 戒律 戒とは規律を守らうとする自発的な心の

働き、律とは他律的な規範を意味する。教団の秩序維持に必要な規律を定め、これが律で、これを

内心より自発的に守らうとするのが戒である。徒

つて(兩者は)組されたものではない。

3 十大戒 大乘の教へを學んで佛の境地に達するま

での間に必ず実行すべき十條の約束をいふ。

身は身にうけるといふ意で、戒のこと。

十大戒について太子御自身の説明は次頁の通り。

十大受
 五戒……しやうりつぎ 戒律儀戒——自行を以て本となし兼ちて化他を顯す
 四戒……しやうじゆきかい 擾衆生戒——化他を以て宗となし
 一戒……しよせほうかい 擾善法戒——合せて自行化他を明かして即ち徳に大士の行を奉ぐること明かである

三大願
(十大受の要約)
 正法を護持せむ
 正法智を得む
 衆生のために説かむ

- 5 五戒 ごがい 在家の信者のために制定された戒で、殺生(せつじやう)生きものを殺す(ころす)、偷盜(ちゆうとう) (盗み) 邪淫(じやいん) (よこしまな性交) 妄語(まうご) (嘘をつく) 飲酒の五つを禁ずる。
- 9 戒律儀戒 しやうりつぎかい 五戒についで犯心を起さず、そばじめ、一切の諸悪を断じ捨てるといふ戒。
- 10 擾衆生戒 しやうじゆきかい 一切の衆生を悉く擾取してあまねく利益を施すといふ戒。

38頁

10 擾善法戒 しよせほうかい 積極的に一切の諸善を実行するといふ戒。

尚この場合の擾の意味は「をさめとる」「自分のものにする」の意である。

14 15 併に他を化せんと欲せば、要は必ず先づ己が身を正しくすべし。所以に先づ自行を受く。大士の己を正しくするの要は物を化せんが為なり、故に次に擾衆生戒あり。

昭和会本では右のやうに傍線部分が挿入されてゐる、補ふべきであらう。

この次に続く文は空、通りである。

「物を化するの道は但に悪を止むるのみに非ず。要が福善を修す。故に第三に擾善法戒あり。」

11 福善 ふくとく 福をもたらし善。

5 一切生に於て いっせうぶにやう 如何なる生(胎生卵生遷生化生)もろけても、の意、「一切の生に於て」と訓むべきであらう。

※尚、三大願における太子のみ言葉に、P 54の

「大士の徳を立つることは、但自らの為には非ず、

必お先づ物の為にすることを明かすが故に、衆生

を安慰せんと言ふ。」の一文があることに留意。

5 正法智 空極絶対の真理を悟った佛陀の智慧。

6 無厭心 一切衆生のために法を説いて倦まず怠らぬ

心。たとへ若干の人を救ひ得ても未だ救はれぬ者

がある間は自ら足水りとしぬい。

7 三大願 前頁の図解の通り「正法智を得む」「衆生ため

に説かむ」「正法を護持せむ」の三つである。

大乘における一切の戒律は三摂淨戒にをさめられ

菩薩の一切の願は三大願にをさめられる。

11 八地以上の 八地以上の菩薩が、の意。

○八地とは菩薩修行の階位のうち第四十八位をいひ

不動地と称す。P 39の菩薩五十二位とは、十信(

初信、二信、三信、四信、五信、六信、七信、八信、九信、十信) 十住、十行、十廻向、十地、

以上で五十位、第五十一位等覺、第五十二位妙覺

39頁

11 所修の行理に當りて、説点を挿入する

傍線部分が欠落してゐる故、補ふべきであらう。

11 一念の中に備に萬行を修す

おける肝心なところなのである。

太子の現実人生に即した切実な求道体験に基く御言葉と拝されるのであり、この点は勝鬘經義疏に

をいふ。十廻向までは凡夫で、それ以上即ち初地二地……十地等覺妙覺は聖者の位に入ると一般には言ふ。

※太子は勝鬘經義疏において八地以上は修行の完成

した聖者の境地にあり、攝受正法は八地以上の行

とされた。従つて太子は七地以下と八地以上には

段階があると考へてをられた。太子は勝鬘夫人の

階位は七地にあるとされ、その勝鬘夫人が敢へて

八地以上の行たる攝受正法を説くとされるのは、

太子の現実人生に即した切実な求道体験に基く御

言葉と拝されるのであり、この点は勝鬘經義疏に

おける肝心なところなのである。

11 一念の中に備に萬行を修す

傍線部分が欠落してゐる故、補ふべきであらう。

11 所修の行理に當りて、説点を挿入する

39頁

3 撮する ↓ 撮める

4 「ひろく一切の衆生を抱くこと大海の抱納無窮なるが如し」——昭和会本、大日本文庫本などは「広く衆生を抱くこと即ち大海の抱納無窮なるが如し」と少し異なる。

5 心行 7 弄覚 10 初地

10 無漏 漏は煩惱の意、煩惱を滅してゐること。

11 未だ並べて觀せざるが故に

全ての入々の心を平等に差別なく扱めとることが出来ない故に。並にはツミなツの意がある。

※P45の一行に著者の次の文がある。八地の菩薩が一念の中に萬善を扱めて一切の衆生と感心交通し

現実世界の裡に佛陀の至徳を開發ス。

13 地上 初地以上の意。初地以上の聖者の位に到達すれば、の意。

※尚、P39の10、12行初地以上、11の文は、P38の11、12行「八地以上、11の文に直接続いてゐること」に注意のこと。

40 頁

1 布施、持戒、精進、禪定、智慧

1 六度の行 六波羅蜜に同じ。波羅二岸、蜜二到、波羅蜜は到彼岸と訳す。渡るに度る、に同じ。

大乘の菩薩が實踐すべき六種の大行、即ち布施（清淨な心で法や財物を施し惠む）、持戒（戒律を守り自己を常に反省する）、忍辱（はづかしめ、苦惱、迫害を耐へ忍んで心を動かさない）、精進（他の五徳目を弛まず實踐しつづける）、禪定（迷ひを断ち、心を統一して靜かに真理を考究する）、智慧（事物の真相を觀照し、惑を裁し悟りを成就する智慧）をいふ。

2 迹 教化のためにこの世に現はれたすがた。

2 完き

9 二相 二つのすがた。二つの現はれ。

14 恒沙 恒河（カンジス河）の砂の数ほど、数多くの意。

15 三乘・五乘 三乘は声聞乘、緣覺乘、菩薩乘の三つ。五乘は三乘に、人乘（人間界に生れしむる五戒の

教へ)、天乘(欲界の天に生れしむる十善の教へ、色界や無色界の諸天に生れしむる禪定の教へなど)の二つを加へたもの。

41頁

2 [ルビ] 究竟 3 帰趣 行きつくべき処。

3 至極 この上もなくきはまつてゐる。

4 [ルビ] 脈絡 6 [ルビ] 佛 7 [ルビ] 化父

5 一乗を得ることは即ち法身を得ることであつて、

P 111 の 7 行に「一乗と法身の相即」についで太子の

み言葉がある。

7 帰敬 帰依敬礼の略、絶州の信を捧げ敬ひ尊ぶ。

8 [ルビ] 靈性 または(リようじよう) 通常語ならは靈性だが、

この場合は佛語訓みかよいと思ふ。

8 長養 増大せしめる。

10 三世十方 三世は過去、現在、未來。十方は東西南北

の四方と東南、西南、西北、東北の四維及び上下をいふ。即ち時空空間を綜合して、いつの時代い

なる場所に於ても、の意。

13 化導 衆生を教化し導く。

13 慧命 佛陀の智慧。

42頁

2 第一義 太子は「第一義は謂く三徳・四義なり」と

解説してをられる。三徳とは法身徳(迷ひの世の

苦を脱却して得た常住不滅の佛の本体)、般若徳(

般若とは智慧と訳す、萬有の実相を知る真実の智

慧)、解脱徳(一切の較着を遠離して真の自由を得)

である。この三徳は夫々四義即ち常(常住不滅)

(楽(真実の楽)、我(他の制約をうけない)、淨(神

聖清淨)を具へてゐるとする。

3 最勝 最も優れてゐること。

3 4 偏へに 一体の佛室の最勝を明かす」

一体三空における佛室のみが最も優れて尊いもの

であることを明らかにしてゐる、の意。

4 然らば即ち別体なりとも亦可ならむ。而して一体の

み何ぞ別に最勝ならむ」

然らば別体三宝における佛宝、即ち歴史的事在の釈迦も常住法身の体現人格なる故、これを最も優れて尊きものとして佛依の対象としてもよいではないか。一体三宝における佛宝のみが何故最勝と言へるのか、と批判されたの意である。

※右の一体三宝、別体三宝に關し、例へば、神代より一貫してうけ継ぎ伝へられてきた日本の皇室のご本質ともいふべき御姿々を一体三宝と考へ、歴代天皇の御志をうけ継ぎ御せ々々の天皇が具體的に実践された御仁慈々を別体三宝と考へれば理解しやすいやうに思はれる。別体三宝に即して一体三宝を仰ぐべきといふことも右のやうに考へれば容易に理解できるのではないだらうか。

5 徹到 究極にまで徹して到達する。

7 心生活 精神生活、即ち現実人生を生きて行くにつれてその支へとなる心の働き。

7 照導 照らし導く。

8 大陸釈家 支那における経典の解釈をする人。

11 梯橙の三寶 梯橙は次第に高きに登る階段の意で、

小乗から次第に大乘へ進む教へをいふ。三寶は本質的には一体なのであるが、三寶を個々別々であると見なす（修行が未完成）のを、梯橙の三寶といふ。

12 会して 統合して、帰着せしめて。

12 五乘を会して一乘に入れ、同じ常住一果の因と爲す。

五乘を統べ掲めて一乘の教へに導き入れ、同じ永久不滅の同一佛果に到らしめる因とする、の意。

即ち五乘は同一佛果の因であり、三寶を別々のものと見るのは究極でないことを批判してある。

15 帰向 おもむき向ふ。

43 頁

1 全一的具現 現美具體の佛宝、法宝、僧宝は各別の形を有してゐるが、それらに對して、生滅變化なき

佛陀自身の具體的實現は此と觀し憍依する、の意。

78 心田

10 障明 明かにする。

13 煩惱藏

煩惱とは心身を煩し惱ます精神作用をいふ。その直接的な根として貪(むさぼり)瞋(いかり)

癡(おろかしさ)の三毒をあげる。

藏とは包含の意。煩惱藏とは一切の煩惱を含攝してあるもの、また煩惱が法身を覆つてあること。

※如來藏とは、煩惱に覆はれた我々の心中に宿つてある佛性、或はまた我々が如來の胎子として如來

の中に含まれてあることをいひ(P.36の一行)、煩惱から超脱した清淨の世界にある如來の法身に對し、

煩惱の垢に覆はれてある佛性をいふ。

如來藏と法身とは「隱」と「顯」との區別によつて稱

される。

14 覺境 さとりの境地。

14 無作の一滅 無作とは人間のほからひや行為を起した状態で、全体をあるがままに受けとめ、しかも

根本の真理を悟る——即ち如來の世界である。

○有作(意識的に一つ一つを順次に理解するのみで、もの事の根本にふれることが出来な世界、即ち

相對の世界)に對していふ。

○一滅とは、四諦の中の滅諦(苦を滅して涅槃に至る)の滅である。〃無作の一滅〃とは、一切のは

からひや行為を起し、根本の真理を悟つてある状態、と辭してよい。

15 依 究極のより処。

44 頁

1 顛倒真實章

2 出世 出世間のこと、即ち世俗を離れた清淨な世界、出世間とは世俗を離れ切つたことではなく、世間の生活に囚れず更に高い境地から世間の人々を導

くのである。

2 上上 上位の中でますますに優れ、であること。

3 物圍きて便ち謂へし、物ほ人々の意、このこと

を初めて聞いた人々は次のやうな疑問を抱くであらう、の意。

4 6 無作の一藏は即ち如来藏なり。生死の神明は如来藏により相續して滅せず。但惑を出でて方に物依となるに非ず。惑の中に在りしより已に依となるなり。

○惑は煩惱と同じ。

○生死の神明 佛語の場合吳音でじんみよと訓む。生死病死に迷つてゐる人々が心の奥底にもつてゐる魂の靈妙な働き。著者は衆生の心靈と解説してゐる。

無作の一藏(一切のはからひなく真理に到達してゐる境地)は、如来藏(隠れてゐる佛性)が煩惱を超越して顯はれたものであり、兩者は本質的には同じである。衆生が心の奥底にもつてゐる魂には、隠れてゐる佛性が連綿として絶えることなく宿つてゐるので、その佛性は消滅することは

ない。無作の一藏は、衆生が煩惱を超越してのみはじめて究極の依り処となるのでまい。衆生が煩惱に迷つてゐる時に於ても(隠れた佛性を心の奥底に有してゐるのであるから)已に究極の依り処となつてゐるのである。

7 心靈 魂の靈妙なことをいふ。訓め、しんれいも可。

8 佛性 9 菩提 10 隱遁超越

13 宣布 15 靈性

45頁

2 萬差 変化が数がぎりなくある。

8 居士 俗人のままで佛門に入った男子。

8 空有相即 世の中の諸事象は全て因縁によつて生ずるものであるが、存在してゐる面を捉へれば有であり、また因縁和合によつて生ずるもの故本末固定的な実体はないといふ面を捉へれば、空である。この空有の捉へ方が融けあつて一体となつてゐる教義。

9 **毘耶離** 9 塵勞 俗世間の煩しい苦勞。

10 教旨 教への本義。

12 維摩詰 漢訳では無垢稱、淨名と稱す。

12 已登正覺の大聖 已に眞の悟りに到達してゐる大聖

人。聖人は智慧が廣大で熱心心の深い人。

12 13 本を論ずれば既に眞如と冥一なり。迹を談ずれば

即ち萬品と同量なり。

○本 本地、本源、本地垂迹につき、本の訓みか

○眞如 あらゆる存在の眞の姿、眞とは眞実で虚妄

のないこと。如とはありのままの眞実、思慮分別

を加へないあるがままの姿。眞といふ言葉だけ

では充分表現できない自然隨順の心の働きが如。

の中に含まれてゐるやうに思ふ。

○冥一 渾然として区別のできないうさま。

○迹 垂迹のこと、救ひのためにこの世に姿を現す。

○萬品 この世に現はれた数多くの姿、即ち生きとし生けるもの。佛語訓み、まんぼんの方が可か？

現代語訳(維摩居士は現世に現はれてゐる姿であるが)

その發してゐる本源について説明すれば、それは

あるがままの眞実の存在と全く同一なのである。

衆生救済のためにこの世に現はれた姿について説

明すれば、(この世の生きとし生けるものは時には

善、時には悪と数かぎりなき姿を有してゐるわけ

であるが)、維摩居士は何時でも何処でも、善でも

悪でも、あらゆる人々の心を心として生きてゐる

存在なのである。

13 徳は象聖の表に冠し、道は有心の境を絶す。

○有心の境 相対の世界、従つて凡夫の思慮の意。

○現代語訳 徳は諸々の聖者よりもはるかに優れてをり、

道を究めてゐることは凡夫の思慮の遠く及ばない

境地に達してゐる。

13 14 事は照為を以て事と爲し、相は無相を以て相と爲す。何れも名相として稱すべきことあらむ。

○事 事、と相が対比されてをり、事は動的な物

き、相は諍的(せいじき)なすがたの意。

○無為(むゐ) 特定(ていてい)の出未事(しゆみじ)を超えてゐる。相対(さうたい)の世界を

超えてゐる何も為さざい、の意。

○無相(むじやう) 差別(さべつ)対立(たいりつ)の姿(すがた)を超えてゐること。

○名相(なみじやう) 佛教語(ぶつこう)の解狀(げじやう)としては名稱(なめい)と形體(けいだい)をいふ。

【現代語訳】 なすべき事(こと)については維摩居士(ゐまごし)は相対(さうたい)の世界

を超えてゐるので何も為さざいといふ形をとつて

をり、それであるを全ても為してゐる。その姿とし

ては差別(さべつ)対立(たいりつ)の世界(せかい)を超えてゐるので特別な姿(すがた)を

現(あらわ)してゐるわけではないが、それであるであらう

る姿(すがた)を現(あらわ)してゐるのである。維摩(ゐま)がどんな事を

実践(じっせん)したとか、どんな立派(りっぺい)な姿(すがた)を現(あらわ)したとか、

相対(さうたい)の世界(せかい)に於(お)ては思慮(しりょ)の及(およ)ばないところであつ

てほの稱(せう)へやうが正しいのである。

14 国家(こくが)の事業(じぎやう) 佛典(ぶつてん)に於(お)て国家(こくが)といふ言葉(ことば)は、国(くに)と家(け)

の他種(たいうしゆ)々(々々)複雑(ふくざん)な意味(いみ)をもつてゐるが、黒上(くろかみ)先生(せんせい)は

“一国(いっくに)の政治(せいざ)経済(けいぎ)生活(せいかつ)”と解(と)してをられると思(おも)ふ。

14 煩(わづ)となす。

P 144 171 には「あづらはし」とルビが付してあるが、

さう訓(く)むと、面倒(めんどう)で嫌(きら)むの意(い)味(み)に受(う)けとりやすい。

黒上(くろかみ)先生(せんせい)は「国家(こくが)の事業(じぎやう)を煩(わづ)となす」について、外

的(てき)功業(こうごう)に充極(ちゆうごく)価値(かち)を求め給(たま)はざり(敬肅(けいじゆ)至心(ししん)の内

生(なま)を示(し)す」と解(と)説(せつ)(P 102 145 146 171)してをられる。そ

の解(と)説(せつ)よりして「煩(わづ)は、心(こころ)に苦(くる)しみ悩(なや)むの意(い)であ

り、訓(く)みは、はん(煩(わづ)または「あづらむ」が良(よ)いと思(おも)ふ。

【参考】

1. 黒上(くろかみ)先生(せんせい)が『国語(こくご)と国文学(こくぶがく)』誌(し)に發表(はつぷ)された際(さい)に

は「煩(わづ)し」と送(ま)役(やく)名(な)があつたが、昭和(しやうわ)5年(ねん)の謄(たう)写(ぎや)

刷(し)版(ばん)より送(ま)役(やく)名(な)は削(く)除(じゆ)された。

2. P 79 物を益(やく)するを煩(わづ)し。には送(ま)役(やく)名(な)あり、この

場(ば)の意(い)味(み)は、面倒(めんどう)で嫌(きら)むである故(ゆゑ)、訓(く)みも「あ

づらはしてよい。

3. 故(こ)桑(そう)原(げん)暎(えい)一(いつ)先(せん)輩(ぱい)は『日本(にっぽん)精神(せいしん)史(し)鈔(しやう)』P 225 において、

「煩(わづ)はし」とをられるが、意(い)味(み)は「心(こころ)を煩(わづ)す、

「慢劣」とされてゐる。

1 大悲 多くの人々の苦しみを救はうとする佛や菩薩

の大きな慈悲心。

1 志益物を存す 物は衆生のこと。益物は衆生を救へ

導き救はるといふ利益を与へること。

P 54 144 145 171 ま志益物(に)存すと云つてゐるが、こ

れは戦後編纂の際改めたもので、黒上先生は全て

「を」と記してをられる。「を」の場合、主心の中には

常に益物といふおもひがたたへられでゐたり、とり

意と存り、言葉に付きがある。【漢語】

3 證跡 證しとなるあとがた。

3 心弦共鳴 心弦は心といふ弦の意。こゝは、共鳴した

けでも意味は通ずるが、心弦といふ言葉を添へる

ことによつてこまやかに表現されたものと思ふ。

4 深玄 おくふかい。幽玄。

4 嘆美 ふかくほめる。

5 薰化 徳を以て人を感化する。 6 【ルビ】 津融 えちゆう

7 済度 済は救済。度は彼岸へ渡すの意。迷へる衆生

を導いて悟りの境地に救ひ渡す。

8 舍利弗 佛陀の十大弟子の一人、智慧第一と称され

た。波羅門の家に生れ、後に釈迦の弟子となつた。

9 比丘 男子の修業僧。

9 弥勒 釈迦の化身をうけ、釈迦滅後五六億七千万年

の後、この世に出現し、釈迦の救ひに渡れた衆生

を済度するといふ未來佛。

9 回疾 疔病氣を見舞ふ。 10 【ルビ】 昔日 せきじつ

10 偏執 かたよつた執着。 11 【ルビ】 各 おのづか

11 彈呵 叱りつけること。

12 文殊菩薩 波羅門の家に生れ後に釈迦の弟子となつ

た。普賢菩薩と共に釈迦の左に侍し智慧を司る菩

薩。獅子に乘るを常とする。

12 方丈 維摩居士の居室、居士の居室が一丈四方の広

さであつた故に稱す。その故事に基き、引陵の住

持の居室を方丈といふ。

13 妙理 深妙不可思議を直理。

13 宣場 開闢

13 維摩一默 維摩が諸菩薩に對して不二法門(絶對

47頁

真理の世界)に入るべき道を出す、諸菩薩が所見を述べ終つた後、文殊が維摩にその所見を向ふ、

その時維摩は默然として答へなかつたが、文殊は

その無言の中に湛へられた無限の世界を讚嘆して

やまなかつたといふ維摩經のクライマックスとも

いふべき箇所。

13 深旨 おくふかい意味。

14 世尊 佛はあらゆる功德を具へて衆生を利益し、世

の人々から尊敬されるこの名がある。佛十号

の一つ。単独で用ひる場合は釈迦を指してゐる場

合が殆どである。

15 證成 証拠を立マて、向違ひなく完成してゐること

をあらがす。

15 阿難 佛陀十大弟子の一人。佛陀の教説を記憶して

ある處では弟子中第一で、多聞第一と稱された。

15 附處

47頁

1 現疾 維摩が病氣の姿をもつて現はれてゐること。

1 疾の体たらく 病氣の姿。深い内容で言へば、維摩

が病氣の形をもつて比丘、菩薩を導く姿。

(花山信勝氏は、疾の体たらくと訓んでゐる)

1 本

2 教の興る所 抑小場大を宗と爲す。

現代講義 教への趣旨が發揚されるに於ては、小衆を抑

へ大衆を宣揚することを根本的な眼目とした。

4 空有相即 解説 P 45

5 空無 空そのもの。空の特質は否定であるとして、

空無といふ。

6 空有不二 空有相即に同じ。一切の諸事象は因縁に

よつて生起するのゆゑ、その本質は実体が無い、即

ち空と觀する。本質の空を觀するゆゑをもつて現象

の諸事象を捉へれば、空はそのまま一切の事象
そのものと観することができる。

6 空観 一切の存在は空自体の本性はなく、固定的
に実在するものでないといふ真理を観照する方

法、諸事象は諸々の原因と条件によつて生起する
故にである。

※但しこの空は「空即有」の空であつて、次に太子が

述べておられる二乗の空観とは全く異つてゐる。

6 我欲我執の迷執を解脱 7 捨離

8 要諦 9 入不二法門品

11 14 二乗の観は心、有を空するに存するが故に、
有を捨して空を證す。但自度を求めて化他にたらず。

是の故に空を觀すと名づくとも雖も、更に相觀を成す。
菩薩の觀は有に在りとも空を失せず。空に在りて、

萬化を成す。空即ち有、有即ち空にして、偏の有無
にあらず。等しく會して不二なり。故に名づけて真

の空觀と爲す。

○ 觀 眞理を考察すべく、智慧を働かせてものと
の道理を觀知すること。

○ 有を空する 現象の諸現象を非として理想を求め
る、即ち現象の相対世界を超えて眞実絶対の世界

を實現しようとする、の意。そこには現象に隨順
しようとなし無理な心の働きがなくなり、従つて之
の有を捨つて空を證す(現象世界を捨てて理想

世界に生きようとする) 誤りを犯すことになる。

沢の有に在りとも空を失せずとの根本的相違
に注目すべきである。

○ 自度 自分だけが苦から離脱して救はれる。

○ 化他 他の人々を導き救ふ。

○ 相觀 すがた、かたちの差別に囚はれた観法。

○ 萬化 人々を導くあらゆる働き。

○ 偏の有無にあらず 空に偏るとか有に偏るとか
いふことがない。昭和会本では有と無に偏せずと

なつておる。この方が適切かも知れない。

○音す 導き入れて一つのものに統一する。

○不二 一般には不二法とは、唯一の、中道、とか

の意に解されてゐるが、ここに示されてゐるやうに空有相即即ち理想と現実の一致融合の世界と解すべきである。

現代問題

「二乘（小乗の声聞、縁覚）が真理を悟らうとする観じ方は、その心において、現実世界の諸

現象は固定的な存在でないといふ否定するのみにとどまる。だから二乘は現実人生に随順しないので、そ

れから離れ去つて理想世界を實現しようといふ説

りを犯してゐる。そこには自分だけの故ひを求め

てゐるのであつて、他の人々を導き救はうといふ

実践はないのである。以上の次第であるから二乘

は、諸現象は固定的な存在でないといふ空觀を得てゐるけれども、自と他の差別ある悟り方を生じてゐるのである。大乘の菩薩が真理を悟らうとする観じ方は、現実世界から離れ去らなかりて空（諸

現象は固定的な存在でないこと）を覺知してをり、

空を覺知してゐる立場より現実世界におけるあら

ゆる人々を導き救ふゆきを實踐してゐる。そこで、

空はそのまま有であり、有はそのまま空であるとい

いかやうに、現実人生を否定する空觀と現実人生

そのものが一体として把握され、現実とが理想と

かの一方に偏つて觀することはなく、兩者を統合

して一致融合の世界を觀じてゐる。だからこれこ

そ眞の空觀と名づけるのである。」

48頁

1 悲智 慈悲を基とした智慧。智慧は悟りの意。

3 化益 教化し利益を与へる。

4 物を度す 9 明徹

13 濃やかに

49頁

3 蓋し 經典 註疏 法華義疏 講讀

4 光宅寺法雲師 光宅寺は中国江蘇省南京にある寺で

AD 52年宋の武帝が旧宅を寺にしたもの、六世紀に

おける江南屈指の名利、法雲(AD 467-529年)は武帝に重んじられ大僧正となった。特に法華義記八巻が現存し、その本子は太子が法華義疏の本義として考へられたものである。智藏、僧旻とともに梁の三大法師と称される。

6 示寂 菩薩 高僧の死をいふ。

7 論 經に説かれた教義を分類し、或はそれに解説を加へたもの。明示された教法の意。

7 成実論 成実宗の根本教典。宇宙の諸現象は仮りの存在で空に帰すべきものとし、この觀を存することによつて涅槃に至ると説く。

7 敷演 意をひろくおしのべて説く。

8 經 釈迦の教法を文章にまとめたもの。元來、經は縦糸の意で、經法を貫く綱要を意味する。

8 五時經 釈迦の教説が説かれた時期を五つに分け、その五時をそれぞれに説かれた經典をいふ。順着は、

- ①華嚴經 ②阿含經 ③方等經 ④般若經

⑤法華經 涅槃經

8 判釈 教判判釈即ち經論を整理し体系づけること。教判ともいふ。

12 肇法師 AD 374-414年、羅什門下で理解力第一と称され、北長安の僧。

13 羅什 鳩摩羅什、インド人を父にもつ西域の僧で、中国最高の翻譯家の一。門下に肇道生などの

すぐれた學者が輩出し、三論宗の祖とされる。

13 三論宗 龍樹の中論、土内論と、その弟子提婆の百論によつてたてた宗派で、空の思想を教理の根幹とする。羅什によつて中国に伝へられ、吉藏に至つて大成した。日本には堆古天皇三十三年に伝へられたが、衰へた。

14 楞神呪 楞神ま心を一つにして精神を凝らす。冥

崇は奥深いところを明かにする。

50頁

3 深妙 言ふに言はれぬ深く奥むこと。

3 玄旨 幽玄微妙な趣旨 奥深い佛教の教へ。

4 道生 AD? ~ 437年 廬山で慧遠に七年師事し、長安

で羅什の教へをうけ、一足とびに究極の悟りに至るといふ説をとなへて排斥されたが、後にその説の正当さが認められた。

6 慧遠 AD 334 ~ 416年、東晋時代佛教の宗教性を發揮した代表的な僧。浄土念佛の行をおこしたり、經典整備に力を尽したり、多方面に亘つて活動した。

7 吉藏 AD 549 ~ 623年、羅什系統で三論教学を伝承、三論宗再興の祖とされる。大乗經典に精通し数多くの著書が殆ど現存する。

9 餘 ↓ 余 要訂正

9 詠味 深く味はか 9 鍔鏡 深く研究する。

9 摺捨 ↓ 摺捨 要訂正 摺捨は落穂拾ひのこと、落穂

ひろひの如く文脈からたんねんに拾ひあげた。

10 文玄 おく深い文章や語句。

10 勒して三軸を成す 三巻の書物を作った。

12 疑然大徳 AD 1239 ~ 1321年、伊予の人。16才比叡山で菩薩戒をうけた。鎌倉時代後期の東大寺戒壇院の字

僧。あらゆる内外典に通じ、十二百余巻の著書を遺した。学問に於ける視野、造詣の深さは日本の

この時代前後に比を見ぬ非凡な大学者。

1 博綜 解説P.2 1 類 類を得る

6 天台大師 AD 538 ~ 597年、智顛のこと、湖南省に生れ、陳帝の信任をうけ、浙江省天台にこもり天台教学を確立した。後、隋の文帝、煬帝らの信任が厚かつた。法華經の精神と龍樹の教学を中国独自の形に体系づけ実修しようとした。

8 聖德太子 荷はせ 10 屢々 14 光輝

2 求道 3 融化 4 南達教化 5 南達教化

5 維摩經義疏に、經典に ↓ 読奥を挿入 要訂正

6 能く彼の

でも可

7 斯(是)の ↓ 斯(是)の 要訂正 (旧版のみ)

8 [ルビ] 正しく 11 [ルビ] 撰政 氏族制度

13 会空 佛教の教へを固くたために入々が集つた場所

またはその集り。

14 同聞衆 共に説法を聞く人々。 14 [ルビ] 逐へる

15 二には理に就いて論せば、第二番目として道理に

いて論するならば、の意。

※最初に「一に事に就いて論をなさば云々」とあり

それをうけて「二には理に就いて」となるわけで

ある。ちなみに最初の事についで論じられたとこ

ろでは比丘、菩薩、凡夫の順は、佛との距離の遠

近に従つて順序があまゝと説明されてゐる。

○声聞 佛に一番近い。何故ならば「心、自度に存

して化他に在らず。恒に佛邊に仕へて往いて化を

施すこと無し。」

○菩薩 中間、何故ならば「心、益物を存して化を施

すこと無方なり。恒に佛に従はず、往未定めがた

し。

○凡夫 一番遠い。何故ならば「欲に著し、道を去

れて佛を奉觀(佛にまみえる)すること希し。

15 生死を厭ひ涅槃を求む 生と死の迷ひの多き現実生

活を厭ひ、迷ひを滅した境地を求める。

※涅槃には、死の世界の意味もある。次の凡夫は涅

槃を畏る、の場合は死の世界の意。

2 萬徳常果を證す あらゆる善を實踐すれば、必ず常

にすぐれた結果が得られることを身をもって実証

する。それけ必ず佛の道に通ずるから涅槃(死の

世界)を畏れまい、の意。

※昭知会本、花山信勝氏「萬徳の常果」の、を挿入

すべきであらう。

3 (二乘) 凡夫の偏に同じからず、二乗や凡夫は一方に

偏つて執着してゐるが、菩薩は偏ることなくの意。

※(二乗)は義疏原文にはない。ニニは、声聞及び凡

夫は、とあるべきところをの黒上先生が補けられたものであらう。この箇所では義疏原文には二乗の説明はない故、補ふとすれは(声聞)または(声聞及び)とすべきではまいかと思ふ。

※昭和会本、花山氏「偏るまに同じからず」この説

み方がよいと思ふ。

5 一抔の天地 たゞ自分ひとりみの世界。

5 **願** 願求 **願**行

12 大士の懐を立つることは 大士は菩薩、懐は本懐、

本願の意、のを所有格にとると概念化する可能
性あり、主格にとるべきであらう。

55頁

9 念 怒る、うらむ。 9 瞋 目をつりあげて怒る。

9 執 執着する心。

10 鏡 耳たがにつける飾りもの。耳輪。

10 **端** 端

56頁

4 といふ矛盾相対 ↓ といふ矛盾相対 **要訂正**

10 懺悔 懺は犯した罪のゆるしを請ふ意。犯した罪を佛の前に告白し、悔ひ改めること。佛語はさんげ、

通常語はさんげ。

12 自督 自らすすめ正す。

13 朋黨 利害、主義などを同じくする人々の集団。

13 迷執 迷つた心でもの事に執着する。

15 啓蒙 ↓ 啓導 **要訂正**

啓蒙誘導の略。ひろき導く。

57頁

2 凡聖 凡夫と聖人。

3 須菩提 佛陀十大弟子の一人。空観を理解すること

第一と言はれ解空。空生とも称された。舍衛城の

長者の子として生れ、祇園精舎で佛の弟子となつ

た。般若経の中で佛陀の相手として登場する。

4 彈呵 誤つた考へ方を強くたたき、叱りつけること。

7 11 初版、旧版を此ぞ此左記の如く **【訂正】**

7 淫 ↓ 姪 痴 ↓ 癡 痴 ↓ 癡

7 一相に隨(へ)ば、(初版)隨(か) ↓ 一相に隨ひ、

8 解脱を得、 ↓ 解脱を得、(ルビを付し、読史に)

以下は初版のみ **【訂正】**

7 與俱をはず。 8 縛せず。 9 見ざるにあらず。

9 得ざるにあらず。 10 離るるにあらず。 (訂正)

10 ならざるにあらず。 ↓ 以上六所の句末を讀史

8 明脱を起す。 ↓ 起し、 11 離る。 ↓ 離るれば、

7 11 (右の訂正により)

「もし須菩提、姓・怒・癡を断せず、亦與俱をはず、

身を壞せずして、一相に隨ひ、癡愛を滅せずして、

明脱を起し、五逆の相を以て、解脱を得、亦解せず、

縛せず、四諦を見ず、諦を見ざるにあらず、果を得

るにあらず、果を得ざるにあらず、凡夫にあらず、

凡夫の法を離るるにあらず、聖人にあらず、聖人な

らざるにあらず、一切法を成就すといへども、而も

諸法の相を離るれば、乃ち食を取るべし。」

○ 若し この經典の最後にまでかがる言葉で、若し

以上のやうなことが実践できるならばこの鉢に盛

つた御飯をうけとるがよい」となる。

○ 姪 貪欲、特に性欲をいふ。

○ 癡 愚癡。

○ 身を壞せず 壞は滅ぼすの意。煩惱ある生身の肉

体をもつたままで。

○ 一相 差別対立のない真如一実の相。

○ 癡愛 愚癡と貪愛。心の暗い愚かさで貪り。

○ 明脱 愚癡を離れるを明、貪愛を離れるを脱。

○ 五逆 殺父、殺母、殺阿羅漢、出佛身血、破和合

僧の五大罪。

○ 四諦 苦、集、滅、道の四聖諦。諦とは不変如実

の真理の義。苦諦とは現象の人生は苦まりと観ず

ること、集諦の果。集諦とは苦の原因は煩惱、妄

執であるといふことで苦諦の因。滅諦とは無常の

世を超え執着を断つことが苦を滅した悟りの境地であるといふこと、で道諦の果。道諦とは悟りに導く実践の手段のこと、滅諦の因。

○法ほう 音訳では達磨だつまといひ、一切に通ずる語である。小なるものも大なるものも、形あるものも無きものも、眞実なるものも虚妄なるものも、事物そのもの、道理そのもの、ありとあらゆるものを法といふ。例へば竹は竹自体の特性をもち、かつ一定の法則のもとに成長存在し得てゐるやうに、事物や人間の心など一切萬有は、皆自ら自身の特性を保持し、また認識や行為の規範になるといふ二義を有してゐる。だから一切諸法、萬法といふ。

【現代語訳】「復善提よ、姓・怒・癡などを断ちきらさない、こゝかもそれらに束縛されたり迷つたりしない、煩惱ある生身の体のままで差別相立を越えた眞理を把握してゐる、愚癡と貪愛を滅してゐるいで而もそれらから離れてゐる、五逆を犯す大悪人のやうな姿をしてゐながら心の中では解脱を得てゐる、煩惱から解き放されてもなまじがさりとて煩惱に束縛されゐるわけでもない、四諦の教へを學んでゐるいがさりとて辨へてゐるいのではない、悟りの結果を得てゐるいがそれらに到達してゐるいのではない、凡夫ではないがさりとて凡夫の姿や生活から離れてゐるわけでもない、聖人として称へるべくもなまじがさりとて聖人ではないのでもない、世の中のあらゆることを学び通達してゐるも而もそれらに束縛されない、若し以上のやうなことが実践できるならば、お前の鉢に盛つやつた食物をうけとるがよい。」

(要するに差別相対の世界を越えて何ものにも囚はれないことを求めてゐる。)

14 迦葉かじや 佛陀十大弟子の一人。王舎城近郊のバラモンの子。長者の家に生れ榮華を極めてゐたが佛門に入るに及び特に質素な生活をし、清廉な人格者で

頭陀第一といはれ、佛陀の信賴が厚かつた。佛陀

入滅後は教團の統率者となり王舍城に於て第一回

の經典結集を行った。禪宗では特にこの人を尊崇

14 勝田 すくられた福田の意。

15 行乞 乞食を行ふこと。乞食とは出家僧団の修行の

一つで、人衆の門に立ち食を乞ひ求める。それは

相手にとつては施を行ふことになり、相手に福

果を得る因とならしめるわけである。

15 福田 P 28 畝田院にて解説

15 維摩が其の慈悲心不平等を彈呵 本文は左の通り。

「牧(迦葉)昔、貧里に於て乞を行せり。時に維摩詰

来りて、我に謂ひて言はく、『唯大迦葉、慈悲心あり

て而して普きこと能はず。豪富を捨てて食に従ひ

て乞ふ。迦葉平等の法に住し(平等の念を失ふ、こ

となく)、次に応じて(特に貧里を選ばざること

をせず、順番に従つて)乞食を行すべし。』と」

58 頁

2 諸佛及衆の賢聖

4 邪正異觀平等施 よこしまと正しいことについても

差別をしないで見きほめ、誰に對しても平等に施

を行す。

6 誨ふ 教ふに同じ。

6 無礙 無礙。障りなく自由自在。

8 作意 心をひきしめて対象に注意をむける。

8 9 若し法身を得れば則ち能く突に一切を充足する

こと、後の一鉢の飯の如し。

開代釋 もし佛陀と同じ境地に達して施を行するまら

ば、その施が一切すべてに満ち足りることは、後

の(維摩經のこの後で説かれてゐる)維摩が香積

佛から貰つてきた一鉢の御飯が數萬人の人々に与

へても未だ余りがあつたと同様である。

10 凡夫小福 賢聖大福を計せず 凡夫に對する施は小

きな福しかもたらさず、賢聖に對する施は大きな

8 先ず↓先づ(要訂正)

福をもたらすといふ差別観に基く誤つた考へに囚はれること多く、の意。

12 正食を呵す 正しい食べ方について厳しく注意した。

12 邪正不二 邪といひ正といつても、それは形に現はれた姿にすぎまいのであつて、それを生ぜしめて

みるのは因縁であり、両者は本質的には一体。

14 物(衆生)の福田たることを示し 食物をうけるのは相手に布施の行をさせてゐることであり、それは相手に福報をもたらす、即ち衆生は福田である

ことを示してゐる。

14 施主たること 受けた食物をあらゆる人々にわかち与へ、さらに諸々の佛や聖者に捧げる、即ち受け

た食物をもつて自らもまた施しの主となる。

15 無礙無盡法門 何らの障りもなく、また盡きること

もない真理に達する道。

59頁

1 凡聖賢愚善等の施 凡夫であらうと聖人であらうと、

また賢人であらうと愚者であらうと、差別のまい平等の布施。

2 該相 そのかたち。

5 若し能く同じくせんには凡聖泯然として一空なり。

○泯然 一つに融りあふさま。ルビは佛語につき、

みんねんり がよい。

開代講 もし、すべてに對して差別なき平等の施を行

じようとすまらば、凡夫といひ賢聖といふが、

それは形に現はれた差別であつて本質は一体のも

のなることを観すべきである。

6 七おる すべての差別対立を否定する。自他の差別

そのり超えていく。

6 正人 正しく空を觀する人。

7 凡そ抑し聖を揚げ 凡夫を劣れるものとして疎んじ、

聖者をすぐれたものとして称揚する。

7 形相 → 取相 圓訓 (旧版のみ) 囚はれたすがた。

8 憺悔反省 通常は、ざんげはんせいと訓む。

3 若し能く雙べて邪正を亡じ尊卑を存せんば、

○雙又べて 二つをからの意で、邪正と尊卑の両方に

かかる言葉。

現代語訳 もし、邪なことと正しいことの二つについて、

本質は同じなのにたとその外形上の差別を否定し、

また尊いものと卑しいものの二つについて、その

外形上の差別をのり超えて本質は一体であると観

するまらば。

4 分別 区別して考へる。

15 悪趣 悪業の結果としてうける苦しみある生活。

悪道ともいひ、地獄、餓鬼、畜生を三悪趣といふ。

4 悲 他人の苦しみを悲しむ心。

6 7 悲能く苦を抜く 悲心抜苦で、四無量心の一つ。

四無量心は①慈心②悲心③喜無量心④捨

無量心の四つで利他の量りしれまい心さいふ。

11 蒼生 佛語訓みかよいのではまいか。

11 和を以て貴しとせず 語感からこれが良いと

13 14 有子曰 礼の用は和を貴しとせず。先王の道斯

れを美と尊すも、小大之に由れば、行はれざる所あ

り、和を知つて和せども、礼を以て之を節せざれば

亦行はるべからず。

用は、以、と考へたい。その場合、礼は大小和を

用つて貴し、または、礼の和を用つて貴し、と説

むべきであらう。解説に諸説あるも一応左の通り。

現代語訳 有若が言ふのには、礼(道德秩序の維持)

の実現のためには、その側面に於て、和、といふも

のが大切である。昔の聖王の治政の道に於てもこ

の、和、を重要視したが、だからと言つて事の大小

すべてを、和、によれば、礼、の実現が出来なくな

る。和、の大切を知つて一致融合を心がけ

ても、礼、を以てこれを節しまいとその意義を全

うすることが出来なくする。」

1 達たつ川がわるる者もの 朱子の集註の説「達たつ通つう事じ理り」としてある

が、「事理自ら通ふ」と関連して参考になる。

2 諧がひぬる 八音はつおん克よく諧がふ。克よく諧がらぐるに孝を以て

す。の訓みもある。

9 **ルビ** 達たつ者もの

9 結けつ惑わく 煩惱ぼんごうに同じ。

9 客塵きやくじん 偶然ぐぜん的な外がい未み的てきな煩惱ぼんごう。また塵じんは色しき 声しょう 香きやう

味み 触そく 法ほふの六塵りくじんの意いもある。

客塵きやくじん煩惱ぼんごう 客塵きやくじんに同じ。客塵きやくじんは偶然ぐぜん的な付着つしやく、煩惱ぼんごう

とは心に固有こゆうなものである。心に付着つしやくして汚けす

ものなので、客塵きやくじん煩惱ぼんごうといふのである。

10 愛見あいけんの悲ひは則すなはち生死しやうじに於おて疲厭ひえんの心こころ有り。

○愛見 愛と見の二種の煩惱ぼんごう。愛とは情意的じやういきてきに、見

とは知的ちきてきなものになつむこと

○愛見の悲 愛執あいしやくに基もとくあはれみ、即ち個人的愛情あいじやう。○疲厭ひえん 疲つかれて嫌きらになる。

現代語訳 個人的な愛情あいじやうに基もとく慈悲心じいしんは、この迷まよひや苦くる

しみの多い現実人生げんじつじんじやうに於おては、どうしても自分じぶんの

好き嫌すききらひによつて差別さべつをつける慈悲心じいしんとなる。

2 3 救度くど 迷まよひや苦くるから救すくひ、悟さとりの境地きんぢに導みちく。

4 5 「佛道ぶつどうを得えと雖いへども、涅槃ねはんに入いらず、大悲だいひ代たつて苦くる

を受うく。」

現代語訳 佛道ぶつどうの修行しゆぎやうに励むんで悟さとりの境地きんぢに到達たつたつし得えて

も、涅槃ねはん(迷まよひの火かを吹き消けした静寂じやうじやくな境地きんぢ、即

ち衆生しゆじやうの世界せかいから遠とほく離りれてゐる)に入いらうとは

思おもはない。衆生しゆじやうに迷まよひや苦くるしみのある限り、大慈だいじ

心しんを以もつて衆生しゆじやうに代たつてその苦くるをうける。(衆生しゆじやうを救すく

ひ導みちく)」

12 外縁げえん 外がから力ちからを与あたへて物の生起しやうきを助たすける縁えん。

14 法愛ほふあい 救度くどせんとして何れにも偏ひとせざる大慈だいじ悲心ひしん。

14 **益** 佛語はすべてやくりにつき、これが可か。

15 常住他 常住化他。いつまでも受りなく教へ導く。

15 離縛解他 自己が執着より離れることと、他の人々

をも解脱せしめること。

66 頁

2 損を挙げて益を顕はす。悪い面を説明することによ

つて善い面を明かにしてゐる、の意。即ち、厭ふ

心があれは自分にとつて失ふものがあるといふ結

果を招く。厭はざることによつて常住化他の利益

がもたらさるることを明かにしてゐる。

3 怨親 自分に対し怨み害を与へる人と、自分を愛し

てくれる人。

7 8 任々の所生、愛見の覆ふ所と為らす。

現代講義 いたる所に生れいつる者、生きとし生ける者

に對しては、個人的愛情をもつてしては、その全

てを包み抱くことは出来ない。(個人的愛情は肉親

や知友に、即ち接触ある範圍の人々には及ぼすこ

とが可能だが、生きし生ける全世界の人々に對し

て及ぼすことは不可能である。)

8 所見有れば必ず滯る所有り。所愛有れば必ず憎む所

有り。所見、所愛は、次の滯る所、憎む所、と對

照的表現である故、見る所、愛する所、と訓むの

がよいと思ふ。

現代講義 執着したものの見方をすれば必ず滯つて真理を見

究はめることが出来なくなる。囚はれた愛情であ

れば必ずそれを裏返した形で憎しみが生れる。

9 有極の道 相對世界に於ける有限正道。

9 無極の用 究極絶對の真理に導くはたらき。

14 迷惑 道理に迷ひとまどふ。

67 頁

4 5 若したゞ憐愍の心のみ有りて智慧(空心)無くば

則ち心衆生無くして衆生有る顛倒中に没在す。

〇智慧(空心)とある故、憐愍の心(悲心)と、(悲

心)を挿入すべきであらう。

○衆生無くして衆生有るは、願倒中を修飾、説明

してゐるので、心の下に読矣を入れらるべきであら

う。則ち心、衆生無くしてーとすべき。

○願倒 有るものを無いと見、無いものを有ると見

るやうに事理をさかさまに見る。

【現代語訳】もしただ衆生を憐れみ愛む心のみがあつて、

空心（世の中の事象は因縁所生の故に固定的存在

ではないと観する智慧）が無いならば、（空心を以

つて観ずれば）憐愍すべき衆生は存在しないにも

拘らず、あたかも憐愍すべき衆生が存在するとい

ふ事理をさかさまに見る考への中に落ちこむ。

（空心を捨てて、憐愍の心だけで衆生を教化しよ

うとすると、憐愍の対象とすべき衆生が美在する

と考へる。しかしそれは接触し得る範圍の特定の

衆生に對するものであつて、差別相に基く慈悲心

と寄り、虚妄絶對の慈悲心とは寄り得ない。）

56 若しただ空心のみ有りて、憐愍して衆生を度せん

の心を捨てば則ち断滅中に墮つ。

○断滅 世の中の全ての事象は常にうつり変つて行

くものであつて実在しない、また人間も死んでし

まへば身心ともに滅して空無に帰すると固執する

謬見。断見に同じ。

【現代語訳】もしただ空心だけがあつて、衆生を憐れみ教

化しようといふ心を捨ててしまつたならば、衆生

は美在しないといふ謬つた考への中に落ちこむ。

7 心慈 → 憐愍 【要訂正】

8 ルビ 群生を化益

68頁

2 勤めて ↓ 勸めて 【要訂正】 除く。

3 調伏 身のあり方を正しい状態に整へ、悪を抑へ

4 着 執着。

4 愛見の慈 ↓ 非心 【要訂正】

6 相を存し 差別觀を生ずる。例へば肉親や知友に對

する愛情も心の底からの愛情なのであるが、そこ

には肉親、知友に執着した姿があり、親疎によつ

て差別を生ずる。故に愛見の悲は着なのである。

8 逕庭 けいてい 甚だしい相違。逕は小道、こみちと庭とは広

さに於て甚だしい隔りある故にいふ。

69 頁

4 ルビ 向下慈悲 こうがけいひ 懺悔求道 ざんげぐどう

6 7 下化蒼生 げけさうじやう

15 ルビ 蒼生 さうじやう

6 ルビ 上求佛道 じやうぐふつどう

70 頁

2 帰趨 ききう 帰著すべきところ。

7 冥想観念裡 めいじやうかんねり 現前の境界を忘れて想像をめぐらし

から、観念の世界の中で。

10 法空 ほうくう 空物に比すべき佛の教法。

10 海の導師 うみのだうし 海上の案内者。

13 夜光 やこう 暗夜に光を発する名玉。

15 攝他方便 しやくたほふん 他の人に利益を与へるための教へる方法。

15 ルビ 71 頁 門別 もんべつ 一にあらざれば、衆の法室と名づけ、

それこれの家に空物があつて、空物は天下に唯一

つといふわけはない故、衆といふ言葉で形容

してゐる。の意。教へのあり方や方法は、部門別

71 頁

2 ルビ 諭へて たんと 6 ルビ 終に つひ 9 10 ルビ 上求佛道 じやうぐふつどう 下化蒼生 げけさうじやう

14 ルビ 化導 けだう

72 頁

14 世間虚仮唯佛是真 せけんこけゆいぶつぜしん 太子の遺された大切な御言葉な

ので、各自研鑽し深く味はつて頂くためには解説

は省略した方がよいと思ふ。たゞ参考のために、

故桑原暁一先輩が述べられた一節も左に記します。

「世間虚仮・唯佛是真とは聖徳太子の遺言——留

魂の語である。虚仮なる世間と真実なる佛とは別

々のものではない。虚仮を虚仮と感ぜしめるほか

に真実があるのではなく、真実を求めること深け

れば深いほど世間——人間の虚仮なることを知ら

されるほかはないのである。」入国史の世熱 P13

4 抱納無窮 ほうなつむげう ことごとく抱きかかへて窮まることか(まい)

7 ルビ 念はせ 懺悔反省 ざんげはんしょう 8 ルビ 求道心 くどうしん

11 高蹈 こうたう 世俗を離れて気高く身を処す。

13 ルビ 願求 がんぐ 向下 こうか

1 總攝淨化 そうさつじやうけ すべてををさめとつて淨化する。

7-9 「仍ほ大小を辨ぜば、自ら度せんことを求めず、物を清ふを先と為して佛果に等流するを稱して大乘と為し、物を化することを思と為し、但自ら度せんことを求めて、彼の無実を滅するを、名づけて小乗と曰ふ。」

○佛果に等流する 衆生と共に等しく佛の悟りの境地に達する。等しく佛果に帰一する。

○無実を滅す 煩惱を滅した個人々格の完成といふ理想世界、それは直実の悟ではないが、それに到達したと自分で稱へてゐる。

蔵書 ↓ 滅す 要訂正

現代語訳「まほ大衆と小衆を区別すれば、自分だけが救はれようと求めないで、衆生を救ふのを先にして、衆生と共に等しく佛の救ひにあづかるのを稱へて大衆といひ、衆生を教化するのは煩しいこととして、ただ自分だけが救はれることを求めて、世間でよくいふ煩惱を滅した個人々格の完成といふ理想世界に到達したと自ら稱へるのを、名づけて小衆といふのである。」

7 韓非子 かんひし 子は敬称。中国の戦国時代の韓の公子。法家(法律、刑罰をもつて政治の根本と説く学派)の大成者。しばしば書をもつて韓王を諫めたが用ひられず、へ韓非子を著した。後、秦に使用して毒殺された。

10 汚行愆に從ひ おみぎやくしんが 行を汚し愆に從ひと訓むべき。(伝へらる)

14 蒼頡 黃帝の臣。鳥跡を見て初め文字を作つた。

14 自ら環みづかする者もの 自分みづかのためかんにのみ営もみけがる者。

14 私わたくし ムはは困こむ。オはは未みでこ縮く。困こみこんで自分みづかの

所有しゆとした縮く。ムははそれみづかだけでもあたくしの意い、

自分のものといふ境界けいがいの表示ひょうじ。

14 公こうハハははそむく。別べつれる。従したがつてムはは私わたしに（そむく）

15 判はんを同どうじくすと為なす。公こう私しの利害りがいが一致いちじすると考（へる）

76 頁 5 [ルビ] 恨うらみ 憾うらみ 6 [ルビ] 利せいに違たがひ 情こころ 10 [ルビ] 微妙びみょう

77 頁 12 [ルビ] 要諦ようてい 達者たつしや

78 頁

2 「痼定ぐじやうを起おこさすして諸もろの威儀ゐぎを現げんす。是これを宴坐えんざと

為なす。

○ 戒定けいじやう 一切いっけつの心こころの作用さうじゆうを戒けいし尽じんした無心むしんの境地けいだい。

○ 戒蓋定けいがいじやう に同じ。

○ 威儀ゐぎ ① 坐作進退ざさくしんたいが悉ことごとく規則きそくに適あひ、方正ほうせいにして

崇敬すぶりの念ねんを起おこさしめず儀容ぎよう。② 立派りっぺを行なす、振舞ふりまひ

一切いっけつの心こころ作用さうじゆうを戒けいした無心むしんの境地けいだいを体得たいとくし

てあても、それそれを外そとに現出げんしゅつしまいふ、しかもその

坐作進退ざさくしんたいは悉ことごとく規則きそくに適あひ崇敬すぶりに値あつする感容かんじゆうを現あらわ

はしてゐる。このやうなあり方を坐禅ざぜんといふ。」

4 6 「小乗せうじやうは戒蓋けいがいの定じやうに入いれば則すなはち形かたちまほ枯木こぼくのご

とく、運用うんぎんの能無のうむし。大士だいしは実相じつさうの定じやうに入いれば、心

智ち永えいく戒けいして、形八極かたちはつごくに充みち、機きに順したがひて作なす、応

会くわい無方むほうなり。挙動進止きよどうしんし、威儀ゐぎを捨すてず。其そのれ宴坐えんざと

為なす。亦また以もつて極ごくれり。」

枯木こぼくのごといふ、↓枯木こぼくのごとく、**[要訂正]**

作さす応会無方おうゐむほう ↓ 作なす、応会無方おうゐむほう **[要訂正]**

○ 実相じつさうの定じやう 宇宙人生うゑうじんの不生不滅ふしふめつの眞実しんじつのすがたを

内面ないめんに体験たいけんする境地けいだい。

○ 心智しんち 人間の心こころ中にひそんでゐる本末ほんまつの智慧ちゐ。

また心こころは体たい（本体ほんたい）、智ちは用よう（はたらき）で、体

と用ようを並ならべて心智しんちといふ。

○ 永えいく戒けいして すぐれた心智しんちの竹たけきが煩惱ぼんごうをこことご

とく戒けいす。永えいくは、永久えいきうに、盡ことごとく、の意い。

○ 八極はつごく 四方しつぱうと四隅しつごく。転まじて全世界ぜんせかいをいふ。

○尊座 宴には安樂の意がある。身心を寂靜にして坐禪すること。

【開代】小乘の坐禪は心作用を減して無心の境地に到れば、枯木と同じやうなすがたとなつて衆生教化の妨きは失はれしまふ。大乘の菩薩の坐禪は、宇宙人生の不生不滅の眞実の形を内心に體驗するからして、すぐれた心智のゆきが盡く煩惱を減し、全世界の隅々に至るまでも衆生を教化しようとする姿が充滿し、それを發動する機縁に従つて教化をなし、衆生の求める心に依りて自由自在に教化を行する。坐作進退は悉く規則に違ひ崇敬の念を起さしめる威容を保つてゐる。これこそ坐禪なのであり、坐禪の極致なのである。

13 14 「げん 現する無ければ則ち能く現せざる無し。故に前は即ち動にして表、此は即ち寂にして動。」

二重否定の文章なので馴染みにくい。妥当が否か。疑念あるも一応次の通り。

【開代】「大乘の菩薩は不生不滅の真相を体得し、衆

生教化の心が充滿してゐるが、その内面の悟りの境地を形の上に現はし出さない。形に現はさないことが出来るのだから、悟りの境地を外形に現はし出すことも可能なのである。悟りの境地を現はし出してゐる場面は、動（いつでも現象や行動を現はし得る姿）が内面に充満してをり、形の上では寂（真理を体得してゐる寂靜の姿）なのである。悟りの境地を現象や行動として現はし出してゐる場面は、その本質は寂靜なのであるが、形に現はれた姿としては動なのである。

79頁

6 「起の言は出るなり。滅定を起さずして」といふ経

7名すけて↓名づけて【要訂正】

原文の中の「起」といふ語の意味は、「出」といふこととである、の意である。

※さて、「出」の意味であるが「現はし出す」と考へた。即ち、滅定を起さずして」といふのは、滅定（

内心に於て一切に囚はれず、即ち無心の境地を体験)——それを現はし出すといふことは、空を現出してゐることに在る故。現実生活は捨離してしまひ、衆生教化も捨て去ることに在る。だから、戒定を現はし出さずには、即ち、内心には戒定を体得してゐるこそ、現実人生を捨て去らるゝので

といふ小意と解するるのである。

67 「**智空**に合すと雖も、而も有の中に種々の威儀を現はし、無方に物を化するを乃ち名づけて**妄**と爲す。」

智は空に合すと雖も、と訓む方がよい。

開代開訓 「心のゆきは一切の事象に囚はれず、空觀に合致してゐるが(即ち不生不滅の眞理を体得してゐるが)、しかも現実人生を離れず、いひてその中に於て種々の立派な行動を現はし、世の中の隅々に至るまで衆生済度を行す、これを坐禪と名づけるのである。」

89 「**女**は則ち唯、心、自度にして物益するを度し

と爲す。那も好宴を得む。此の句は空有の二境を平しくする能はざることを呵するなり。」

唯心自度にして——詭突を挿入のこと **要訂正**

唯、心は自度にして、と訓む方がよい。

那も好宴を得む、と訓むのがよいと思ふ。

開代開訓 「お前の心はただ自分だけが救はれることを

求めてゐて、他の人々を済度し利益を与へることは面倒で嫌だと思つてゐる。そんなことでは立派な坐禪を行することが出来ようか。この言葉は、現世を超越した突極絶對の世界と現実の人生とのものとを、不離相即のものとして把握し得ないことに對し、厳しく注意してゐるのである。」

11 **ルビ** 行業 通常訓みは、こうぎやう

80 頁 **6** **ルビ** 萬行 **7** **ルビ** 首 **8** **ルビ** 鉢盂

81 頁

3 「見ざる所も、暗化せざるはよし。」 眼のとどかす

りやうな世界の隅々までも、不公平が無くなり世

の中が悉く明るくる。

周化の解説は見当らぬ。これぞ暗喩に當る。

と解すると文章全体の意味が把握できまいので、

右のやうに解説した。

5 功 ヤリとげた成績。

5 事 其の言に當る。駭のつとめ方がなてからの発

言に合つてゐる。

7 疎賤 親しい向柄でゐる者と身分の低い者。

8 近愛 近くにゐて親しい者と愛して眼をかける者。

10 11 折伏 悪人をくじき伏し、迷ひをさませる。

12 魔怨 悪魔のこと。人々に仇を言す怨敵。

12 外道 異端邪教の徒。

13 外道 外道を伏す。

82頁

2 辯 辯古。辯は辯に通ず。

3 人天尚其れ敵すること無し。四趣何故ぞ論ずる

に足らん。

○四趣 地獄、餓鬼、畜生、修羅の四悪道にあちて

ゐる者。印度の古来の考へ方では、生ある者は六

道（人天と四趣）に輪廻（生れかはり死にかはり

果てしなくめぐりさまよふ）するといふ思想があ

つた。

現代語訳 「人向界や天上界にある者たちもこれをうち

破ることは出来ない。四悪道にあちてゐる者たち

が抗し得ないことは論ずるまでもない。」

7 邪見 よこしまを考へ。

7 故に義を以て伏制と言ふ。

○義 道理。

○伏制 伏は降伏、制は極道にせしめるのを正道に引

き戻す。

現代語訳 その故に伏と言ひ、制と言ふのは、それなり

に道理がある。

※この語句の前には威を現じて伏せんと叙すること

とせんと伏しについて言及してゐるが制には

何ら触れてゐる。しかも、伏制の説明は次の
 魔怨を降伏と言ひ、外道を制と称する。一、故
 に制といふ。この語句なのである。従つてこの語句
 は伏制の説明の後に挿入されるのが正しいのでは
 ないかと思ふ。即ち次のやうになる。

9 行——悟執ありて宗に乘く。故に制といふ。
 (挿入) 一、故に義を以て伏制と言ふ。此の句は下化蒼生

9 悟執 誤つてゐるにも拘らず、正しい悟りと固執する。

9 宗 根本の教へ。根本の道理。

10 不請の友 菩薩が請はれないにも拘らず、大悲をこ

つて進んで衆生の友となり利益を与へるをいふ。

10 11 「此の句は下化蒼生を明かす、亦即ち上の不請の
 友を帖して上の外悪干さざることを広むるなり。」

上の句は、前述のと解してよしが詳説すは次の
 通りである。

經典原文

為護法城、受持正法、能獅子吼、名聞十方、衆人不請、

友而安之。忍隆三宅能使不絕。降伏魔怨、制諸外道。

王語は菩薩で、菩薩はこのやうだと説明してゐる
 經典原文である。太子はこの經典の解説で、城に

は④外悪干さざること能はず⑤王道能く流通す、の二
 義があるとされてゐる。そして、能く、以下を四つ

に分けられ、①は上弘佛道、②は下化群生、③は

上弘佛道、④は下化蒼生を明かにした言葉だとさ
 れ、そのうちの①③は⑤王道能く流通す、を、②

④は④外悪干さざること能はず、を明かにしてゐると
 される。従つて、上の不請の友の、上は②を指し、

上の外悪干さざるの、上は④を指すのである。

※不請の友を帖して、帖は本末は紙をとじて書物に
 するといふ意味だが、つける、したがふ、などの意

もある。ここでは右の解説の通り②④は④外悪不
 干を明かにしてゐるのだから、前述の不請の友の

説明に、この降伏の説明をかこめて(さらに併け
 加へて)、前述の外道や悪魔に干さざること

なめてゐるのである。」といふ意味になる。彼つて

不請の友に帖してと訓むべきかと思ふ。

尚、花山信勝氏は現行ルビと同じく帖してと訓んでゐる。

83頁

4ルビ 調伏

9ルビ 歸向

84頁

1ルビ 靈性 佛語訓みは、此いしよろゝかッリようしよう

3「一切衆生悉有佛性」悉有佛性と棒訓みもする。

現代語訳 この世に生をうけた一切の人々は、佛にまじり得る素質を本来的に悉く有してゐる。

7 二柄 ニつの権力

7 導制 指導と制御

9 刑法 ↓ 刑徳 要訂正

9 (二柄第二) ↓ 削除する 要訂正

11 天壤 天と地。転じて懸隔の甚だしい喩。

14 道力 道を得ることによつて發する力

14 法令 久住せ 法を以て久しく住せしむること

14 重悪

と書き下しにすべきであらう。

現代語訳 行為の規範たる法が、永い年月に亘つて人々の生活の依り処たらしめる。

86頁 8ルビ 英雄的行業

85頁 13ルビ 国司・国造 14ルビ 賦斂

87頁 4 勝他 他に勝ること。56ルビ 嫉妬む

6 卑陋 卑しく心が狭い。

7 「是を以て五百歳の後にして、乃今賢に遇はしむとも千載以て一聖を待つこと難し」

ここは入孟子の、由文王至於孔子五百有餘歳をふまへた語句である。

堯・舜——五百有餘年 ↓ 湯王(殷)——五百有餘年 ↓ 文王(周)——五百有餘年 ↓ 孔子

それぞれの間隔が五百有餘年といふリズムで聖王が出現するといふ思想が入孟子に記されてゐる。

孟子は、孔子をへだたること未だ百有餘年、にも

拘らず孔子の道が見失はれようとしてゐる。とす
れば今後孔子の道を伝へる者は現はれまいかも知
れない。だから自分が孔子の道を伝へねばならな
いと、孟子が自らに与へられた使命観を述べてゐ
る箇所である。

現代講義

「さういふわけだから賢人の出現は甚だ難
しい。しかし支那の歴史でも見られるやうに）五
百年経てば或は賢人が現はれることがあるかも知
れない。しかし賢人よりも更にすぐれた聖人は千
年経つてもこの世に現はれることは極めて難しい
であらう。（だがいつれにしても賢聖が出現しなけ
れば決して国は治まることはない。国を治めるこ
とは、この人商性の現実を見つめれば如何に困難
なことであらうか）」

「……さういふ太子のお嘆
きが表現されてゐる。」

10 聖賢 ↓ 賢聖

11 聖賢 ↓ 賢聖

88 頁

6 身命財の常捨を 勝曼經義疏（戒受正法章）の語句。

本書のP167にその箇所がある。

7 光闡 女ぎらかにひらく。

9 ルビ 生死 13 ルビ 法施 15 ルビ 淨名

15 六躬謁 すっかり無くなつてしまふ。

15 神 人々の心、精神。佛語の場合は「じん」と訓む。

89 頁

1 「前に未れば精を得、後に未れば麤を得。」

○ 精は甚。麤は粗の意。

現代講義 「最初の頃に未だ人は澤山の物品を貰ふこと
が出来るが、最後の頃に未だ人は少量の物品しか
貰ふことが出来ない。」

3 「則ち為さざるなしと言はん。」へ昭和会本は、
「為さざるまじと言ふ。」この方がよいと思ふ。

3 ルビ 六度 吳音はろくどであり、リリくどは誤り。

4 四摂 四摂事の略で、人々を悟りに導く四つの方法。

布施(物品や受や佛の教法を相手に与へる)、愛語

(相手の長所を讃へる)、利行(相手に利益を与へる)

同事(相手と同じ立場にわが身を置き、相手と同じ

仕事にいそしむ)の四つの方法。

13 深甚微妙 極めて奥深く、言ひ現けしやうもない程

妙なること。

13 14 14 自行能はずんば安んぞ衆を濟ふことを得む

90 頁

23 「下を慈み上を敬ふは天(下)の大義なり」

これは經典原文の、未学を軽んぜず、学を敬ふこ

と佛の如しク(未だ佛法を学ばぬ者を疎んじない、

既に佛法を学ぶ者に對しては佛と同じやうに敬ふ)

に於いての太子の御言葉である。従つて、下は

未学を、上は、学を暗示してゐる。

※義疏の原文は「天の大義」とあるが、黒上先生が補

はれたやうに「天下の」とすべきである。

3 4 「愚人の一徳は知者の師なり」 「匹夫匹婦といへ

ども一能予以勝れり」 前者は「百行」、後者は「入

書經」の一節である。この他へ老子の「不善の

人は善人の資なり」といふ言葉も引用してあり、

それらを含めて次のやうに述べてをらぬる太子の

御言葉は重要である。

此の四(經典原文、老子、書經、百行)は但

言は少しく要れども内意は皆同じ。然れば則ち

憍は是れ鬼神中の極といふこと明かなりク

憍慢に對する太子の厳しいお気持がうかがはれる。

91 頁 6 求道 7 8 教言 10 念はせ

12 形骸 中味が失はれてしまつて外形のみ残つてゐる。

92 頁 4 建立 偏執 6 蒼生 または、そせせい

9 大聖 10 荷はせ

14 勝鬘經義疏

193 頁 2 舍衛國 4 偈頌 偈頌

3 応現 佛や菩薩が衆生の機縁に應じて教化のため

安を現はす。

7 11 此の章の末意は勝鬘は前よりこのかた未だ常

住を聞かず、但今父母の遺書に因りて乃ち聞くこと

を得たり。所以に今日の常住眞実を歎じて願うて帰

依を急す。昔日の無常に帰依するに異なり、且つ善

を行するの義は、本帰依にあり。今広く萬行の道そ

照さんと欲するが故に、帰依を以て首となすなり。

所以に優婆塞戒經に云く、若し三室に依らずして受

戒せば戒は堅強ならず、綵色の膠をきか如しと。

優婆塞戒經 優婆塞とは在家にあつて佛法を行す

る男性、その男性が守る戒を説いた經典。

現代語訳 「この章の出来た意味は勝鬘は昔から今まで

未だかつて常住（不変の）眞実（まこと）を聞いて

たことがなかった。しかし今は父母の手紙によつ

てはじめて聞くことができた。そこで今日聞くこ

とが出来た常住眞実（不変のまこと）のすばらし

さを讃歎して、常住眞実の道に入ることを願つて

帰依（信仰）するのである。そればかりで無常（

変るもの、小乗）に帰依したのとは異なる、かつ

また、大乘に於ける善を行することの意味（価値）

は、根本は帰依に基くのである。今、勝鬘は、広

く、ありとあらゆる行の道を明かにしたいと思ふ

ので、帰依を何よりも大切なことと自覚するので

ある。故に優婆塞戒經にも「もし佛法僧の三室に

帰依せずして戒を受ければ、その戒は堅強ではな

い。あたかも綵色（絵具）に膠をまぜないやうな

もので、たちまち割けてしまふのである。」と言つ

てゐる。」

14 身善行 口善行

15 染果 涅槃をいふ。一切の迷ひから脱した境地。

織田得能、中村元共に「らくが」と訓んでゐる。

94頁

1 勤 勤め導く。 4 三行に如くは莫く、

6 称嘆 ほめたたへる。

6 諸天 天上世界に住して佛法を守護する印度の神々。

6 護念 心に念じて護る。

7 伏敬 尊ぶ敬ぶ。

7 惡世 惡事が盛んに行はれる世の中。

7 刀杖の困 劍や棒で迫害をうける身体の苦しみ。即ち外面きものから生ずる苦しみ。

7 惡鬼入身の乱 邪惡を衣又や羅利がつきまとうて起させる心の乱れ。即ち内面から生ずる苦しみ。

8 求名の比丘の毀謗の辱 名譽や名聲を求めし男の僧が法をぞして逆ふこと。比丘は出家得度して具足戒をうけた男の僧。辱は逆ふの意。

8 惡僧邪律の嘖 初版嘖 旧版嘖 がまひすまき 奥訂正 惡い僧たちがよこしまな戒律を言ひたてて押しつけてくること。

9 本釈 光宅師の法華義記を指す。

太子と光宅師の異は、簡単に言へば學說の異である。光宅師の說の次に、太子は「亦好し、欲するに隨つて用う可し」と述べてをられる。

9 本釈は少しく異有り、句矣に訂正。

10 難過行 過ちから離れる修行。

3 欣采 願ひもとめる。

7 形相 かたちやすかた。

14 「眞笑とは、「眞笑する者」とは、しに訂正すべしと思ふ。

14 「眞笑とは、「眞笑する者」とは、しに訂正すべしと思ふ。

14 眞笑とは、「眞笑する者」とは、しに訂正すべしと思ふ。

14 眞笑とは、「眞笑する者」とは、しに訂正すべしと思ふ。

14 眞笑とは、「眞笑する者」とは、しに訂正すべしと思ふ。

14 眞笑とは、「眞笑する者」とは、しに訂正すべしと思ふ。

14 眞笑とは、「眞笑する者」とは、しに訂正すべしと思ふ。

14 眞笑とは、「眞笑する者」とは、しに訂正すべしと思ふ。

14 眞笑とは、「眞笑する者」とは、しに訂正すべしと思ふ。

14 眞笑とは、「眞笑する者」とは、しに訂正すべしと思ふ。

14 眞笑とは、「眞笑する者」とは、しに訂正すべしと思ふ。

14 眞笑とは、「眞笑する者」とは、しに訂正すべしと思ふ。

14 眞笑とは、「眞笑する者」とは、しに訂正すべしと思ふ。

これを、実と曰ふ。

※、眞実なる者について太子は、最初に佛陀の身体をいひ、次に徳(心)を述べてゐる。抽象的でない、狀尊の具体的人格を通じて俾はれてゐることに注意すべきであらう。

※、虚なきを実と曰ふ。虚と訓むりが通常であるが、聖体、巽然など佛語訓み(吳音)につき、こと佛語訓みにした。尚、虚実のじつは慣用音で、実の漢音「じち」、吳音「じち」である。

15 「佛法とます(勝鬘經) ↓ 佛法とます」

(カギカッコを付す) 要訂正

96頁

6長者 印度の佛陀時代の商人組合の頭。第三階級に

属してゐるが、特に富み榮えて第二階級とも同等の交際をなしうる者。印度の階級は次の通り。

- ① 婆羅門 (天を祭るを恥とする印度の僧侶階級)
- ② 刹帝利 (武士階級)
- ③ 吠舍 (商人、地主階級)
- ④ 刹利 (武士階級)

④ 首陀 (農民、奴隷階級)

6 偈頌 ↓ げいり 要訂正 解説 P 36

8 「佛」善と不善とに「佛」は不要だと思ふ。 前の「佛徳無量を讃嘆」

との語句ある故、(佛)は不要だと思ふ。

9 分別 外的な事物に囚はれ區別して考へる。

9 虚空の如し 大空のやうに広く他に妨げられない。

11 人空 人間世界における空。佛陀のことをいふ。

12 帰敬 帰依し崇敬する。

12 13 「天に在りては天空たり、人に在りては人空たり。人天に空たる者豈人天の所能ならんや。故に物敬承

せざることなり」

所能 ↓ 能くする所、書き下しにすべきと思ふ。

この筆法師の言葉は明確に把握できまいが一応次の通り。

の通り。

開代講記 「(佛陀は)天世界の神々(印度の神々)の世界

に於ては、神々の空として崇敬され、人間世界に

於ては人々の空として崇敬される。人間世界や天

上界に於て空として尊崇される存在であるから、
 人間や神々(印度の神々)には、とても到達し得ない
 崇高な境地に達してをられる。だから帰依し尊
 崇しない人々はるまいのである。」

15 杓衰 あはれむ。

97頁

1 摂化 摂受化益 人々を差別すくをさめとつて、導
 き利益を与へる。

3 ルビ 解脱 變遷 4 ルビ 昏迷 7 ルビ 讚仰
 14 ルビ 教化 15 ルビ 羊・鹿

98頁

1 ルビ 牛 2 ルビ 大白牛車

6 一、経に曰く→(一)、経に曰く(カッゴを付す)

6 苦惱 ↓ 衰惱 無明暗蔽 ↓ 無明・暗蔽

7 方便智慧 ↓ 方便・智慧 8 具足 ↓ 具足

12 二、経に曰く→(二)、経に曰く(カッゴを付す)

99頁 1 三、経に→(三)、経に曰く(カッゴを付す)

6 怖畏 おそれること。6 衰惱 なやみ。

6 憂患 心配。うれひ。

6 無明 すべての煩惱の生ずる根元で、人間が過去世
 から背負つてゐるもの。

6 暗蔽 無智の闇に覆はれてゐること。

6 7 「永く盡く餘り無し。花山信勝氏入岩波文庫」
 は、「永く盡くして餘すこと無し」と訓んでゐる。

「それらを永年に亘つて体験し尽くし、それらを
 のり超えてゐて、おそれや迷ひなどは全く無い。
 或はまたそれらを完全に滅し尽くしてゐて、お
 それや迷ひなどは全く無い。」

7 無量知見 現象と本体を証知する見解が無量である。
 無量の知見と、を挿入すべきと思ふ。

7 ルビ 力

7 無所畏 おそれが無い。

7 大神力 思議することの出来ない力の働き。神は不
 測の義。

7 方便、智慧波羅密 方便と智慧の二つの波羅密。

波羅密は、度、また、到彼岸」と漢訳し、彼岸に至つ

た、彼岸への道、悟りの道、などの意。

9 含靈 靈性をつつ以有するもの、衆生と同義。

10 國邑 國の首都。

12 懈倦 倦れをまける、嫌になつて途中で止める。

99 頁

1 (三)の「み」が、和訳すれば「の」文の爲に書き下しにして

なく不統一である。(三)は書き下しに改め、8、9、

10 行を削除、例へば(三)の經文を釈するに、など

訂正すべきであらう。

1 三界 佛教の世界觀で、衆生が生死流轉する迷ひの

世界を欲界、色界、無色界の三つに分けたもの。

欲界は性欲、貪欲など肉体的欲望が支配する。

色界は、肉体的欲望からは離れてゐるが、まほ物

質に執着する世界。

無色界は、物質を超えた世界で精神的欲求が支配

する。思想、イデオロギーの世界と考へてよい。

三界の火宅」とは、三界は生死輪廻する迷ひの生

存界であり、その苦しみの状態は火のついた家に

喩へられる。

1 三毒 貪欲、瞋恚、慢(いかり)愚痴の三つの毒。

1 阿耨多羅三藐三菩提 阿耨多羅は、無上、三藐三菩

提は、正遍智、または、正等正覚」と訳す。佛陀の最

上絶対完全な智をいふ。

3 「而も三界の朽ち故りたる火宅に生ずること」より

以下第二に五義に兼ね合す。」

太子義疏によれば、98、99頁の經典(一)(二)(三)の

全体は、宅主の譬ひあり、これには六義ある。一

は宅主の義、二は其の家広大の義、三は唯一門あ

るの義、四は五百人の義、五は火起るの義、六は

三十子の義である。第一には經典(一)(二)は宅主

の義に合はし、第二に經典(三)は其の家広大の義

以下の五義に合せてある。

4 五濁(ごじよく) 劫饑(きやくけう)、惡疫(あくえき)、兵乱(へいらん)などの時代の災厄(わざ)

見濁(けんじよく) (邪見(じあ)の横行による思想的混乱(こんらん))、煩惱濁(ぼんなんじよく)

惱(なう)が盛んで悪徳(あくとく)がはびこる、衆生濁(しゆじやうじよく) (衆人(しゆじん)相争(さうじやう))

社会秩序(しゃかいじつじ)の破壊(はくわい)、命濁(めいじよく) (衆生(しゆじやう)の寿命(じゆみん)が次第(じだい)に短縮(たんじやく))

されき。以上五種のけがれをいふ。

4 八苦(はつく) 生(なま)、老(らう)、病(びやう)、死(し)の四苦(しやく)に、愛別離苦(あいべつりき) (愛する

者に別れる苦)、怨憎会苦(おんじやうかい) (怨み憎む者に会(あ)う苦)

求不得苦(もとめずえく) (求めて得(え)ざる苦)、五陰盛苦(ごいんじやうじよく) (五蘊(ごいん)から

生(なま)る身心(しんしん)の苦)の四苦(しやく)を合せたもの。

五陰(ごいん) 五蘊(ごいん) 衆生(しゆじやう)の身心(しんしん)を五種(ごしゆ) (色受想行識(しきじうじやうじやうじき)の

集りとして捉(とら)へる見方(けんぽう)である。色(しき)は身体(しんたい)及び物質(ぶつ質)

受(じゆ)は苦樂(くらく)を感受(かんじゆ)する心作用(しんじやくじよう)、感覺(かんじやく)、想(じやう)は想像(じやうじやう)を加

へる心作用(しんじやくじよう)、表象作用(びやうじやうじよう)、行(ぎやう)は意志(いし)あるいは衝動(しやうどう)

的(てき)欲求(じやくきう)の心作用(しんじやくじよう)、識(じき)は意識(いし)し分別(ぶんべつ)する認識作用(にんしきじやくじよう)。

色(しき)は身体(しんたい)、受(じゆ)以下(いげ)は心に属(ぞく)するものである。

7 光宅大師(くわうたくだいし) 法雲(ほふうん)のこと。AD475-529年。梁(りやう)の武帝(てい)に重

んじらぬ大僧正(だいそうじやう)となつた。法華義記(ほふわぎぎ)八卷(はつ巻)が現存(げんぞん)。

光宅寺(くわうたくじ)に住(す)、智藏(ちざう)僧昱(そうじやく)とともに梁(りやう)の三大法師(さんだいほふし)

と称(な)される。

9 ルビ 朽(く)ち腐(く)り

14 15

(旧版) (い)といひ、光宅師(くわうたくし)が(い)此(こ)の文(ぶん)を

→といひ、光宅師(くわうたくし)が(い)此(こ)の文(ぶん)を

(初版) (い)といひ、此(こ)の文(ぶん)を

→といひ、光宅師(くわうたくし)が(い)此(こ)の文(ぶん)を

100 頁

1 ルビ 悲心(ひしん)拔苦(はつく) 慈心(じしん)与樂(よらく) 2 ルビ 蒼生(そうじやう)を化益(けやく)

3 ルビ 含靈(がんれい) 化父(けふ) 4 ルビ 解倦(けけん) 利益(りやく) 如未(に)忘(わす)る

6 ルビ 教化的(きやうけつてき) 甚深(じんしん) 8 ルビ 無倦(むけん) 矜哀(けんあい)

10 ルビ 濟度(じやくど) 大聖(だいじやう)狀尊(じやうそん) 13 ルビ 嘆佛(たんぶつ)眞実(しんじつ)功徳(こうとく)章(しやう)

14 ルビ 偈文(げもん)

15 哀駭(あいかい)心(しん) ↓ あいみん 圓訂正(えんていじやう)

哀(あ)は悲哀(ひがひ)、駭(かい)は憐愍(れんみん) 人の舌(した)を見て起(た)す慈悲(じ)の情(じやう)。

15 覆護(ふくご) 外(ぐわい)から魔(ま)のちやう護(ご)る。

15 法種 法身の悟りを得る因とよむ種。 15 後世

15 佛の常の授受を願ふ、入昭和会本は、願はくは佛

常に授受したまへ。と訓んでゐる。勝鬘が佛徳を
嘆ずる偈である故、へ昭和会本Vの訓みも正しい。

101 頁

1 「我を哀愍」(現行版)は「を付すこと。」

1 「章中の第二に護つたまへと請ふなり。」

嘆佛真実功德章は、前半は佛の常住真実を嘆いて
願ふて帰依をます偈所、後半は釈尊に救ひを請ふ
偈所に分れてゐる。こゝは前半につづいて第二に
釈尊に護つて下さいとお願ひしてゐる、の意であ
る。願ふ内容は、第六偈と第八偈を指す。

102 頁

2 煩

3 捨家棄欲

6 救度 衆生を迷ひや苦しみから救ひ出す。

103 頁

3 橘大郎女

9 求道

11 「己れ能くすと雖も、然も世に違して自ら異なること
と莫此」

現代語訳 「自分が悟りの境地に到達し得たからと言つ

ても、現実の世間生活に随順しをいひ、自分だけ
が高い境地にあつて他の人々とは異つてゐるのだ

といふ態度を現はしてはよろこばない。」

12 外の論 佛典を内典といふのに対して中国の典籍を

外典といふ。こゝはへ論語Vを意味してゐる。

12 「言遂て行を危くす」

現代語訳 「言葉は常に謙虚にして他を責めず、人々と

相和す發言をする。そして常に自らの足らざるを

省みて行ひは正しい道をしつかり踏みしめて行く。」

※論語の、邦に道有るときは言を危くし行を危くす。

邦に道無きときは、行を危くし言遂て行を危くす。

最後の部分のみを引用され、しかも順序が逆にま

つてゐることに注意すべきである。

14 行化

1 染 不潔不淨の意。

1 有 世俗。執着ある姿の意。

1 [ルビ] 物を益す

3 [ルビ] 威儀 解説 P 78

3 道儀 人のふみ行ふべき正しいあり方、の意であらう。

經典原文は「行少欲知足而不捨世法。不壞威儀而能隨俗」となつてをり、道儀の語句はよい。従つて「道儀を壊せずして能く俗に隨ふ」は、吉藏菩薩が「威多道」に代へて二度繰り返して強調したものであらう。

4 俯仰天下 世面を見まはしたところ、の意であらう。

4 「皆我同じと謂ふも、我独り人に異なるなり。」

開代講 姿、形は世面の人々と私とは同じであまきか、道をふみはつしてゐるい矣で私だけは他の人々と

異つてゐる。といふ意であらうか？

10 [ルビ] 深痛

12 [ルビ] 懺悔末道

14 [ルビ] 世を統ぶる

2 帰棧 をさめとり帰着せしめる。

2 基かせ給ふ → 給ふ [奥訂]

11 [ルビ] 丈夫者 14 [ルビ] 其の女

14 道器 佛道を修得する器。

1 「聰慧利根、通敏にして悟り易し。」 P 188 の太子の

解説を参照のこと。

2 護軍 ほめたたへ、重んずる。

2 子を相る ↓ 相る (旧版のみ) [奥訂]

4 勝道 すぐれた悟りへの道、大衆の道。

4 [ルビ] 亦自ら我が子

4 道法 さとりの道。

5 慧命 智慧を寿命に喩へた語。また智慧の法身を寿命に喩へた語。衆生は生れながら具つてゐる法性を持統させる故に寿命に喩へる。

命に喩へた語。衆生は生れながら具つてゐる法性を持統させる故に寿命に喩へる。

3 諸々の悪をなすこと多く、諸々の善を奉行せよ。

日本書紀舒明即位前記にある。山背大兄王が境部

摩理勢（聖徳太子の忠臣、馬子の弟）にさとされ

た言葉の中にある太子の御遺戒である。この後に

「余この言を承けりて永き戒となす。この以に私

の情あれども、忍びて怨むること無し」といふ言

葉がつづく。これより考へると、諸々の悪とは、

私心あること、怨む心あること、といふ内容をさ

してゐると思ふ。単に善悪といふ一般的な理解では、

この言葉を遺された太子の御心はあからぬのでは

ないだらうか。

尚、前の「我が子の称は自他を別たす、唯善に在

り。は義疏の一節であるが、その善が、諸善奉

行の善を呼び起すやうな文章の脈絡であらう。

6 芳縁 芳縁 芳縁 芳縁 芳縁 芳縁 芳縁 芳縁 芳縁 芳縁

14 [ルビ] 不請

15 法母 佛の教へを体し、母の如くにいつくしみ深

109 頁 1 [ルビ] 不請 12 [ルビ] 障へられぬ 13 [ルビ] 蒼生 群生

110 頁 1 正しき ↓ 正しく [要訂正]

14 帰嚮 心を傾けおもむき向ふ。帰向に同じ。

15 味識 あぢはひ識る。

111 頁 8 [ルビ] 法身を得

11 心霊 心識の靈妙なること。

112 頁 2 僧 三人か五人以上の比丘が一処に集つて和合して

修行する者。一人で修行するのではなく、三人か

五人以上、しかも和合するといふ意味が含まれて

ゐることは重要と思ふ。

6 [ルビ] 自行外化能く具して

6 [ルビ] 自行外化能く具して

6 [ルビ] 自行外化能く具して

6 [ルビ] 自行外化能く具して

8 衆生化益

10 薬王・妙音・観世音三品 正式の名称は、薬王菩薩

本事品・妙音菩薩品・観世音菩薩普門品である。

11 三大士 薬王・妙音・観世音の三菩薩。

13 普現の色身を以て弘通する 菩薩が種々の姿を現は

して衆生を化益する。花山信勝氏は、普く色身を

現れるを以て弘通す」と訓んでゐる。

14 但互に挙げて明を為すなり。対照的に、互にその一

方面を強調して明かに知ることを便ならしめてお

る、の意。

6 弘傳 ひろめ伝へる。 7 示現 示現

12 軌則 行為の準則。

13 帰依を辨せば 一体三空と別体三空についでこの帰依

を区別するまらば、の意。辨するまらば」と訓

むのがよいと思ふ。

13 習解 善を習ひ、悪を滅する。

13 断惑 煩惱を断ちきる。惑は続けて訓む場合なく。

14 旨帰 根本の趣旨。

114 頁 3 弘宣 述べひろめる。

8 莊嚴 智解

115 頁 8 四生の終帰、萬国の極宗 9 救護

10 本帰依に在り。 14 靈性

1 2 伽藍縁起竝資財帳 2 御誓言

3 日月 4 御法を萬代に流伝し

8 經典佛国品中大乘菩薩 ↓ 佛国品中、大乘菩薩(諡)

8 畏化 9 獅子ロビ

13 実相 すべてのものの真実ありのままのすがた。真

実の理法、不變の理、真如、法性といふ意味まで

深めて用ひる。

4 非擬の敵 非は非に通じ、せしむ。擬は疑に通じ、

うたがふ。正法をせしり疑ふ敵の意。

6 [ルビ] 心住

6 恒沙 カンジス河の砂の数ほどに無数無量なること。

8 抄理 深妙不可思議の理法。

8 天魔 佛法をさまたげる魔王。他化自在天(欲界の

頂にある第六天)の魔王。

8 外道 佛法をさまたげる異教徒。 [ルビ] 障礙

11 法城を護らむが爲に P 82の解説と関連あり。

11 世城に二義あり。一には一義あり。一には(句意)

11 外悪 外道と悪魔。外敵外患。

11 王道 王者の行ふ無私無偏、公明正大の治道。

12 通流 ひろく行きわたる。

12 内合 譬へま教典の意義に合致させる、の意であら

う。へ昭知会本は内合としてゐる。

故桑原暎一先輩は、「この譬への内面的意義は」と

12 [ルビ] 八地 いふことゝ自分はすませてゐる。八日本精神史鈔

13 [ルビ] 流通

4 [ルビ] 広汎煩雜

7 例同 同じやうに例をとる、の意であらう。

10 [ルビ] 治らせ給ひ

14 決定 決断安任して動かさぬ。

14 永く出入の要なく、出入は往來(生水かけり、輪廻

する)と同義である。従つて、輪廻する述ひの世

界を完全に超脱してゐて、の意であらう。

12 天魔波旬 天魔のこと。波旬は悪魔の呼称。

14 外敵外患と雖も、侵す ↓ 削除する [ルビ]

8 10 なむ 終助詞。動詞、助動詞の未然形に接続し、

他にあつらへ望む意を現はす。

15 紹隆 受けついでいよいよ盛んにする。

1 **ルビ** 群生海 4 5 檣原 カシハラ **要訂正**

5 **ルビ** 大詔 オホミコトノリ

6 大人の制を立つ、義必ず時に随ふ。

現代語訳 聖賢が制度を立てるのは、道理として必ず良

い時節を選び、それに従ふものである。

6 苟も民に利有らば、何ぞ聖造に妨はむ。

現代語訳 もしも国民の利益となることであるならば、

どんなことでも聖王の行ふわざとして妨げはまい。

7 **ルビ** 経営 **ルビ** 空位 ウチ **要訂正**

7 元元 国民。

7 乾靈 天照大神。

8 徳 みめぐみ。ニ慈愛。

8 皇孫 **要訂正**

「ままは御孫子の略。天照大神の御孫の瓊々杵尊

の称。広くは歴代天皇をさす。

8 六合 天地と四方、即ち国のうち。

9 八紘を掩ひて宇と為む 八方の遠いところまでを合

せて一つの家とする。

「紘は広い天地に網をかける意。宇は家、屋根。

11 「神ながらのみち」

かむの、からーかむ、な、から、と変化した。

からはそのものに備つてゐる本性。人からなど。

① ある行動が神としてのものであるさま。神の本性

のままに。

山川も依りてつかふる神ながらたぎつ河内

に船出するかも

② ある状態などが神の意志のままに存在するさま。

神の心のままに。

葦原の瑞穂の国は神をから言挙げせぬ国

「かむながらの道」といふやうに用ひられたのは、

書紀大化三年四月二十六日の、惟神我が子治らす

べしとこよさしたまひきり(神の意志のまにま

にその御子孫がお治めに在る国として御命にま

りました。)の惟神の分注に、

神に隨ふ道にして亦自ら神の道あるを謂ふ。

とあり、此に導かれ「神まがらの道」といふ

思慮が生れた。(近世末) 但しこの分注は後世

(といつても院政期以前)の追記といふ説あり。

明治三年一月三日 大教宣布の詔

宜しく治教を明かにし以て惟神の大道を

宣揚すべし。

以後一般に用ひられるに至つた。

15 神祇 天つ神と国つ神。

122 頁

1 1 朕即かく 天皇等

1 天に臨まり地に踏して 心此謹むさま。

1 3 敦く神祇を祀ひたまひ、周く山川を祀りて幽に

乾坤に通はしたまへり。この以に陰陽用知る造化英

に詔ひき。原文は次の通りである。

敦禮神祇 周祠山川 幽通乾坤 是以

陰陽用知 造化英調

原文を見ると対句の使ひ方が明瞭で、書き下し文では気付けまい味けを感ずる。

例へば、乾坤に通はしたまへり。も原文で見ると、

乾坤は、神祇であり、山川であると言つ

てもよい。具体的自然でもあり、自然を貫く理法

でもあり、礼拝の対象としての自然でもある。

通といふ字も上の禮、祠と関連してよめば、

自然の生命と交感する趣きがある。次の陰陽と

造化も理法と具象の表裏の關係にあることがわ

かる。用和と共調は、用と共が共に用かれ

た世界を示し、和と調は調和、和を以て貴

しと為す。上和で下睦びて事を論ふに諧、等

さまさまの言葉が浮かんでくる。さうみてくると、

和の世界は、敦く、周く、幽に、神々を祈る心の

中に表現する世界であることにも気付けしめられ

※以上のやうなことから見ても、造化せうわと漢字音の訓

みが良いのではまいか。書紀の訓み方は全面的に

再検討すべきと思ふ。

2 開あ和まふ、甘あまふ、甘あまんずる ↓ 和あす。

6 位ゐ東とう宮みやに居ゐりて萬ばん機ぎを總そう持ぢし天皇てんかうの事ことを行おこなふ。

8 件けん造ぞう ↓ とものみやつこ 國くに前まへ正ただ

12 十じゅう方ぽう 四方しやう(東西南北) 四し維ゐ(東南西南西北東北)

及び上下。

12 三さん世ぜ 過去、現在、未來。

123 頁

9 かしの実の 櫃びの実は一ひと椀わんに一つだけまで、シヒと

フシヒミヒトシなどにかがる枕詞。

124 頁

3 光こう摩ま 4 群ぐん生せい

5 10 衆しゆ生じやう之の類るい是こゝに菩薩ぼさつ佛ぶつ土ど。とは、夫とれ國こく土どを論ろんす

れは淨じやう機ぎの殊ことありと雖いへども、此こゝには是こゝに凡たゞ皆みな衆しゆ生じやうの善ぜん惡あくに

由よりて感かんを為なす。故ゆゑに衆しゆ生じやうに於おいて必かならずず定さだんで己おのが

國くにと稱なづするの義ぎあり。若しし至し聖じやうを論ろんずれば、即すなはち智ち、

眞まこと如ごとの理りに冥みやうして、永とこく名な相さうの域いきを絶たし、彼かれはく此こゝ

なく、取しりなく捨すなく、既すでに大たい虚きよを以もつて体たいとまし、萬まん

法ほうを照てうすを心こゝろと為なす。何なんぞ名な相さうとして量りやうすべきこと

あらむ。寧いづろ復また定さだめて己おのが國くにと稱なづせむや。而しかして大たい

悲かな息いきむことなく、機きに隨したがひて化けを施ほす。則すなはち衆しゆ生じやうの

在ある所ところ至いたらずといふ所ところなし。故ゆゑに衆しゆ生じやうの類るい是こゝに凡たゞ皆みな菩薩ぼさつ

佛ぶつ土どと云いふなり。

○衆しゆ生じやう之の類るい是こゝに菩薩ぼさつ佛ぶつ土どは、他たの箇かた所ところとの統いつ一いつを考かへ

此こゝには、書かき下くだし文ぶんとし、口でくくる(或あるはゴシ

ツク活字)べきであらう。

○類るい ことごとくの意い。衆しゆ生じやうの存ぞん在ざいする所ところは悉ことごとく。

○感かんを為なす 果くわ報ほうをうける。

○於おいて、於おいては、とは、之これを挿さ入いすべきと思おもふ。

○定さだんで、佛ぶつ語ごの慣かん例れいで、さだんで、と訓とむ。必かならずずの

意いである。

○至し聖じやう 佛ぶつ陀だのこと。

○眞如の理に冥して あらゆる存在の眞実のすがた
と完全^{みぜん}に一体^{いつたい}になつてゐて。

○名相^{なさまう} 名称と形体。相対世界の存在。

○彼^ひと此^こと、取^{しゆ}と捨^{しゃ}と、彼此とは物の差別
せいふ。あれとがこれとが、彼岸(あの世)とが
此岸(この世)とが、取るとが捨るとがの相対

世界ではなく、の意。

○大虚^{たいこ} 極限なく広大でわだかまりの無いこと。

○萬法^{まんぽう} あらゆる一切の事象。諸法ともいふ。

○機^きに随^{ずい}ひて化^けを施^{ほどこ}す 機は教へを聞くべき人の根
機の意。化は教化すること。

○而して大悲息むこととなく 入昭和会本は、而る
にシと訓んでゐる。この方がわかり易い。

【現代語訳】 (経典原文の) 「衆生の類是れ菩薩の佛土

なり」とは、国土(衆生が所在する場所、生活の
場)に於いて述べれば清浄な場と穢れた場の区別
があるけれども、それはみんな衆生が善業をなし

たが悪業をなしたかの結果によつて淨穢が現はれ
てゐるのである。だから衆生の場合には必ず所在す
べき国土が決つてゐるのである。ところで佛陀に
ついて述べれば、その智慧はあらゆる存在の眞実
そのものと一体となつてゐて、名称あり形ある相
対世界をはるかに超脱してをり、あの世とがこの
世とが、取るとが捨るとがの差別がなく、極限
なく広大な姿をもつて身体とし、一切の事象を照
らし見る心を有してゐる。どうして名あり相ある
相対的ま存在としておし量ることが出来ようか。
また(一切の事象に執着がましいのだから)どうし
て自分が所在すべき国土が定つてゐると言へよう
か。しかるに大慈心を起して衆生が教へを聞くべ
き根機に随つて教化してやむことがない。即ち衆
生が所在するあらゆる場に姿を現はささいといふ
ことはまゐりである。だから「衆生が所在する場
は、悉く佛菩薩が教化を垂れる国土である」と言

ふのである。

11 冥合し永く → 冥合し、永く **要訂正** (説書挿入)

13 14 「彼此俱に亡ずれば山として入るべきぞく、世として避くべきぞくし」

現代語訳 「彼此の差別を無くすれば、どのやうな山) 現実を離れた隠遁生活) であらうと入るべきぞく、どのやうな世 (現実の世間生活) であらうと

避くべきぞくはるい。

126 頁

2 **ルビ** 聖 3 **ルビ** 虚

5 虚妄 いつはり、佛語訓みにすれば、こもろ。

7 **ルビ** 靈性 佛語訓み、れいしやう、りやうしやう。

7 **ルビ** 至聖 佛語訓み、ししやう。

8 大空のごとくさやりなき 戦前版には傍点がある。

傍点を付した方が可。

9 円融無礙 一切の事象があまねく融通してゐて、無

差別の心境にあり、それが全く妨げのないこと。

128 頁

5 **ルビ** 心す謹め → 必ず謹め。 **要訂正** (句点)

5 **ルビ** 君 臣

9 **ルビ** 萬法 10 **ルビ** 無極 佛語訓み、むごく。

10 **ルビ** 蒼生 佛語訓み、そうしやう。

15 個性に随ひ環境に依じて永久に ↓

15 大用 衆生を導く大なるはたらき。 個性に随ひ、環境に依じて、永久に **要訂正** (説書挿入)

127 頁

1 愚く国土の ↓ 愚、国土の **要訂正** (説書挿入)

1 **ルビ** 淨穢 至聖

4 **ルビ** 感 漏悪 穢土

11 **ルビ** 萬法 12 **ルビ** 融化 14 **ルビ** 求道 15 **ルビ** 彼ぞく此

11 12 大空のごとき御心に地上の区劃を省みさせ給ひ

いふまでもなく次の明治天皇御製を偲はれしもの。

ひさかたの空はへだてもまかりけりつち

する国はさかひあれども

5 6 四時(しじ)順行(じゆんぎやう)し、萬氣(ばんき)通(と)ふことを得(と)ふ。こゝでは論語

の「四時行焉(しじぎやうぎやん)、百物生焉(ひやくぶつせいぎやん)」、(陽貨)を参考にされたのであらう。この論語の言葉は後に出てくる管子

に比してずっと暖かな生命を感じさせるが、それでも太子と比較してみると、①太子の文には「順

の一字が入つてゐて、自然の秩序に則するといふ

気が強調されてゐる。さらに大切なことは②論語の百物生焉と太子の萬氣得通を比べてみると、

論語が一つの法則を述べてゐるだけなのに比して、もつと大きなスケールで生命のあり方を示してゐると思はれることである。

萬氣通ふことを得とは、宇宙萬物を生成する根源的(げんげん)な活動力(かどうりき)が、あまねく行きわたる、の意。

7 上行(かみあが)へば下(しも)靡(ぢ)く。こゝも論語の「君子之徳(くんし之とく)風(かぜ)也、小人之徳(こじん之とく)草(くさ)也、草尚(くさなほ)之風(かぜ)必(かならず)偃(や)ス(頰)」、を参考に

されたのであらう。

8 ルビ 自ら

12 ルビ 弘宣

14 今(いま)を懸(か)げ、法令(ほうれい)を正(ただ)しく施行(しんぎやう)する。

14 ルビ 威勢尊頭

129 頁

1 ルビ 罪賤畏敬、今行禁止、奉法聴使

2 ルビ 相子に高下処を異に、分畫、56 ルビ 易治

10 中庸、四書の一つ。天人合一を説き、中庸と徳の道

を強調した儒教の総合的解明書。

15 天壤無窮、天地と共に窮りなく、永遠に続くこと。

130 頁

1 天津日嗣、天皇の御位。

1 むた、一と共に、の意。

3 明つ御神、天皇の尊称。

7 日並皇子、草壁の皇子。天武天皇の皇子で、皇太子と

なり、持統天皇三年四月に薨去。

柿本人麿が日並皇子に深いかかはりをもつてゐた

ことは、例へば皇子薨去のあとその皇子の輕皇子

(後の文武天皇)が女騎の野に狩に行かれたとき

之に従ひ、輕皇子の傍で亡き父君日並皇子を偲ぶ

歌を作つたことによつてもうかがふことが出来る。

その折作つた有名な歌が

東の野にがきろひの立つ見えてかへれみ

す川は月かたぶきぬ

8 ひざがたの 天、雨、都、光まどにかがる枕詞。

9 あかぬさす 日、昼、照る、君、紫にかがる枕詞。

9 ぬばたまの 夜、くろ、ゆふべ、ゆめ、つき、枕詞。

9 夜渡る月の朧らく 日並皇子の薨去されたこと。

(右の二首は長歌のあとに詠まれた反歌)

10 舎人 天皇、皇族に近侍する者。

(この折の舎人の歌は二十三首であつた)

11 高光る 日にかがる枕詞。

11 国知らごまし 国をお治めにするべきであつた。

11 島の宮 奈良県高市郡明日香村島ノ庄にあつた日並

皇子の宮殿。

14 莊嚴 尊くおんそかさま。

131 頁

3 乞人 乞食をする人。乞食とは、一定の規律のもと

つき僧が人家の門に立つて食を乞ひ求めること。

7 10 若施主、善心に一の最下乞人に施すこと、猶

如未福田の相分別する所無きが如し。とは、下を夸

けて上に等しからしめて平等を明かす。言ふこゝろ

は、乞人を愛するは佛の上の敬心の重きことに等し。

等乎大悲、不求果報。とは、上を夸けて下に育しから

しめて平等を明かす。言ふこゝろは佛を敬ふは乞人

の上の悲心の重きに等しとなり。

○若施主善心に→若施主、善心に(要訂正) (鏡皇挿入)

○如未福田の相分別する所無きが如し。

花山信勝氏、小林一郎氏は、如未福田の相の如く

して分別する所無し。と訓んでゐるが、この方が

理解しやいと思ふ。

○下を挙げて上に等しからしめ 下(卑賤)に對す

る施しを取りあげて、それは、上(尊貴)に對す

する施しと等しいものだとする、の意であらう。

○佛ぶつの上うへの敬心 佛陀に對する敬心。

○乞人きじんの上うへの悲心 乞人に對する慈悲心。

【現代語訳】「(經典原文)若し施を行する者が差別する

心を無くして一人の最も卑賤な乞人に施しをする

ことは、そればかりは、如來が大慈悲心をもつて施

しをする形と同様であり、差別する心が全く無い。

——といふのは、乞人といふ卑賤に對する施しを

取りあげて、それは、如來といふ尊貴に對する施

しに等しいものだとし、二つの施の平等なること

を説明してゐる。その意味するところは、乞人を

愛する心は、佛陀に對して尊敬する心と同等の重

みをもつてゐるといふことである。

(經典原文)如來の大慈悲心と同じ心で施しをな

し、しかもその結果の良し報ひを求めない。——

といふのは、如來といふ尊貴に對する施しを取り

あげて、それは、乞人といふ卑賤に對する施しに

等しいものだとし、二つの施の平等なることを説

明してゐる。その意味するところは、佛陀を敬ぶ

心は、乞人に對して慈悲心を起す心と同等の重み

をもつてゐるといふことである。」

※(經典原文)大悲を等しくして果報を求めず。

へ昭和会本)その他全てが左のやうに「大悲を」と

訓んでゐるが、「大悲に等しく、ではなうか?」

14 「慈」下敬上天之大義也 彼の箇所との統一のため

「下を慈み上を敬ふは天(下)の大義なり」と書き

下しとし、天(下)とすべきであらう。

132頁

1 【ルビ】 萬氣 ばんき

2 事理自ら通ふ。事柄と道理がおのづから一致する。

9 開闢 ひらき明かにする。

14 【ルビ】 源 みなもと

14 133頁 1 【ルビ】 神神 かみがみ

9 みつみつし 左の語説あるも橘守部の説、みつは
御後威の約で、いつは威力。威力に満ちたの意
で久米の枕詞。——がよいと思ふ。
○満々しにて圓々しに同じ。ここは目の圓さ
まを言ひ、久米の枕詞。(宣長)

○瑞々しで、若く勇しい。(厚判)
12 いのちすぎそむ 生命を終へてしまふのが。
14 さもさし すがむにかかる枕詞。

1 那豆岐田 入記伝によれば、御陵の四方をめぐらし
御陵に廂附たる田。(御陵の傍によりそふやうに作
られた田) 御陵に近く親しい関係にある田か？

1 稲幹 船の莖。
1 もとほろふ もとほる(まっほる)の連続状態を示す。
はるめぐる。

2 どころづら ヤマノイモ科の莖草。

3 小竹の如枝 小さを竹を如つたあとの如り株。
4 神明神。
5 や、入記伝すみやがさらざるなり。気のりのしな
い様子。

5 ままをまに 入記伝生々に。すべて生とは物の未だ
熟らざるをいふ。しぶしぶに。不充分に。
5 いくだもあらずて いくばくの時間もたたり
6 がれ せれ故に。

8 錯綜 入りまじること。 9 群生
13 生々無息 生き生きとして管みが尽きることのやい
14 宣長が正確に論じたる(玉勝庵第十の巻)の本文。
「詩にみづからの悪の詩なきはかの国人のくせに
て、ただらほへをがざりて、そしくみせて、ま
ことのころのめめしきをはいひいえず、つみ
かくしたる物にこそ有けれ。皇國の哥の悪のかは
やまことに性情をのぶる道には有ける。」

3 俵たなべに 大和の方へ向つて。原文、夜麻登よまのぼり幣はに通とほにつ

きゞべは、へ。とすべきと思ふ。若波大系本その他
もへである。

3 にし 西風。

3 雲くもはなれ 雲がちりぢりに離れ離れにふるやうに。

3 離はなき居ゐりとも我われ忘れぬや 遠く離れまゐるも私は大
君おほみこと忘れようか、決して忘れはしません。

4 大和やまとへに べは、へへにする。

4 往ゆくは誰たがつま 行くのは誰の夫であらうか。ここ

では仁徳天皇をさす。

4 隠こもり水の 隠れ水の意で、下にかがる枕詞、隠れ水こもり澤さわ

の水が砂磔すなはの下を通つて流れて行くやうに。

4 下したよ延のへつゝ よは、通つての意を示す助詞。

下を通つて(人目さしのんで)先へ先へと。

6 御み軍ぐん

7 梯はたて立たの 倉くらにかがる枕詞。

7 倉くら崎さき山やまを峻たけしみと 倉崎山のあまりの峻しさに。

7 岩い掻かきが表あらわて我手わがてとらすも 岩に取りすがることが

出来できずいで、私の手を占取りなることよ。

9 妹いもと登のぼれはさがしくもあらず 愛する妻と一緒に登

れは峻しいとも感じずい。

10 深しん痛つう ひどくいたいたしいこと。

12 花はなぐはし梅うめの愛あでこと愛あでは既はやくは愛あせずわが愛あつ

る子こら

○くはし こまやがを美しさをいふ。

○こと 如しりのゴトの古形。

○子こら ろは接尾語、複数ではない。

こまやがで美しい梅の花、その梅の花を愛す

るやうに、同じ愛するのならもつと早くから愛す

べきであつたのに惜しいことをした。わが愛する

衣え通とほ姫ひめよ。(桜花に喩へ衣通姫を愛したたへた。)

14 常とこへに君きみもあへやまいさなとり海うみの近ちか津つの奇あまるとき

ときぞ

○常トコシへに 語源は、床石上に、磐石のやうに安定してゐる義から、不妥の意が生じた。

○あへやも あへ、は已然形で、反語のや、がついた形。お過ひ出来るのでせうか、いやお過ひできな、い、の意である。

○いさざとり 海、次、藻などにかがる枕詞。
○ときどきを を、は、よ、と同じ詠嘆の助詞。

○現代語幾久しく変らずに貴方にお過ひできるのでせうか。 いやお過ひできませう。 いやお過ひできませう。 海の次藻が時々岸辺にうち寄せるやうに、時々しかお過ひできな、いのですね。

※幾久しく貴方もお過ひ下さるのでせうか。 いや過つてはいたただけないでせう。 — の解説もある。

15 精微 おもむきがこまかく微妙な。

139 頁 [引用の萬葉集は卷名・番号を付すのが可]

4 天原 生れつきの眞質。

6 津つの国 摂津の国の古称。大阪府と兵庫県にまたがる。

6 船よせひ 船出の準備を整へて。

6 発出たつでも も、は、むの訛。 たちいでむ、の意。

6 母あはが目もがも 母に一目会ひたいものだをあ。

6 ルビ 文部 足人

7 あが門かどの五津いづも株むら柳やなぎ いつも母おとが恋こする産業うぶまし

つつも

○あが門の五津株柳 いつもいつを擧き出す序。

○恋こする 恋ひつつ。 岩波大系本、朝日新聞社、角

川は恋こひす。 この方が可か。

○産業うぶまし つつも 生業なまをささりながら。 朝日新聞

社、角川はなりました。

○現代語母上は表業に励んでをらぬながらも、何時も

何時も遠く防人の任に於いてゐる私のことを恋し

く思つてをらぬであらうをあ。

7 ルビ 矢作部 直長

8 幣ぬさ 神前に供へる幣帛中。

8 贖あが祈すなむ 贖物を捧げて私のことを祈つてゐるで

あらう。贖ふは、金品を出して罪をつぐまふ。

8 妹かかろしや、妻がいとしいなあ。

8 [ルビ] 又海部 五百巻

9 うつくし母にまたことゝはむ、恋しい母に再び会つ

て言葉交はすことが出来るのであらうか。

9 [ルビ] 大伴部 麻与作

10 ちが妹子がしぬびにせよとつけし紐糸にまるともち

はとがじとよ

[現代語訳] わが妻か思ひ出すよすがにせよと付けてくれ

た紐ぢから、すり減つて糸のやうに細くまつてモ

私はこの紐をとくまいと思つてゐるよ。

10 [ルビ] 朝倉 益人

14 「父母を……かくせことあり」のあと、次の「天

へゆかば……」との間に省略されてゐる歌詞。

「もう鳥の かからはしもよ 行方知らねば 察

咎を 脱ぎ棄る如く 踏み脱ぎて 行きちふ人は

石木より 成り出しんか 汝が名告らさね」

15 穴のあいた咎。

15 「天へゆかば、汝がまにまに 地まらば 大王いま

すし

[現代語訳] 天へゆくならばお前の思ふままにするがよい

が、この地上には大君がおいで遊ばす。(だから

勝手を振舞をするわけにはいかない)

15 140 頁 1 天雲の 向伏すきはみ 天雲が遠い彼方に伏

してゐるその国。遠い国。地上の果てまで。

140 頁

1 谷蟬の さ渡るきはみ 谷蟬はひき蛙。 ひき蛙が歩

き回るかぎり。陸の果てまで。

1 きこしをす お治めになる。

1 国のまほらぞ 美しい立派な国である。まほは美杯

の接頭語。ほは傑出したもの、すぐれたところ。

ら、は漠然と場所を示す接尾語。

1 かにかくに あれこれと。

1 2 ほしきまにまに 思ひのままにしなさい。

2 しかにはあらじか さうてはあままいか。

(大君がお治めにまつてをられる女派を国そのだから、ものの道理として勝手な振舞をしてはならぬ。——その私の言が通りではないうたうか。)

※長歌のあとの反歌

ひさがたの天路は遠しきほまほに家へ帰りに業そ

為まさに

5 **ルビ** 征戦

6 **ルビ** 莊重雄大

8 育くんだ

9 **ルビ** 長履

13 **ルビ** 空虚

14 **ルビ** 治らし

141 頁

6 居士が大徳を讃し 経摩居士の大きき徳を護へ。

7 「萬機に達して遍照せざることなし」 生きとし生

けるもののあらゆる機縁にたいて、あまわく智慧

の光で照らし導く。

11 片岡山の御うた P 158

11 愛妃をいたましましし御うた P 219

142 頁

1 荷はせ給ひし大御心は ↓ 給ひし太子の大御心は

太子のの語を挿入した方が明確にすると思ふ。

〈国歌と国文学〉に黒上先生が発表された際には、

この第三編は、現行版 P 74 末尾に告知するのであ

る。に引続き述べられてゐたので、その必要はな

かった。昭和五年謄写刷版に於て全体の構成を爰

へたにも拘らず、文章はそのままにしたもの。

2 **ルビ** 維摩詰

心絃共鳴

解説 P 46

3 **ルビ** 教化

4 虚空妙有

次にある著者の解説を味読して頂きたい。

7 **ルビ** 羅什

肇

8 玄旨 奥深い思想、教へ。

10 本迹思想 本地垂迹の思想。本地は佛、菩薩の真実

身で、垂迹は衆生救済のため佛、菩薩が仮りに神

や聖者の姿をとつてこの世に出現すること。

佛の三身の中、法身と報身は本地であり、化身は

垂迹である。

11 無象無智 廣大無礙の一定の姿、形をもつてゐないし、真実の智慧が充滿してゐて差別する心がない。

全く無い。

※無智は、無知に訂正すべきと思ふ。

無智 ①智慧のないこと。②故意でないこと。

無知 ①知らないこと。昏闇の心、事理を知照すること無し。②厚智表靜にして一切の分別を絶つていふ。親鸞によれば、全ては因縁

によつて生じたもので、本体は全く空である。故、そこには、知るといふことも無い。真智と無知はともに美相のすかたである、と。

(以上、中村元、織田得能による。)

P 143 行 聖智は無知にして、法身は無象

P 144 行 聖智は無知にして、

11 一切 衆賢聖応現の一切のもろもろの賢者や聖者となつてこの世に姿を現はす。

※一切の衆の賢聖が応現する——この方が理解し

12 一体不二なりと論じ、
図解すれば次の通りである。

④ 廣大無礙の法身地が—

↓ 無象無知なるが故に—

↓ 一切衆賢聖応現の本となる

(本述思想)

⑤ 厚如美相が—空無相なるが故に

↓ 能く一切有を包摂する

(空有相即の教義)

表裏せしめたのであり。(10行目)

この両者が一体不二であると論じた。

143 頁

5 微を極め化を盡す 感覺を捉へられぬ微妙さまで

極め(自行のあり方)、教化の最高を極めてゐる。

(化他のあり方)。

5 淵玄 おくふかいこと。

5 言象の測るところにあらず。言葉や形で表現し

ようとしても出来ない。

6 三空 空、無相、無願(無作)の三解脱門をいふ。こ

の三つは共に一切常有空と觀じ、相對差別の相狀が無いと空の理を明確にしてゐる。

6 二乘の議する所にあらず、声聞や緣覺には思議する

こども出まな。

6 群衆の表に超え、生きたし生けるものの世界を超

出したものであり。

6 7 有心の境を絶す、差別する心のある相對世界の

境地をはまかに超脱してゐる。

7 助茶 どんを小さなものでも大きなものでも。

助は、細い、小さい。茶は、長大の意。

8 聖智は無知にして 正しく真理を知る智慧は、一切

の差別を絶つてをり。

8 萬品 解説 P 45

8 殊形並び応ず、どのやうな姿 形でも(衆生の機

に)応じて自在に現はし、(教化する)

聖智—無知—萬品俱に照し

法身—無象—殊形並び応ず

對句とならざる。

9 至謨は無言にして玄籍弥布さ、

○至謨は、説法するすべからず。

○玄籍は、佛敎の幽玄なる教義を言葉に托して言ふ、

○布く、あまねく行きわたる。

國代論 佛敎の教理を声高く説くわけでもないが、そ

れでゐて、佛敎の教へ(佛敎の教典や説法)は、

世の中に広くゆきわたる。

9 冥権は謀ることなく動と事と會す。

○冥権は、佛・菩薩が人知りず施す絶妙なことで、

方便をいふ。

○動と事と會す ↓ 動けば事と會す。た訂正したなか

(冥根無謀而動手事會)

國代論 人知りず有してゐる佛・菩薩のすぐれた教化

のたゞでは、何かの機が発動すれば、直ちにその

事態に合致して功く。

9 10 群方を統済し、物を甫ぎ務を成す。

群は、萬(萬品、萬行)、衆(衆生)と同じ

くありとあらゆるものゝ意に用ひら小てゐると
思ふ。たゞし、萬は全体的な視野から一律的に観
てゐるのに對し、群の場合には、全体を構成して
ゐる個々には夫々異つた心や姿を有してゐるとい
ふ様に、さまざま個々をも観じてゐる趣きがあ
るのではるかからうか？

方の意味は不明。

現代語訳 あらゆるさまざまなるものを統一して同じやう

に慈み、人々の心の眼を開いて、教化の務を成し
執ける。

10 権智 実智の妙である。佛が衆生を導くための方法
としての智慧。実智は本体で、権智は用(はたき)

である。教化の妙用は権智にある。

11 徳本 徳を樹つるには則ち六度を以つて根となす。

徳本 さとりの果をもたらず因となる善徳。

六度 布施・持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六

つのすべからぬ修行。

現代語訳 さとりの果をもたらず因となる善根を確立す

るためには、六度の行が根本となる。

(前が権智を述べてゐる故、ここは実智を述べて

ゐる処であらう。)

11 蒙惑 蒙昧愚惑のものの意。

12 宗極 教へのきはみ。

12 不二 平等にして彼此の別なき絶対無差別の理。

12 衆説 もろもろの教理に關する説明。

12 本 本地のこと。解説P142

13 座 燈王に借り 説法する場所を須弥相国の須弥燈

王如来から借りたことといふ。

13 飯を香土に請ひ 説法の座に集つた人々の食事をも衆

香園の香積佛より貰ふうけたことといふ。

13 手に大千を母し 三千大千世界といふ全世界を手に

とつて見せることといふ。

大千は、三千大千世界の略である。須弥山を中心

とつて見せることといふ。

とした我々の住む世界を小世界といひ、この小世界を千個合せたものを小千世界といひ、小千世界を千個合せたものを中千世界、中千世界を千個合せたものを大千世界、と古代印度では考へた。

小中大の三種の千世界から成るので、三千世界または三千大千世界と称する。

13 室に乾象を包める 小ころ方丈の部屋(一丈四方)の中に天空の現象を現はし出す。

(以上の四例は維摩經の經典の中で説かれてゐる。)

14 迹 垂迹 解説 142

144 頁

1 [ルビ] 已登正覺の大聖 本 蓮如と冥一 迹

2 [ルビ] 萬品 衆聖の表 有心 3 [ルビ] 煩 煩

4 志益物に存す ↓ 益物を存す [ルビ] 解説 P 15 46

5 化縁 衆生を教化する因縁。佛・菩薩が此の世に現はれるのは教化の因縁によるが、もし因縁が尽く

れば即ち涅槃に入り寂靜する。

5 妙本 空極の本源、即ち維摩の本地。

5 [ルビ] 假に床に寝せり

6 文殊 文殊師利菩薩。普賢菩薩(理を司る)と共に

釈迦佛の脇侍として左側にあり、智慧を司る。

6 時を知り、旨を承けて 向疾(病急見舞)にふさはしい時機を察知し、釈尊の内旨をうけて。

7 新發 道を求めまべく新たに發心したばかりの者。

7 疾の体たる 解説 P 47 体たらしくよりけたるが可。

8 [ルビ] 本と為し、教の契る所、抑小揚大 解説 P 47

9 幽玄 理の深遠微妙で容易に知り得ないこと。

9 [ルビ] 妙奉 10 [ルビ] 聖智 萬品 梁妙 精緻

11 [ルビ] 至韻 玄籍 布き 法身大覺

12 [ルビ] 言象 13 [ルビ] 空有相即

13 朗徹 清らかにすき透つてゐる。

3 神通 超人・超自然的な不可思議で自在な働き。

3 妙用 すぐれた働き。

5 玄妙 深遠で微妙なる理。

5 ルビ 已登正賞の大聖

8 ルビ 動乱萬差 9 ルビ 衆聖の表

10 真證 真のさとり。

10 慶嘆 ほめたたへる。

10 ルビ 有心 11 ルビ 眇拳 13 ルビ 煩

14 益物に存す ↓ 益物を存す (要訂正)

1 ルビ 煩 闇黒と悲哀

2 内生 内面的な生活態度。

4 欣求 喜んで願ひ求める。

5 ルビ 真如と冥一 6 ルビ 本迹不二 空有相即 煩

14 歌はれ ↓ 歌はれて (要訂正) (旧版のみ)

15 たつる ↓ たつること (要訂正) (旧版のみ)

2 煩瑣 こまかくわづらはしい。

6 複雑相 複雑すぎる。

12 ルビ 真空妙有 肇法師の本迹 13 ルビ 片影

1 ルビ 維摩経方便品 求道者

1 四大 大は物の元。物質を構成する地、水、火、

風の四元素をいふ。地大は堅を性として物を支持。

水大は湿を性として物を包容。火大は熱を性とし

物を成熟。風大は動を性とし物を生長せしめる。

2 ルビ 譬喩

3 是の身に主なきこと地の如しとなす。是の身は、

人間の身体。即ち大地は自然の存在であつて元来

定つた所有者があるわけではない。それと同じく

肉体の主である我も単に一時的な所有者にすぎな

い、との意。へ昭和会本、是の身は主無し。

3 我をなきこと火の如しとなす。火は薪が燃えつきて

しまへば消える。そのやうに火のものの実体は存在しないと同じく、是の身も一時的な存在にすぎない。

3 4 弄をきくと風の如しとす。風はどの場かざりの一時的現象である如く、人固の身体もはかり存在である。

4 人なきこと水の如しとす。水が方円に随つて変化するやうに我が身心も一貫して保つことは出来ぬ。常に固圀の縁によつて変化する。

4 是の身は実ならず四大を家とす。この肉體は地水火風がよせ集められ依りに出来た家のやうなもの、実体はない。四大の調和が崩れれば病氣になり、一死にさる。

6 用註 木子御註 微妙 8 大聖佛陀

8 諸行無常 物心の諸現象は瞬々刻々に生滅変化するのであつて常恒不変なりとすること。

9 変易 その形体狀況が異物の如くにまざるを、變と

いひ、あたかも他の物に替つてしまつたやうにまざるを、易物といふ。

9 照眞 ↓ 照見 要訂正

照らし見る。ナとすること。

9 繫縛 つなぎ縛ること。

10 因縁所生 あらゆる事物、現象は本来実在するものではなく、生かざる因と、これを助ける縁との結合によつて依りに生じてゐる、といふこと。

11 妄幻 まぼろしのやうに忽ち現はれ忽ち消えること。

11 12 轉變 因縁によつて生起し、存在する事物が刻々に移り変ること。

12 無自性 諸法は因縁によつて依りに和合して生じたものである故、それ自体に固有の実体をもちないことといふ。

12 我空 生空、人空ともいふ。普通に我々が我と稱するものは五蘊(色、受、想、行、識)が依りに和合したものに名づけたもので、眞に我と認む

和合したものに名づけたもので、眞に我と認む

和合したものに名づけたもので、眞に我と認む

和合したものに名づけたもので、眞に我と認む

和合したものに名づけたもので、眞に我と認む

和合したものに名づけたもので、眞に我と認む

和合したものに名づけたもので、眞に我と認む

和合したものに名づけたもので、眞に我と認む

べきものは存在せず空無なることをいふ。

149頁

12 法空 萬有は因縁の和合によつて生じた仮りの存在

であつて実体なきものであることをいふ。

13 有情 生あるもの。衆生。

13 五蘊皆空 五蘊とは色(物質、身体)、受(感覺作用)

想(事物を想像する表象作用) 行(意志あるいは

衝動的欲求の心作用) 識(認識作用)の五つの集

りをいふ。我々の身心は五蘊より成るもので定つ

た本体はまぐ空無であることを五蘊皆空といふ。

14 假和合 因縁によつて仮りに和合すること。

15 十八界観 人固の存在を十八の構成要素をもつてす

る見方。即ち六根(眼、耳、鼻、舌、身、意)の六

つの知覚機官(六境(色、声、香、味、触、法の

六つの対象の世界)、六識(眼、耳、鼻、舌、身、

意の認識作用)の十八の要素。

1 空識 空(大)は虚空といふ元素。識(大)は心の

はたらきといふ元素。

1 假暫的 仮りの暫時的な。

7 微妙性

8 空薄 とりとめもないうさま。

8 枯淡 無欲で淡泊なこと。

10 三諦円融 諦は真理のことであり、三諦とは空、

中、仮の三つの真理をいふ。諸法(もろもろの事

物、事象)は因縁によつて生じたものであり、そ

れ自身の自性はなほ故、空である。一空諦。この

空は真理であるが、空といふ特殊な真理を考へて

はならぬ。空とは仮名(仮りに立てて名づけた)

であり実体視してはならぬ。一仮諦。故に空は更

に否定されねばならぬ。空亦復空といふ。因縁所

生の諸法を空するから非有であり、その非有をこ

空するから非空であり、かくして非有非空の中道

が成立する。——中諦ちゆうてい

田融でんじゆうとは、それだけのものが自体の立場を保持し
ずからも、完全に一体とまつて、互に融けあひ、

互にさまたげのまいことをいふ。

三諦さんてい田融でんじゆうとは、空・夜や、中の三觀を同一時に行つ

て、三諦が空極に於ては田融してゐるといふ道理

を觀することといふ。

10 一念三千 我々が日常起しつゝある一瞬々々のかす

かる心の中に、三千の教で現はされた宇宙一切の

すがたが具つてゐる、といふこと。

10 重々無盡法界緣起 重々無盡とは、一切萬有は相互

に無限に因連しあつてゐることをいふ。それ故に

衆生と佛、煩惱と菩提、すべて即一であり、一を

あげればそれが宇宙萬有が因連を有してをり、ま

た一の中に一切が含まれてゐると觀すること。

11 **目窟**めくわ

150 頁

1 外げん人 佛教以外の教へを信じてゐる論敵。

2 内ない觀 内省によつて心の中に真理を觀察する佛教一

般の修行法。

2 約して 一の立場からみて。

3 風は相あ互ひ觸し擊ますまももとより輕けい虛きよ自じ在ざいにして中ちゆうに遊まぶも礙げなし。

がも礙げなし。

明確に解説できまいが、一応次の通りであらうか。

この天台大師の註釈は難解で、全体によく理解で

きまい。

開代論 風は觸しれあひうちあふが、ふはふはしてゐて

中味がないやうなものであり、自由自在に空中を

とびまはつて、さまたげられることが無い。

原漢文は次の通り。

風相觸擊故輕虛自在遊中無礙。

3 壽命じゆめい 連続して息の断たぎ之のない状態をいふ。

3 大集だいじつ 大方廣大集經

4 入りて積聚しやくじゆをく出て分散ぶんさんすし。

○積聚とは、種々の要素が集つて一つのものを形成

してあることをいふ。

現代語訳

息を吸ひこんだ状態は、息が一つの形をかたち作つてゐるわけではなく、息をはいた状態は、息が散

り散りになつてもゐない。

4 5 来りて逕遊けいゆうなく去りて履渉りしやうすし。

○逕遊 道を通る。

○履渉 ふみあたる。

現代語訳

往つたり来りたりするのに、来るのに道が無く、去るのに足あともない。つまり、何処から来るのか、何処へ去つて行くのかわからない。

6 三微 三つの極小微細なもので、次の三事との対で、

水の性分をいふ。色、香、味の三微か？

6 定性 固定的な動かすべからざる本質。

6 無性 それ自体に固有の実体が無いこと。

6 三事 命氣めいき(生命の原理)、温煖あたたか(体温)、識。

11 遷移 一つつること。

12 妄まが 解説 P 148

13 映影えいえい

13 己心 自己の心。

13 諦観 明かに観すること。

14 15 四大假和合 解説 P 148

151 頁

4 外風 外の自然界の風。

4 気を積み 空気の要素を、気と見て、その気が積つ

てふるふ動くと見てゐる。

5 鞞鼓 ひろかへりうつ。

6 内呼吸する息をいふのか？

7 登淨 信仰の結果として心が登み清らかにすること。

7 明清 清と明かすること。

7 塵穢 けがれ。

7 洗滌 洗ひきよめる。

7 曲直 曲直方円

8 知見 知見道止

9 縁を假りて用を成し、縁の助けによりゆきも生ず(？)
9 数に乗じて行ふ。この世の数々の事物のすがたに融れて、それに随つて事を為す？

9 所因を詳かにすれば、生ずる因を究めてみれば。

11 四譬 風大喻 水大喻 杖 水大喻 杖

12 因縁假和合 13 窺ふ 14 釈者 脹摺

1 「第二に是身不実、一、無我を明かすなり。」

この部分は、地の如し、風の如し、水の如し、を説明してゐるのではなく、四大を別のことに例へて無我を説明してゐるところにつき、削除すべきであらう。むしろ(中略)となつてゐる、火の如し、を挿入すべきであらう。(中略)は次の通り。

「即ち地の如し。火の如しとは假なり、薪焚焼して焰を揚げて主なし。此身も假なり、東西にして主なし。即ち火の如し。」

2 地は假、四微任持して主なし。

○假 假和合のこと。仮りに要素が集つてゐる。
○四微 色、香、味、触の四種の極めて微細なもの。地水火風の四大は四微によつて構成される。

現代語訳 地は、色香味触の四微がより集つて構成して

ゐるものであり、それ自体に主体性をもつてゐるものではない。

2 五陰にして主なし。此の身も色受想行識の五陰が

仮りに集つて形成してゐるものであつて、本来の実体はない。(此の身を神つて解す。)

3 連続鼓動 つらなりたもち、ふるむ動く。

3 念々に連続して主なき。念は、外界の刺激に依じて記憶をとどめる心の働き。念々は刹那々々、刻々をいふ。此の身は、その刹那々々をつらまり保つてゐるからこそ形があるが、それ自体に主体性を有してゐるものではない。刹那が断ち切られれば無となる。(此の身を補つて解す。)

7 味識 単に表面的に理解するのではなく、その奥深

い内容を味はみ知ること。

10 無極開展

12 定性 解説P150

15 現笑動話の裡に

153 頁

9 毘瑠波羅蜜 毘瑠は忍、波羅蜜は到彼岸と漢訳する。

ざとりに至るための菩薩の修行で、困苦を耐へ忍ぶことによつて悟りの彼岸に到達する。

六波羅蜜(布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧)の一つ。

解説P40

3 忍辱 侮辱や迫害を耐へ忍ぶ、心を安らかに保つて

瞋恚(いかり)を起さないこと。

4 修行 結果を求めることなく、習性となす如くに

修行を積み重ねること。

5 若く能く我に即して無我なれば則ち苦を受くる者な

し。

我に即しての意味が不明であるが、一応次の

やうなことであらうか。

もし、自分自身に直接かかってくる件で、無我の

境地に有り得る者は、苦しみを感ずるといふこと

はない。(また、自己を意識しながら、しかも無我

の心境にも有り得る?) 原漢文次の通り。

若能即我無我無受苦者。

9 人空 我空に同じ。解説P148

12 施 惜しむ心を離れて他の者にほどこし与へる。

12 実諦 虚諦に同じ。虚妄をらざる真実の理法。

12 即ち我無我に於て不二なり。施を行ずる真実のあ

り方は、我の世界と無我の世界が一つに融けあつ

てある。といふ意であらう。

※我と無我とに於てと訓むべきであらう。

154 頁

2 不恚 恚は瞋恚の略、いかり憎む。即ち、不恚はい

かり憎まないこと。

5 内観 解説P150

6 冥想 目を閉ちて静かに深く考へる。

6 没救 ぼつがう 自己を没却すること。

12 維摩經 じもぎょう 文殊向疾品

12 有疾 うぢしやう ① 悟りのさまたげにさるる囚はれ、執着の心をもつてゐる。② 疾は病氣。

② 衆生病むが故に、我病む、といふ菩薩の心境。

13 調伏 ぢゆうふく 身口意の三業を制御して、悪をみさへ除く。

13 愛見 あいけん 特定の人に執着して慈愛の心を起すこと。例へば親が子を愛するなど。また、愛と見の二つの煩惱をいふ。愛は情意的に執着する因縁で、見は知的のものに執着する因縁。

13 愛見の大悲 あいけんのだいひ 大悲は佛の大悲心であり、愛見の場合には単に悲である。従つて愛見の悲とするのが正しい。

次の經典原文も愛見の大悲となつてゐるが、經典そのものの誤りと思ふ。太子は義疏において、愛見の悲と訂正して解釈してをられる。

15 相 さう 差別のかたち。

155 頁

78 洞徹 どうてつ 明かにさとする。

9 摩訶 まか 摩訶、甚遠、吉藏

10 中道実相 ちゆうどうじつさう 宇宙萬有のありのままのすがたは、有にもあらず、空にもあらず、空有不二の中道である

14 融化 じゆうか とする。

15 憶念 おくねん

1 煩惱 ぼんご こまかく煩しい。

1 垢穢 かうたい けがれ。

1 拂拭 はつしやく はらひぬぐふ。

6 教誨 きやうゑい 教へさとする。

8 律法 りつぽう 戒律のこと。

9 掇持 しゆうぢ 身にうけ保つ。

9 円通開展 えんつうくわいぜん 団体生活がまろやかに滞りなく開展する。

11 観修 くわんしゆ 真理を観じて修めとる。

12 諦観 たいくわん 真理を明かに観ずる。

13 隱遁 世間生活から離れ隠れ住むこと。

13 枯淡 無欲で淡泊なこと。

14 親法 心に道理を親し念する瞑想の實踐修行法。

15 顕示 明かにさし示す。

15 [ルビ] 四大の假知合

157 頁

2 形骸 中身が失はれて外形のみ残つてゐるもの。む

くろ。

2 3 無相空觀 宇宙萬有には固定的、実質的をすがた

は無く、一切の存在を空（実体がない）と観する。

3 [ルビ] 三諦円融 解説 P 149

3 融明無礙 佛語としては通常、融通無礙を用ひる。

黒上先生の独特の表現と思はれる。

そのことが滞りなく行き通ふところに生れる明る

さとい、ものごとに対して障りなく自由自在なこと。

4 徹見 徹鑿（P 160㊟）に同じ。本質を見とほす。

徹見も黒上先生の独特の表現と思ふ。P 176㊟

5 興國 国民の志気を昂め、國を盛んにする。

6 [ルビ] 痛切深刻 大聖 7 [ルビ] 求道 淨融

158 頁

2 3 一 臥せる一 汝生りけめや 漢字にルビを

君はや無き一 臥せる一 一 付した方が意

味がわかりや すい。

2 し子てる 片岡山にかかる枕詞。

2 汝生りけめや 次の二通りの解釈がある。

① 親を失ひ、親をして育つたのだからうが。

② 親をくして生れたのか、そんなことはある苦が

ない。

3 さすたけの 君にかがる枕詞。

3 君はや無き 君は妻、悪人、と解する説もあるが、

さすたけの君は主君を感じさせると思ふ。

主君が無いのか、そんなことはある筈があるまい。

はやの、やは發意。もはやではない。

5 [ルビ] 愛愛妃 8 [ルビ] 辺

11 牛小なりけめや」と人の運命→↓飢人の運命

戦前版はすべて「飢人」につき訂正すべきと思ふ。

159 頁

1 **ルビ** 群生 ぐんじゆう 8 **ルビ** 維摩經文殊尚疾品 いまいききやうもんじゆもんじゆほん

9 **ルビ** 以テ己ニ疾ニ於彼疾 もちおれおのちあはれ

10 **ルビ** 吉藏 きちざう 羅什 らし 道生 どうしゆう 肇 しやう

13 惡趣 あくしゆ 惡業の結果として生さうける迷ひの世界。地獄、餓鬼、畜生の世界を三惡趣といひ、此小に修羅を加へて四惡趣といふ。

羅を加へて四惡趣といふ。

13 智慧 ちゐ 事物の真相を照らし、惑ひを断ち切つて悟りを完成する働き。

14 兼消 けんしゆ あはせ救ふ。

14 兼消の懷なり。→兼消の懷の故なり。

原漢文は「兼消之懷故」、戦前版は漢文使用。

160 頁

2 くらべ くらべ たは接頭語。比較する。くらべる。

2 三塗 さんず 惡業の報いとして人々がが行かぬば「さらすい責

苦の所、即ち地獄、餓鬼、畜生の三惡道をいふ。 90

3 外論 げらん 解説 P 103

3 能く近く譬を取るは仁の方なり。 ほう 方でも可。

高遠を理想論でなく、身近かを例をもとにして実践をいじめよ、それが仁の道を修得する方法であ

る。

8 經語 けいご 中国の經典(論語)の中の語。

9 徹鑿 てつがく 本質を見とほす。

161 頁

2 に經典安樂行品に→↓に、經典 **闍維** (論奘挿入)

2 親近処 しんじんじょ 親しみ近づく処。

2 **ルビ** 「常女坐禪」在於闲処 つねにむすんでざぜん 修撰其心 しゆせんしん

2 修撰 しゆせん 修行してをさめとる。

3 **ルビ** 光宅大師 くわたくだいし

3 説相 せつさう 説き明かすあり方。

3 初親近処に入る しよしんじんじよ 修行に入るにあたり、最初に親し

み近づべき処。花山信勝氏は、初の親近処に入る。

と訓んでゐるが、この方が意味はとりやすい。

4 不親近ふえんしん 親あつしみ近ちかづくべきでない近。

5 本義ほんぎ 光宅大師のへ法華義記へ。

5 長行 經典の中の偈頌げじゆ以外の通常の文章の部をいふ。

56 「此の中の文を釈するに、本義は上の長行ちやうぎやうに配して重ちゆうを伴ばんりて解説す。而れども私の意は少しく安んぜざるが故に但直たよくちに頌じゆして重ちゆうを伴ばんらざるなり。」

現代語訳 經典原文の此の箇所を解説するに於いて、

光宅大師のへ法華義記へでは、前の經典の本文ほんぶんに、

一つ一つ偈頌げじゆを配当して解説してゐる。私の考へ

としては少し納得できかねる点があるので、經典の本文と偈頌を一々対応させることとく、偈頌げじゆを直接誦して味読し味識するのである。

※この偈頌は二十七行半もある長いもので、その前文に「世尊せそんは、重ちゆうめて此の義ぎ(經典の長行の意義)を宣のべんと欲して、偈げを説いひて言いはふとあるやうに、經典の長行の意義を偈頌げじゆに於て再説してゐる。

だから光宅大師は、長行と偈頌を一つ一つ対応させて解説したわけである。

※花山信勝氏は、重ちゆうぬることを伴ばんして、と訓んでゐる。伴ばんして、の方が意味がとりやすい。

6 顛倒分別てんたうぶんべつ 事理に反する意見を以て、思量し、識別する。もの事をさかさまに見、考へる。

6 8 「但し顛倒分別てんたうぶんべつより以下二行の偈は、上に常じやう好こう坐ざ禅ぜんといへるを頌す。初の一句は、禅を好むの由を明かし、次の一句は正しく上に常好坐禅といへるを頌す。」

現代語訳 「但し(私は長行と偈を一々対応させまいで直譯偈を誦して味識すると述べたが)、顛倒分別

以下の二行の讚歌は、經典の本文の「常に坐禪を好む」に対応して讚(誦)してゐる。初の一句は禅を好む理由を明かにしてをり、次の一句は、そのものすばり長行の「常に坐禪を好む」を誦してゐる。

※木子が、重を作したリこの箇所は次の通り。

長行 常好坐禪 在於困処 修攝其心。

偈頌 顛倒分別 諸法有無 是是非非 是生非生。

(初の一句)

在於困処 修攝其心 安住不動 如須弥山。

(次の一句)

9 此を捨て彼の山岡に就きて 現美の世間生活から離

れて、人里離れた山の中に於て。

10 猫ほ 応に不親近の境

12 偈頌

13 整音 ととのへせろへる。

14 夏趣 まことの趣旨。

14 洞徹 明かにさとる。

162 頁

1 統摂 すべをさめぬ。

3 法華經五百弟子受記品

4 下根人 佛道を修得する能力の劣つてゐる者。

4 一乗道 解説P 32

4 爾示 教へを説き示す。

4 領解 理解する。

4 佛恩 佛の慈悲の恵み。

4 深重 憶念

5 衣の珠の譬喩

5 有人至親友家 醉酒而臥

8 応に以下の原漢文は次の通り。

応に 有人醉酒至親友家而臥 と言ふべし。

前の漢文に於いてここも石の漢文表記がよい。

12 窮盡 説相

14 円融無礙 さはりなく融けあふ。円融とは、夫々の

ものがその立場を保ちながらも完全に一体となり、

融けあつて互に妨げがないうことさいふ。

163 頁

2 初親近処 吉蔵菩薩 法華義疏

3 天台大師 法華文句

6 解脱 生死 7 超脱

4 教化

7 一我の天地に屈分する偏倚的入生観

ただ自分ひとりのみの世界に狭くかぎつてしまふ

偏つた入生観

7 教誡 教へよとす

8 偏頗 顛倒分別ス 諸法有無 是非非実

是非非生

11 暇 教化 深甚 12 脈搏 蒼生

14 經典註疏 精微の洞察

164 頁

1 願求

4 出現しノー出現せし

5 律令 律今 8 深痛 経 動搖裸

12 泣血哀慟 甚だしく悲しみ泣きなげく

14 千重の一重も 千里のうち一重でも 十分の一でも

14 耐むる 情もありやと 心を慰めることが出来るだ

らうかと。

15 王梓 畝火 懸、にかがる枕詞

15 喧く鳥の音 へ岩我大系本へ朝日新聞社へとも

喧く鳥の音の枕詞風に考へ、妻の声に似た

声と解釈してゐるが、却て深みがない。

黒上先生はP165(67)で、畝傍の山に喧く鳥の

声も聞えずと解釈してをられる。

15 王梓 道の枕詞

165 頁

3 こそ 去年

3 相見し 妻と共に見た

3 さがる 離れ遠のく

4 衾道を 枕詞説と地名説との二あるも不明

4 引手の山 天理市中山の東方にある竜王山とかいふ

ここに妻を葬つた

4 生けりともなし 生きてゐる心地もしさい

12 懸隔 かけ離れてゐること

12 淨融

13 皇子 皇女の薨逝を悼み

14 高市皇子尊 天武天皇の皇子、壬申の乱に功をたて、

草壁皇子没後、大政大臣とまり、持統十年(AD 696)

七月十日没。

14 城の上へ 奈良県北葛城郡広陵町。異説もある。

14 殯宮 殯は、貴人を葬る前に遺体を棺にそめて仮

りに安置すること。宮は、その御殿。

1 おかおほきみ 高市皇子。

1 2 萬代に 過ぎむと思へや

萬代の後までも、亡びるまでと思はれよとか、思はれよしない。

2 天のこと ふりさけ見つゝ 玉梓 かけて俣はむ

かしこがれども

無窮の天空を仰ぎ見るやうに心にかけお徳が申し

あげよう、恐れ多いことではあるけれど。

5 義経 束縛、きつま。

6 裡に 10 11 攝受正法 11 三分 経文

13 能く萬行を撰する ↓ 備に萬行を修する 要註

勝鬘經義疏に同じやうな語句が二箇所ある。

「能く萬行を撰するの心を撰受とまし、所修の善、

理に當りて」

「備に萬行を修するの心を撰受とまし、所修の行、

理に當りて」

P 38 に於て、修、所修の行が引用されてゐる。

1 捨身より以下は別して 經典原文の「捨身」より以

下は、夫々別々に？

2 自ら放みかに奴ほしと為なる。 みづからすすんで身分を捨

つて奴隷になる。

3 今云く、今の辭釈で言ふには、花山信勝氏は今、

を、太子が参考になされた推察されるへ本義と解

してゐる。

3 4 但意を建たつること要するのみ。

太子の用ひ方が異つてゐるのみである。

4 若し身を餓虎に投ずるが如きは、（もと）本身を捨つるに在り、

○ 餓虎の譬は、（せんごう）金大明経の巻第四捨身品にある。

○ 本は、（もと）本意の意味である。

4 5 若し義士危を見て命を捨くるは、（い）命を捨つるに在り。

○ 義士の譬は、（い）論語憲問篇。

○ 意のルビは、（い）がよいと思ふ。

忠義の士が君主の危危を見て生命を投げ出す場合

は、その意の用な方からして捨命にあたる。

5 身外の物、（しんげ）身体以外の自己の所有す財物。

5 後際、（ごさい）未末世のこと。ルビは、（ごさい）。

6 無際、（むさい）無限をいふ。

6 7 又曰く、（い）金剛心を後際とせずと。

○ 又曰くは、（い）本義に曰く。

○ 金剛心は、菩薩の心が堅固で破壊すべからざるのと金剛の如くせいふ。また菩薩の最後心、菩提の

位せいふ。

金剛心は無限の力を有してゐる、との意味であり、

7 老病死を離るとは、（らんじょうびやくし）分段生死を謂ふなり。

經典原文の「老病死を離る」とは、（ぶん）分段生死（地

獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の六道に輪廻

す凡夫の生死）を離れることを示してゐる。

※ 分段生死の後に「離る」の語が省略されてゐる。

※ この語句の次に「（む）無有要易者謂、（い）要易生死也」が

義疏にはあるが、省略してあるので（中略）を挿

入すべきであらう。

要易生死とは、欲界、色界、無色界の三界を離れ

輪廻を超えた聖者の生死をいふ。

※ この箇所は經典原文を読まないとい理解困難なので、

經典原文を次に記す、（い）昭如会本に曰く。

何等為三。謂、（い）身命財、善男子善女人、捨身者。

生死後際等、（い）離老病死、得不壞常住、（い）無有要易不

可思議功德、如未法身。

捨命者。生死後際等。畢竟離死。得無辺常住不可思議功德。通達一切甚深佛法。

捨財者。生死後際等。得不共一切衆生。無盡無減。畢竟常住不可思議。具足功德。得一切衆生殊勝。供養。

7 此に得と言ふは、經典原文の「不壞常住・無有愛

易・不可思議功德・如法身」を人々に体得させるといふのは。

8 功德の法財。善を積んだ結果としての法の教へがもたらす利益。法財は世財の対。

8 世財の五家に共に有るが如くにはあらず。次の二通りの解釈がある。

① 五家は均田法の用語で、五人隣組の共有財産。
△岩波大系本

② 金銀など世間の財宝は、五家（王・賊・火・水・

鹿子）の共有物で、せわしに奪はれしむるのて、独りて使用する事は出来ない。
△花山信勝氏
△回天王存本

要するに、功德の法財は全ての人々に共有するもので、それは世財の五家の共有とは異つて、全ての人々に行きわたるもの、といふ意である。

9 供養。通常は三空や死者の靈などに供物を捧げることをいふが、恭敬、讃歎、礼拝供養など精神的崇敬の態度をもいふ。

89 一切衆生の殊勝の供養を得とは、語は少しく倒せり。尤に殊勝の一切衆生を供養することを得と言ふべし。

同八四四

經典原文の通りならば「あらゆる人々から立派な供養をうける」との意味であるが、經典の文言はいささか錯倒してゐるので「すてんでゐる一切の人々を供養することが出来」と訂正すべきであらう。

※ 得一切衆生殊勝供養

得供養殊勝一切衆生

全く独自の文に改めてをられる。漢文が可が。

10 或は文に順じて直ちに釈さば、人天殊勝の供養を得

るなり。

或は經典に従つて直接的に解釈するならば、「人

間や天上の神々はすぐれた供養をうける」といふ

ことにする。

168 頁

2 無辺 空間的に限りのないことをいふ。

2 常住 深甚

2 己身 自分自身。

6 空寂 7 群生

12 帰嚮 帰向に同じ。おもむきむかひ。

169 頁

1 永劫 永久。

3 成敗 4 萬事 8 行業 (佛語訓みせず)

10 依憑 依りたのむ。えひまうしは誤り。

10 照徹 あまねく照らしあきこかにすま。

12 三分

13 荷負

14 障礙

171 頁

1 曙光 3 三経義疏

4 維摩経義疏 煩とす。

4 大悲 佛の大慈悲心。国民大衆の悲しみ苦しみを、

自らのそれとして思ひやる心。

5 志益物に存す。↓益物を存す。要訂正

172 頁

9 經典註疏 經典の解説、説明。疏は注をもと

にして更に詳しく説明すること。

12 訓話 訓は注釈すること。話は古い言葉の意義

を解くこと。

13 微妙の脈絡

173 頁

3 常途 通常のこと。きまりきつた平凡な道。

174 頁

2 光宅大師

8 看過 見すこと。

13 本疏

13 文相 文章のすがた。

13 義理 事からのすぢみち。

13 意致 意味のつまびらがること。

13 炳然 明白さま。

15 〔ルビ〕 広大燦瑣

175 頁

1 〔ルビ〕 御疏 青趣明徹

4 概括 ひつくるめて、ひとまとめにする。

5 〔ルビ〕 選拔絶化 9 〔ルビ〕 内の光輝

10 覆蔽 おほひかくす。

10 〔ルビ〕 固執

176 頁

1 無心放任 心のゆきがなくて、あまがままに存在する。

5 定立 さだめたてる。

7 複雜転化 複雑にうつり変ること。

10 書誌学 図書を研究の対象とする学問、図書及び図

書関係事項の一般研究と、各個の図書文献につい

ての考証的研究とがある。

10 〔ルビ〕 訓詁

13 密邇 まぢかく接する。

177 頁

6 涯底 みまぞこ。根柢とよつてぬるもの。

8 〔ルビ〕 味識 14 〔ルビ〕 書

178 頁

3 〔ルビ〕 披書知昔 小みそむらぎをちかしをしろ

5 〔ルビ〕 月似古 づきいし(に)にる

11 吳竹 ①吳の国から渡来したものと、いふ、淡竹の異称。

②重竹の異称。

14 現身の 命、世、人、身にかかると、概詞

179 頁

12 直叙 まじめてひたむきすること。

180 頁

1 〔ルビ〕 味識 2 〔ルビ〕 生死 5 〔ルビ〕 求道

7 かへりみてこの↓かへりみて、この〔蘭訂世〕(詭吳)

8 感応相称 佛教語としては、衆生に機縁があるれば佛

の力が自然にこれに応じ、互に通じあふこと。

この場合は、現世にある人がまごころをもつて亡

き人を偲び、彼此相応じ心が通ひあふこと。

※佛教語辞典には「感応道交」の語はあるが、感

応相称は「はまい、木子の御創作の言葉であらう。

P 203

181 頁

6 ルビ 博綜 9 ルビ 踏躋 解説 P 9

11 ルビ 常途 解説 P 173

184 頁

182 頁

1 ルビ 微妙女性 2 ルビ 闡明

3 弛張 ゆきむことと張ること。

8 ルビ 撰取 9 ルビ 大型 味識

10 ルビ 統攝

11 ルビ 勝鬘經 12 ルビ 書偈

13 此の精神 ↓ 此の御精神とすべきであらう。

14 ルビ 找南 佛音聲

15 ルビ 書を以て義を以て南 佛音聲

15 ルビ 見し庫し覺す

183 頁

1 ルビ 解

6 向末 此のままで。従末。

7 根葉 根と葉。この場合、波斯匿王夫人が本で、勝

鬘が末。

本と末。

8 ルビ 夫人 9 ルビ 舍衛 10 ルビ 名聲

15 ルビ 南 佛音聲

4 ルビ 詞

4 秘契 ものごとの契底。

8 契當 適切にあたる。

9 假説 比喩的表現。第二義的を説明。

9 一はこれ假説。作さずして則ち止みぬ。作さば則

ち作すこと能はざることなきぎり。

現代論議 これは比喩的を説明である。これ以上説明を

加へようとは思はない。もし説明を加へようとする

れば出来まいことはいが。の意であらう。

14 比の中の文は本義に微妙に細釈

本義は光宅大師の法華義記、『本義』とすべき。

15 所謂開きて審かならざる所なり。

所謂、省略して細かく説かざり所である。

185 頁

1 [ルビ] 文

4 本義には重を分ちて解釈す。『本義』とすべき。

光宅大師のへ義記では、經典原文の散文の箇所

と偈頌の箇所を対比させ重複して解釈してゐる。

13 八音 佛が説法する八種類のすゝれた音聲。

- ① 極好音
- ② 柔軟音
- ③ 和適音
- ④ 尊慧音

- ⑤ 不女音
- ⑥ 不誤音
- ⑦ 深遠音
- ⑧ 不竭音

13 妙辯 たへまるひびき。ルビはツミようこう。

13 機 佛の教へを受け入れらるるチャンス。

13 大道に府応して

○ 大道は衆生が輪廻する地獄、餓鬼、畜生、修羅

人、天の世界。

※ 昭和会本、花山信勝氏は、俯して六道に

じてと訓んでをり、俯の字が用ひてある。

黒上先生が参考にされた大正10年刊の世界聖典刊

行会の義疏のみに府応してと訓んでゐる。

俯 ① 俯す。うつむく。② ぞごこもる。③ おる。

④ 物に就くさま。府に通ず。

六道に輪廻する衆生にびたり寄りそつて、といふ

意味である。

14 機感 衆生が善根の機によつて佛を感じる事。

14 (維摩經義疏佛國品) ↓ 方便品 [要訂正]

15 [ルビ] 甚深微妙

186 頁

8 聰察 耳がささとして物事をよく見ぬく。よく聞き、

よく思ふ。

8 爽明 何事にも明かに通ずる。道理が明かにわかる。

10 照了 智慧の光で照らしとほす。

10 深明 理を深く明かにささる。

11 性能 せいねう はたらき。

11 功用 くゆう はたらきの現はれた状態。

12 共に相成する あひまう 二つが一緒になつて徳を成就する。

14 神情兩朗 しんじやうりやう 神は心に同じ。心情がからつとしてみて

曇りのないこと。太子の用ひられた神情は、

ころもちと同じ意味ではあるが、何かもつと高

い、さはやかき精神が表現されてゐるやうに思ふ。

14 小乘の疑滞 しやうじやうぎだう まきまきなり。

小乗の人が大乘の教へに甘してもつてゐる疑惑や

ぐづつきが無い。

※諸橋徹次氏は、疑滞(ギョウタイ)とどこほること。

疑滞に同じ。と解説してゐる。しかし經典原文は

心得無疑 こころいふぎ であり、太子は、標疑曰、のやうに

疑はうたがひとして使用してをらぬるので、

經典原文に忠実に従ひ疑滞とした。

187 頁

23 解説 P. 50.

13 内解 ないげ 内は佛敎のこと。佛敎における悟り。

13 外字 げがく 佛敎以外の字句。

右に同じ。内に理解する力の深きを嘆じ、外に字

ぶ力の強さを讃へる。と解することもよいと思ふ。

14 内明 ないみやう 佛法の妙理を明かにする。

188 頁

2 勝縁 しやうえん すむれた縁。

4 金容 こんよう 金色の容貌。佛身のこと。

12 13 信受体達 しんじゆたいだつ 信仰して受持し、諸法実相を究めつく

して深く通達する。

14 涯底 がいぞう

14 微妙 びみょう

12 深甚微妙 しんじんびみょう

13 高明 こうみやう 並々よりすぐれて尊い。

190頁

12 解説 ↓ 解脱げだつ園えん (初版のみ)

13 セヤリ ↓ セヤリ 園 (傍字を付す)

191頁

8 遷化 摂受しようじゆ化益けやくの略。

13 行迹 ↓ 最終行の最下段に迹せきを付加。要訂正

192頁

6 精嚴 奥深くきびしい。

8 前章 ↓ 序説附二章に訂正すべき。

13 長迷 長い期間迷ふこと。

13 冥悟 迷ひから覚めること。

13 極聖 最高の聖者。佛のこと。

14 宿殖の善 宿世しゆくせ(過去の時代)に植うえてつれて仕つかつた善。

14 ルビ 五濁 解説P99

14 大機 大乘だいじやうの法を受持して菩薩ぼさつ來に到る機根。

14 15 六蔽 心を覆ふ六種の悪心。慳貪けんたん(むさぼり)。

破戒はかい(戒めを破る)、腹念はらねん(いかり)、懈怠けたい(なまけ)

散乱さんらん(心の統一の乱れ)、愚癡ぐち(おろがしさ)。

15 慧眼 真理を見きはめる智慧の眼。

15 峻難長遠 峻しく困難で長く遠いさま。

15 生死際無し。迷ひの世界であるところの生死しやうじのす

かたが無限につづく。

193頁

3 豊田 供養すべきものに供養すれば多くの福報をう

けるので、供養の對象を豊かき田といふ。ここで

は妙法蓮華經を、豊田とよのゐだと言つてゐる。

3 4 七百の近寿ちかじゆ転じて長遠ちやうえんとなる

七百年といふ有限の寿命が、永遠の寿命に変化する

事。

4 神業 靈妙不可思議を効果のある業。

5 同帰の妙因 同じ趣意に帰着する妙なる因。

5 莫二の大果 ニつとない素晴らしい結果。

5 衆生宿殖の善徴にして 衆生が過去世に於て積んだ

善根がかすがであつて。

5 6 神じん樹じゆ根こん鈍どん 神じんは心こころ。精神せいしんが愚おろかで暗くらく、根こん機きが鈍どん

6 六ろく弊へい 六ろく蔽へいに同じ。

9 園えん場じやう 明めいかにあらはしあげる。

9 註ちゆ疏しゆ

13 転てん迷めい南なん倍へい 迷めいを転てんじて悟ごりを南なんく。

194 頁

4 神じん根こん 精神せいしんと根こん機き。

8 輒てつ転てん ひとりがへり転てんする。

9 10 善ぜん業ごう 五ご戒かいを存ぞんず、十じゆ善ぜんを行おこなふなどの善ぜんい行ぎやう為ゐ。

10 智ち解げ 智ち的てきを了りやう解げ。

15 度ど人にん 人ひとを導みちき救すくふ。

195 頁

3 準じゆん、己おのれむを得えず、P 192 (13) の文の後に続くもの。

頃ころに一いつ乘じやう因いん果がの大だい理りを明めいかすことが出来できなかつた

ので、やむを得えず。

3 鹿ろく死し 鹿ろく野や苑えんの略りやく。佛ぶつ陀たが成じやう道だう後ご、修しゆ行ぎやう中ちゆうの仲ちゆう面めん五ご

人に對して最初の説法をさし及ぶ。現印度のベナ

ーレス市の北、サルナートの地。

3 三さん乘じやうの異い人いじんを南なんき、別べつして果かに越あぐ

声しやう聞もん、縁えん覺かく、菩ぼ薩さつ乘じやうの夫おとこ々々異いつた因いんを分ぶん類れいして述じゆつ

べ、夫おとこ々々が別べつ々の悟ごりの結けつ果がに到たう達だつする。

4 荏じん苒ぜん 歳さい月げつの次つぎ第だいにすすみ行いくさま。もの事ことがたん

だんに移うつり行いく。

4 大だい岳がくに至いたり 大だい般ぱん若じやく波は羅ら蜜みつ多た經ぎやうを説せつく時とき代だいに至いたつて。

4 菴あん羅ら 菴あん摩ま羅らの略りやく。マンゴー樹じゆの下したで。

5 物ぶつ機き 衆しゆ生じやうの機き根こん。

5 長ぢやう養やう 佛ぶつ道だう修しゆ行ぎやうを長ぢやうい期間きかんに亘わたつて助すけ長ぢやうする。

7 所しよ以えに P 193 (3) の文の後に続くもの。

卒そつに一いつ乘じやう因いん果がの大だい理りを明めいかすことが出来できなかつた

ので、その故ゆゑに。

7 別べつ跡しよ ↓ 別べつ疏しよ 要いよう訂てい正せい

三乘についての別々の説明。

7 近果 限定のある果報をいふ。七百の近奔転じて

長遠とせるの神業の近に對して言つてゐる。

8 無相 差別対立のすがたを超えてゐること。

8 中道 偏りと邪を離れた中正の道。

8 褒貶 ほめることと、しりぞけること。

12 妙用 すぐれはたらくき。

13 般若説法の時 大般若波羅蜜多經を説く時。

4 靈山 靈鷲山の略。耆闍崛山ともいふ。中インドの

マガタ回的首都王舍城の東北にそびえる山。こゝで釈尊は法華經を説いたといふ。

7 八部四象 佛陀の説法をうける八種類の者(王族、バラモン、長者居士、修行者、四天王、忉利天、

魔王、梵王)と四種類の信徒(比丘、比丘尼、優

婆塞、優婆塞)。

7 長夜日 昔日。 7 [ルビ] 五劫 解説 P 99

8 王城 王舍城。中インドのマガタ回の首都。

8 如來出世の大意 佛陀が衆生を救ふために、この世

に姿を現はされた偉大な意思。

8 三乘定執 声聞、緣覺、菩薩乘の三乘の教へに執

着する心が固定してゐること。

8 9 莫二の教 ニつとない教へ。

9 同歸の理 萬善同歸の理。解説 P 32

9 [ルビ] 南場

11 [ルビ] 漸々に解を益し

12 杯会 かなふこと。

12 萬徳の嚴軀 佛のあらゆる美徳をかゝる備へたみこと
を身体。ルビは、じんく。

13 直金の妙口 純金のやうに光明あり、すぐれて妙き
口。ルビは、しんこん。

197 頁

6 彷彿 思ひ浮ぶさま。

8 生動 生き生きとして真に迫る。

10 [ルビ] 感應相稱 解説 P 180

14 威容 威ありてたけきお姿。
14 端嚴 端正で莊嚴を。

198 頁

7 [ルビ] 弛緩

7 [ルビ] 莊重

8 [ルビ] 御製疏

11 [ルビ] 註疏

13 [ルビ] 至聖

199 頁

2 昏迷 心がみだれ惑ふ。

2 情 心のこと。

2 染著 心が外のものに染つて離れない。執着。

3 意 思ひめぐらす心の働き。

3 三毒 貪欲、瞋恚、愚痴。

3 五塵 色、声、香、味、触の五境をいふ。五境の対

象は煩惱を起さしめるので塵といふ。

3 妙理 深妙不可思議な理法。

3 殊常の相 普通とは異つた特別のすがた。

4 [ルビ] 異相 異声

4 物情 人間の心、考へ。

7 理に豊約まく。その理論に於て詳細に説いてある

ものであつたと、簡略に説いてあるものであらう

と、その全てを。

8 迷塵 煩惱に迷ふ。花山信勝氏は「塵に迷ひ」と訓

んてをり意味がとりやすいが、次の「神根不利」

といふ漢語とのバランスよりこのままが可。

8 神根不利 心と佛の教へに感応する機根がすぐれて

おこしい。

8 [ルビ] 卒かに

9 深理 深淵な道理。

9 謗心 佛法の教へを誹謗する心。

9 [ルビ] 馬心趣 解説P159

10 欣仰 欣求仰慕。

14 真心 まごころ。真実不妄の心。

15 [ルビ] 群生の迷執 大理

200 頁

3 [ルビ] 誇法 ぼんぼう 4 [ルビ] 帰棧 きせき

5 反照 はんしやう 反映する。

11 透徹 とうてつ 明かにとほる。

11 救援 きうえん 救ひとる。

11 深旨 しんし 深い趣意。

13 [ルビ] 殊常の相 しじやうのさう 異相 いさう 異声 いしやう 物情 ぶつじやう

15 端客 たんかく 端嚴なる容貌。

15 瞻仰 せんごう 尊み仰ぐ。

201 頁

5 [ルビ] 八音 はつおん 解説P185

5 化人の法 けにんのほう 人々を教化する法。

5 [ルビ] 龍む りゆうむ 7 [ルビ] 千載 せんざい 10 [ルビ] 益 やく 12 [ルビ] 附属 ふしよく

12 [ルビ] 後世 こうせい

202 頁

10 时空 じくう 時周と空周。

13 耨耨嶺山 ぬぬりやうせん 靈山のこと。 解説P196

203 頁

1 回会 かいご 同じものとまつてひとしく帰着する。

1 且の時 かつしかた 且には、かりそめ、しばらくの間、等の意味がある。

一時的な機会に於て、偶然の時に、暫くの間は、

等の意であらうか。よくわからぬ。

2 三段 經典の序説、正説、流通説をいふ。

2 四諦 しだい 苦、集、滅、道の四聖諦。

3 逗機の過 とうきのか 機と機が相応するのそのがしてしまふあやまち。

やまち。

3 後機の失 ごきあひ 機におくれるあやまち。

6 [ルビ] 感応相称 かんのうさうじやう 解説P180 [ルビ] 物 もの

14 信樂南登 しんがくなんとう 信じねがふ心を開き發する。

14 徹鑿 てつかく 深く見とほす。

204 頁

1 [ルビ] 大聖 だいていしやう 精微 せいゐ 佛語訓みにすれば、クシやうミ

2 [ルビ] 物 もの 蒼生 そうじやう 3 [ルビ] 至聖 ししやう 6 [ルビ] 深刻 しんこく

8 [ルビ] 御製疏 9 [ルビ] 五百弟子受記品

10 [ルビ] 所釈 差違 12 [ルビ] 帰趣 成佛

15 領解 さとること

15 解が人後に在りて、敢て自ら定めざるより、

智的の理解は他の人よりも劣つてゐて、自分では

あきらむがよい。

205 頁

1 如來は其の解を得るを知りて仍ち授記を為す。

原文は「如來知其得解仍為授記」仍ち為に授記す

と訓む方がよい。

1 自ら授記する中に自ら領解の義を含有す。

○自らは二度繰り返して強調してゐる。

授記するといふことの中には、自然領解の意味も

含んでゐる。

4 述成 佛がその領解は正ししと、同じことを言つて

くれること。

經典の中では通常の場合、正説↓領解↓述成

↓授記、といふ形で説かれてゐる。この箇所は

領解と述成が無いわけである。

5 にあり、内に懐ふ↓にあり。内に懐(圓) (句末)

6 授記を得るに因んで、佛から成佛の保証を得るのに

関連せしめて。

12 [ルビ] 凡常

13 [ルビ] 大聖

206 頁

4 愚人の一徳 P90参照。

4 [ルビ] 徹到 5 [ルビ] 淨融

8 [ルビ] 会して 10 [ルビ] 化導

207 頁

2 汲ましむるである。↓しむるのである。圓(初) (初版のみ)

3 深奥 おくふかいところ。

7 [ルビ] 安樂行品 9 [ルビ] 勸持品 藥王・大衆説

10 [ルビ] 娑婆 妙音

10 11 引經 經典を世の中にひろめる。

11 [ルビ] 身善行 口善行

13 三、離過 ↓ 離過行。【要訂註】(初版のみ)

15 留身(りゅうしん)の咎(とが) さしつかれるといふわざはひ。

15 身命(みんみょう)の憂(うれ) 身体や生命を犯される憂ひ。

1 下品(げひん) 能力素質の劣つてゐる部類。

1 【ルビ】悪世(あくせ) 解説P94 【ルビ】退転(たいてん)

2 是(こ)れ第三にして、これは、因の義を流通する中での

第三番目であつて。

3 退墮(たいだ) ある境地から退きもどる。

4 【ルビ】身を七じて物を清ひ命を没して人を度す。

3 4 則ち言若し能く此の四行を具ふる者は天魔も忤(すか)か

能はず。一、一、是れ則ち下品の人にして、此れに因

つて弘経の心を起し。

原文「則言若能具此四行者、一、下品之人因此」

「則ち言ふ、若し能く一、一、下品の人には此れに因

りて」と訓む方がよいと思ふ。

7 新(しん)發(はつ) 新たに發心したばかりの者。しんはちの訓(も)あり。

7 勸接(くわんせつ) 勧め近かづける。

7 品目(ひんもく) この章の名称。

8 因の義に流通する ↓ 因の義を流通する【要訂註】

因の義とは、因一の義のこと。因一の義を流通す

9 功(こう) 修行の効果。ルビはまた「いさを」。

9 報(ほう) 果報。むくい。ルビはまた「むくい」。

10 持品(ぢひん) (勸)持品第十二。

10 【ルビ】後世(ごせ)

11 白衣(びやくい) 世俗の人。

11 【ルビ】悪鬼(あくき)入身(にゅうしん)の故(ゆゑ)

11 12 【ルビ】求名(ぐみょう)の比丘(びく)の白髮(はくはつ)の

12 大忍(だいじんにん) 耐へ忍ぶ力。

13 久発(くはつ) 發心して長い向修行を積んだ徳の高い人。

15 【ルビ】請向(じやうかう)

4 【ルビ】宣流(せんりゅう)

5 【ルビ】勸励(くわんれい)

6 【ルビ】度入(どにん)

10 【ルビ】蒼生(そうせい)

210 頁

5 帰嚮 P 110 處では、おもむき向ふべしとなが、佛辞

に、ひたすら心を傾けるべしとあり、この方が可。

9 [ルビ] 並列 15 [ルビ] 混濁

15 氣韻 氣岳のある趣。

211 頁

5 [ルビ] 精微

8 表現するとき、そこに → ↓ とし、そこに (読点を)

8 [ルビ] 絛埵 11 [ルビ] 譬喩 11 [ルビ] 大聖佛陀

15 南三頭一 三乗の教へは一乘を明かすための方便を

ることとをうちあげ、絶對の一乘の教へを顯南する。

212 頁

1 [ルビ] 正説 請 2 [ルビ] 喩 4 [ルビ] 羊・鹿・牛

6 天標 広大なる目標。

9 起 大悲心 → 起 大悲心 [要訂正]

14 譬と作す、↓ 譬と作す。 [要訂正] (句点失)

14 15 安隱ニ得出 となすべき。而作是念ヲより。

213 頁

1 為にする所の人を出す。故に対象の人たちの為に、

といふことで、故に対象の人をとりあげてゐる。

1 悲意 衆生の悲しみを思ひやる心。

2 内合 譬と教典の趣意を合致させる。解説 P 117

2 二萬億佛所 無限に近いほど数多くの佛のをられる

處。

2 得度 ひとりを得ること。

3 [ルビ] 五塵 解説 P 111 [ルビ] 會著 昔日の解

5 一團提 信仰心がなくて成佛できまい者。

5 三途 地獄、餓鬼、畜生の三惡道。

5 劫の苦 無限ともいへる程の長い年月の苦しみ。

8 怖長心 おそれる心。

8 [ルビ] 五濁 解説 P 99

9 起 大悲心 → 起 大悲心 [要訂正]

13 [ルビ] 殊まゝ 15 [ルビ] 濃かに 15 [ルビ] 光宅大師

4 况論 生死流転の海に沈む。

6 核徹 核心に徹する。辞書には見当らない語であり、黒上先生の創作された語と思ふが、透徹などより

も適切を言葉だと思ふ。

6 [ルビ] 微妙 光輝 [ルビ] 概念訓話 感応相称

10 [ルビ] 大聖佛陀 11 [ルビ] 味識

13 円融無礙 それ自体の立場は保持しながらも、而も完全に融けあつて何らの互にさまたげのないこと。

3 法説 佛法の理法を一般的に説明すること。

4 譬喩説 佛法の理法を譬喩をあげて説明すること。

6 「三には上の法説は、――」

[三には] は、譬と法説と異なること三有り々の説

明の中の第三であり、この箇所には直接関係しない

語句なので削除すべきと思ふ。

6 「三には上の法説は、衆生大機なきが故に、我涅槃

に入らむと欲すと云ひ、而るに此中では但子、――」

次のやうに訓むのがよいと思ふ。

「上の法説には、衆生大機なきが故に我涅槃に入らむと云へり。而るに此の中には但子は――」

3 徹照 明かに見とほす。辞書には見当らない語。

7 甚縁 うるはしい因縁に結ばれてゐること。

1 [ルビ] 唯佛是眞 2 [ルビ] 黒闇

6 金口 黄金の如く光り輝く口の意で、釈尊の説法。

6 羅睺羅 釈尊の息子。十大弟子の一人に数へられ、密行第一と称された。

9 眼交に 眼と眼の間。眼の前に。

10 もとま わやみに。しきりに。

12 [ルビ] 銀も金も

7 言葉ぞー言葉せ [集訂] 言葉ぞの訛。

8 わかからぬに 私故に。私のことがもとで。

9 **ルビ** 吾妹子 思はり

10 吾ぬとりつきて 我に取り違つて。

13 みつら 上代の風俗で、男子が成年に達すると髪を

左右に分け耳のところで輪にして束ねる。

14 せすふ くるふりは否定の助動詞。

219 頁

1 難波門 難波の港。

1 神さぶる 古めかしくて神々しい。

14 誅ぶ 死者の生前の徳をほめてその死を悼む。

15 斑鳩の富の井の水 生水か多くにたげてましもの富の井

の水

右のやうに記した方が意味かとりやすいと思ふ。

〇 ッ たげ は、飲食させるの意。

歌の大意は、膳夫人は所詮は生きながらへること

が出来なかつたのか、それならば飲みたいと

欲してゐた斑鳩の富の井戸の水を飲ませてやれば

よかつたものを。

220 頁

10 人生観を又雄大悲痛 ↓ 人生観を、又 **詭** (詭異)

224 頁

2 **ルビ** 是を 乍ち 3 **ルビ** 睦む 事理

5 **ルビ** 三宅 四生の終焉 萬国の極宗なり

9 **ルビ** 萬氣 10 **ルビ** 靡く

11 自から ↓ 自ら かの迷夜名は削除すべき。

12 **ルビ** 群腐百寮 治むるの本は

225 頁

1 位次 位階の高下による座席の順序。

1 **ルビ** 百姓 (坂本木郎氏のひやくしやう) が可か)

3 餐 むさほり食ふ。

5 **ルビ** 便ち 6 **ルビ** 焉に 7 **ルビ** 徴心し 8 **ルビ** 詔ひ 許る

8 鋒劍 すまどい劍。 8 9 倭婚 こひへつらふ。

11 **ルビ** 任掌 監れ 11 頌音 ほめうたの音楽。

12 奸者 よこしまな者。 12 禍乱 世の禍ひや乱れ。

- 14 ルビ 社稷 しゃよく
- 15 ルビ 靡 な

2 ルビ 善悪成敗 ぜんあくせいばい

4 念 ねん ううみ怒る。 4 睡 し 眼をつりあけて怒る。

9 日頃 ひころ ↓ 日者 ひじやう 他の文献は全て日者 訂正すべき。

11 ルビ 国司国造 くにつかさどくにまき (坂本大郎氏のくくし、くくざう)

12 ルビ 両主 りやうしゆ (か) (か) (か)

12 率土 そつと 国のうちことごとく。

12 兆民 ちやうみん 多くの民。 12 ルビ 主と為す しゆとゐす

13 賊斂 かくれん 税を割りあてとりたてる。

14 ルビ 諸病 しよびやう 疾 が 瘵 が 15 ルビ 曾て かつ 喫り あつが

2 ルビ 嫉妬の患 しつとのかん 4 ルビ 千載 せんざい

4 聖賢 ↓ 賢聖 けんせい

6 ルビ 私 わたし 公 あほう 恨 うらみ 憾 うらみ 8 ルビ 情 じやう

9 ルビ 閑 ひま 10 ルビ 農桑 のうそう 14 ルビ 辞則 じまね 理 り

